

教会学校教案誌

2006.10.11.12月号

日本キリスト改革派教会
中部中会教育委員会

No.23

2006年10～12月カリキュラム（第23号）

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句	対 応 表
	単 元 の 目 標			
10月1日	洗礼を受ける主イエス	マタイ3:13-17	ガラテヤ3:26-27	
	罪人と等しくなられた主イエスを与えられている幸いを知ろう			
10月8日	荒野での誘惑	マタイ4:1-11	ヘブライ2:18	
	私たちのために誘惑に打ち勝たれた主イエスの恵みを知ろう			
10月15日	弟子の召命	マタイ4:18-22	マタイ4:19-20	45
	主イエスに召されて、主イエスの弟子とされた喜びと使命に生きよう			
10月22日	幸いの説教	マタイ5:1-12	マタイ5:3	
	心貧しい者の幸いとは何か。主イエスと共にある幸いに生きよう			
10月29日 宗教改革記念	思いわずらいからの解放	マタイ6:25-34	マタイ6:33	
	御父を信頼し、神の国を求めて、思いわずらいから解き放れて歩もう			
11月5日	人をさばくな	マタイ7:1-6	マタイ7:1	
	赦されて、私たちも赦す者として生きよう。互いに仲良くしよう			
11月12日	岩の上に家を建てる	マタイ7:24-29	マタイ7:24	55
	キリストの御言葉こそ人生の土台である。御言葉を行う人になるう			
11月19日	一羽の雀でさえ	マタイ10:26-31	マタイ10:30	
	神に価高く尊いものとして愛されている幸いを知ろう			
11月26日	重荷を負う者への招き	マタイ11:25-30	マタイ11:28	
	主イエスのもとにある平安に安らぎ、主イエスのくびきを共に負おう			
12月3日 アドベント	待降節・平和の主	イザヤ52:7-10	イザヤ52:7	
	平和の主の降誕を喜び、平和を告げる喜びに生きよう			
12月10日 アドベント	待降節・真の羊飼い	エゼキエル34:1-16	エゼキエル34:11	
	真の羊飼いを与えられ、真の羊飼いに養われることを喜ぼう			
12月17日 アドベント	待降節・大いなる光	イザヤ9:1-6	イザヤ9:1	
	大いなる光として来られた方のみもとに進み出よう			
12月24日 クリスマス	降誕祭・御子の降誕	ルカ2:1-7	ルカ2:6-7	
	へりくだって生まれ、飼い葉桶に寝かされたキリストを喜び祝おう			
12月31日 年末	少年イエス	ルカ2:41-52	ルカ2:52	
	へりくだられた神の子が御言葉に親しまれた。主イエスにならおう			

※「対応表」欄は、『神の救いの歴史』（日本基督改革派教会教育委員会発行、1999年）の該当する単元を示しています。

も く じ

2006年10・11・12月カリキュラム

まえがき	中山 仰	4
巻頭説教	相馬伸郎	5
日曜学校・教会学校訪問		
中部中会中高生会の紹介	辻 幸宏	8
教師会の学びのために(2)	辻 幸宏	10
教師の声	玄元清子	13
教会学校教師研修会のご案内		15
副読本のご案内		16
自由献金のお願い		18

聖書研究・説教展開例・分級展開例

10月1日	20
10月8日	27
10月15日	34
10月22日	41
10月29日	48
11月5日	55
11月12日	62
11月19日	69
11月26日	76
12月3日	83
12月10日	90
12月17日	97
12月24日	104
12月31日	111
小学科上級展開例資料	118
成人科	石丸 新 121

いのちのパン（こども聖書日課）

2007年1・2・3月カリキュラム	141
2006年度年間カリキュラム	142
執筆者よりひとこと・あとがき	144

まえがき

中山 仰（東広島伝道所宣教教師）

子供に語ることは、大人に語るより難しいことです。大人はある程度聞く耳を持っていますから、足りない所を補って聞いてくれますし、説教者に優って受け取ってくれることさえあるでしょう。ところが、子供はその点正直です。分からなければ、すぐに違うことをし出しますし、興味を持たなければ、心ここに非ず状態となることは、皆さんも経験しているのではないのでしょうか。中高生なら何とか付き合ってくれても、幼児科、嬰兒科ではそうはいきません。その辺が、教会学校の奉仕者の悩みであり、工夫のしがいのあるところです。

ですから第一に大切なことは、子供が興味を持つかどうかの判断は、単に分かり易いかどうかではなくて、私は「感銘」するかどうかであると思います。細かいテクニックではなくて、一番肝心なことは、どれだけ話に感銘するかではないのでしょうか。語る言葉である聖書のテキストから、まず語る前に、どれだけ自分でその箇所から福音を読み取っているかであると思います。そうしたら、語るときに喜びにあふれて生徒たちに語るができます。当然、子どもたちも引きつけられるでしょう。

次に、どのような方法によって説明するかです。私が神学生であった時、宝塚教会に派遣されました。ここでは教会学校ではなくて、礼拝説教を担当した時の説教批評です。説教をどのように語るか、伝えるかは、大人の礼拝でも子供の礼拝でも変わらないと思います。今は亡き蔭山博長老の的確な批評で、感謝していることがあります。「私は海が好きだ、太陽の光を映し、刻一刻と変化する美しさは何ものにもたとえようがない。その美しさを伝えるときに、ただ美しいとか、ただきれいだとか何回言われても、いったいどのように美しく変化するか相手には分

からないでしょう」と言われたことです。

では最後に、具体的にどのように臨むのかということ。子どもたちには小手先のことで通じません。真剣勝負で、取り組みまなければならないでしょう。

取り組み方としては、子どもたちの心を理解すること、子どもと同じ目線に立つこと、子どものように素直な驚きと共感と興味をもって物事を眺めること、探求することです。たとえば、男の子であったら、大好きな昆虫採集で、カブト虫の構造や習性などを友だちに説明する時は、まさに相手に感動を伝えられるのです。それは虫たちのことをよく知っている上に、虫が大好きだからできることです。また女の子でしたら、美しい洋服やお菓子のおいしさ、時には格好の良い男の子をどのように表現するか、という臨み方です。「好きだ」だけでは相手に伝わらないでしょう。これと同じ臨み方で、聖書を語るためには、当然聖書を食べるぐらいによく読んで味わわなければなりません。その上で初めて、注解書や参考書を読み、時には牧師や信仰の先輩たちに聞き、さらにめい想して初めて語るための原稿をつくることになります。

かつては私たちも子どもでした。その時代のことを思い出しつつ、子どもに向かうことで、大人として上から見るのではなく、子どもにむしろ教えてもらうという視点にたって、聖書に親しみ、共に主イエスの恵みと神の愛に触れて成長していきたいと願っています。教会学校を奉仕される先生方、兄弟姉妹の方々の努力に心から感謝します。忙しい合間をぬって、幼い魂の救いのために準備する労を主イエス・キリストがねぎらい、励まして、力を与えてくださるように祈っています。

（前清和女子中・高等学校宗教主任）

「あなたはよい土地に落ちた種である」

—マタイによる福音書13章1～9、18～23節による説教—

相馬伸郎（名古屋岩の上传道所宣教教師）

その日、イエスは家を出て、湖のほとりに座っておられた。すると、大勢の群衆がそばに集まって来たので、イエスは舟に乗って腰を下ろされた。群衆は皆岸边に立っていた。イエスはたとえを用いて彼らに多くのことを語られた。「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種は茨の間に落ち、茨が伸びてそれをふさいでしまった。ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。耳のある者は聞きなさい。」

（マタイによる福音書13章1～9節）

「だから、種を蒔く人のたとえを聞きなさい。だれでも御国の言葉を聞いて悟らなければ、悪い者が来て、心の中に蒔かれたものを奪い取る。道端に蒔かれたものとは、こういう人である。石だらけの所に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて、すぐ喜んで受け入れるが、自分には根がないので、しばらくは続いても、御言葉のために艱難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう人である。茨の中に蒔かれたものとは、御言葉を聞くが、世の思い煩いや富の誘惑が御言葉を覆いふさいで、実らない人である。良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて悟る人であり、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶのである。」

（マタイによる福音書13章18～23節）

「種まきのたとえ」は、ヨハネによる福音書をのぞく三つの福音書に記されています。一度、聴いたら忘れられない、はっきり、くっきりとしたお話です。もともと、「たとえ話」というのは、聞き手の理解を助けるために語る方法です。むつかしいたとえ話ということは、我々の常識からすれば、言葉の矛盾のように感じます。ところが、主イエスが語られたたとえ話には、その常識が通用しません。

確かに、このたとえ話を讀むだけで、私どもは、まさに絵画的なイメージすら浮かんでまいります。子どもに語るるときなどは、それこそ、それぞれの場面を描きだしてあげられたら、記憶に鮮明に残るでしょう。鳥がサーと舞い降り

て、パクリと種をついばんで逃げ去ってゆく光景。小さくても青々と芽生え始めた芽がしおれて行く光景。明るい日差しを浴びて成長し始めた芽が、だんだんと茨が伸びて行き、ついには芽を覆って、日陰の下で立ち枯れてしまう麦の穂の光景……。

しかし、同時に、たといそれが成功しても、それだけで、自動的に子ども達に福音の真理が届いたことにはならないと思います。

主イエスのたとえは謎めています。この謎は、ついに謎のままで終わってしまう人もまた少なくありません。どうして謎のままになってしまうのでしょうか。理由は、ただ一つです。

それは、心が鈍いからです。悔い改めて聴かないからです。信じて聴かないからです。信仰をもって聴くときに、たとえば、神の国の奥義を鮮やかに啓くのです。ですから、主イエスは、舟から身を乗り出さんばかりに、「**耳のあるものは聞きなさい**」と語られたのです。

それなら、私どもは改めて信仰をもってこの物語を読み、そして語りしたいと思います。

わたしは、毎週、説教を始めるようになって20年になりますが、このたとえを説教で、求道者との個人的な学びの折に、あるいは求道者がおられる集いなどで、何度も聞いてまいりました。「自分は、道端に落ちた種かもしれません。せいぜい、道端かもしれません。」

思えば、このたとえを初めて聴いた方のなかで、「自分は、良い土地に落ちた種かもしれない」と考えられた方は、残念ながら一人もおられませんでした。他人事ではなく、わたしもかつてはそうでした。

しかしそのような私も恵みによって洗礼を受けることができました。やがて、このたとえの理解は、徐々に修正されてまいりました。それは、恵みの信仰、私どもの教会の言葉でくつきり申しますと、予定の信仰、選びの信仰が深められて来たからです。

いったい、洗礼を受けたということは、どういうことなのでしょう。それは、ローマの信徒への手紙第6章の言葉で申しますと、「**神に対して生きている**」人間となったということです。「**罪に対しては死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて**」いるのです。実際の洗礼の礼典を施すのは牧師ですが、洗礼の礼典を現実のものとするのは、神ご自身です。言うなれば、父と子と聖霊なる御神は、第7章4節の言葉を用いれば「**神に対して実を結ぶようになるため**」に洗礼を施してくださるのです。それは、神ご自身が、主イエス・キリストを通し、聖霊によってご自身の前に、ご自身に対しての実り、霊的

な実りを結ばせること、生み出すことなのです。

そうであれば、このわたしという存在、あなたという存在の丸ごとが、主イエス・キリストにおける神の実りそのものを意味します。つまり、洗礼を受けたあなたは、今、神の実りなのです。

ですから洗礼を受けた者として主イエスのこのたとえを改めて聴き取る時、私どもの眼の前に、新しい幻がいきいきと描き出されます。それは他ならない自分自身が、「**100倍、60倍、30倍**」の豊かな実を結ぶ存在であるという、すばらしい幻です。

また同時にこの幻は、種を蒔かれるその人に他ならない主イエス・キリストが見てくださる、私どもキリスト者の姿なのです。信仰とは、この主イエス・キリストが信じて描き出してくださった私どもの姿を信じること、受け入れることです。つまり、わたしが、良い土地に落ちた種であることを信じることです。

しかしその一方で、洗礼を受けて間もないキリスト者ならいざ知らず、すでに、艱難を受けて教会生活につまづいた経験、世の思い煩いや富の誘惑で教会中心の生活を貫けなかった経験……、いへ、ここに描き出されていないまだまだ多くの惨めな経験を味わってしまった方も少なくはないはずです。しかしだからこそまた、このたとえば、私どもの信仰生活を常に恵みをもって正す力、あるべき姿へと引き戻す力を持っているのです。フィリピの信徒への手紙第2章12節にあるように「**恐れおののきつつ自分の救いを達成するように努め**」るように、励ますのです。

わたしどもの教会は、幼児洗礼を重んじます。生まれたばかりの赤ちゃんに洗礼を施します。この幼子が将来、どのような大人に成長するのか、教会員を初め牧師も、そして契約の親たちも分かりません。極端な例ですが、大変な犯罪者になるという可能性もゼロではないと思いま

す。しかし、私どもは、親の信仰と誓約に基づいて、喜んで洗礼を施すのです。そしてそれによって、幼子の上に天が開け、主イエス・キリストのものどされ、主に結ばれる恵みが実現することを信じるのです。それは、この幼子を「**良い土地**」として信じる信仰を誰よりも親に、そして教会に求められるのです。

そうであれば、私どもが子どもたち、とりわけ契約の子達に、御言葉を説くときの「語り口」すら変わってくるかもしれません。「あなたは神さまに選ばれて、説教を聴いている。礼拝をささげている。今、イエスさまは、先生を用いて皆に種を蒔いておられる。そのお話を信じて聴いたら、神さまがすばらしい実を实らせてくださるからお楽しみに！」そのような福音を告げ、祝福を宣言することができるはずです。「君たちは、まだ、右に行くか、左にそれるか分からないからね。途中で鳥に食べられるかもしれないよ、途中で枯れてしまうかもしれないよ、そんなことがないように、しっかり聞きなさい。」というのではないはずです。

私どもの信仰の旅路は、主の日から主の日へと、そのようにして天国を目指しての歩みです。「安心して行きなさい。」と派遣されて始める一週が、どのような実りを結ぶのか、具体的には誰も分かりません。しかし、いよいよ実る歩みとして祝福のうちに神は、定めておられます。しかしそこで私どもがわきまえ続けていたいことがあります。使徒パウロは、ガラテヤの信徒への手紙第3章3節の中でこう言いました。「**“靈”によって始めたのに、肉によって仕上げようとするのですか。**」ガラテヤのキリスト者たちが、律法を守ることへと傾斜して行ったのです。しかし、他人事ではありません。「自分はちっとも実らない」とあせって、自力でがんばる必要はありませんし、してはならないのです。洗礼へ、信仰告白へと導いてくださったの

は、聖霊なる神の御業であったはずで、これを完成してくださるのも同じお方です。聖霊のお働きにあずかることなしに、神に対して実らせるまことの実り、つまり霊的実りは、ありません。

何よりもこのたとえ話は、主イエス・キリストが舟から身を乗り出すようにして語られた御言葉であります。実際に、舟から身を乗り出したら、海に転落して大変危険です。しかし主は、十字架の上からも語られたのです。ヨハネによる福音書第12章において主は仰せになりました。「**一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。**」まさに、語られたお方こそが、一粒の麦、種となられたのです。

今、統計上では世界中に20億人余りのキリスト者がいると言われています。2000年の歴史から見れば、既に数え切れないほど、驚くばかりに「**多くの実**」であると思います。そのかけがえのない実りがわたしてあり、あなたなのです。この種の命の力が、今年もまた私どもを慰め、豊かに生かし、実させます。

そのために、日々、御言葉と祈りに慣れ親しむ生活をつくってまいりましょう。それが、「**霊で仕上げる**」道筋だからです。それは、主の日の礼拝式から始められ、主の日の礼拝式を目指してなされる営みです。

こうして、自分自身をはじめ、日曜学校に来る子ども達も、豊かに実を結ぶ幻を見ることができるようです。信仰の望みを新しくし、大きくして励むことができるのです。

私どもの奉仕もまた、必ず実ります。やがて実ります。既に実っています。主イエスのいのちの御言葉は必ず大きく実るのです。

アーメン。

中部中会中高生会の紹介

中部中会青年育成委員会 辻 幸宏

1. はじめに

通常は、各個教会・伝道所の日曜学校・教会学校が紹介されていますが、今回は、中部中会中高生会を紹介させていただきます。中部中会は現在、24教会・伝道所があります。その中にあって、中高生・学生・青年の教育を、青年育成委員会（4名）が担っています。

中高生会は、以前は「連合高校生会」でしたが、数年前から役員会を構成することができなくなり、昨年「中部中会中高生会」と名称を変更し、高校生のみならず、中学生、さらには小学生高学年の子どもたちにも門戸を広げ、継続的な教育と交わりを行えるようにいたしました。そして、中高生会としての集会は、毎年、下記の三つの集会を持っています。

- ・春の修養会（今年は3月28～29日）
- ・夏のキャンプ（8月1～3日）
- ・信徒研修会（中会全体の修養会）における中高生クラス（9月17～18日）

春の修養会と夏のキャンプは中高生を対象とした集会ですが、信徒研修会は中会全体の集会（例年約400人参加）です。中高生会は、研修会の別プログラムとして開催されています。この点、前二つの集会とは、多少趣が異なるかと思いますが、現住倍餐会員が約1200人の中会において、子どもたちが中会の交わりを覚えることができる集会となっています。

2. 夏のキャンプ

中高生キャンプは、例年、7月末か8月上旬に二泊三日の日程で、雀のお宿キリスト教会館で行っています。今年も8月1日(火)～3日(木)に行われました。雀のお宿では、食事の準備なども

自前で行うことが求められるため、中会的にボランティアを募り、協力していただいています。

近年は、キャンプの参加者も減少していましたが、小学生の高学年の参加も認めたことと、さらには各教会・伝道所の協力もあり、今回は、小学1年生から高校3年生まで、11の教会・伝道所より、約30名の子どもたちが集いました。教師・奉仕者・ボランティア・保護者などを含めれば、40名を超える大きな集会を行うことが許されました。キャンプとしては、中高生が対象なため、小学生（特に低学年）の子どもたちにとっては、学びの時間は退屈な時であったかも知れませんが、小学科の分級を行いフォローに努めました。また、小さな子どもたちが集うことにより、中高生も、子どもたちの世話をしてくれました。その結果、学びにおいても、食事やキャンプ生活に関わるすべてにおいて、受講者として受け身の立場に留まることなく、お兄さん・お姉さんとして、小さな子どもたちの世話も行い、積極的にキャンプに参加している姿勢が出てきたのではないかと思います。

今年のテーマは「信仰告白へ導かれるために」です。中高生の時期にしっかりと信仰告白を行い、キリスト者としての歩みをスタートすることを意識したテーマです。特に今回は、教師が講師として立てられて語るのではなく、中高生と同じ目線に立っている青年たち(木村正志兄、川越教会。ヨシユア＝ラウア兄、北神戸キリスト伝道所)に信仰の証しを行って頂きました。教師が子どもたちに対して基本的な教理を教えることは大切ですが、自分たちの少し前を歩んでいる青年たちの証しを聞くことにより、

中高生にとっては、より身近に自らの信仰を考
えることが出来たのではないかと思います。

3. 今後の目標

中高生会に対する継続的な信仰教育を行うた
めには、年に三回の中会的な集会の他にも、毎
週・毎月行う定期的な集会を行うことが求めら
れています。しかし、現状では中会として青年
担当の専属スタッフがないため、また教師が

多くの委員会を兼任している現在、こうした試
みは、各教会・伝道所（あるいは地域）に担っ
て頂く必要があります。そのために青年育成委
員会としては、三つの集会の開催に留まること
なく、各教会・伝道所ともきめ細かな連絡を取
り合い、子どもたちの信仰の成長のために、時
間を割いて、協力し、祈り続けなければならない
と思っています。



全体集合！



開会礼拝時の様子



讚美の様子



高校生



バーベキュー



遊んでいる子どもたち

御言葉を語ること・フォローすること

辻 幸宏 (『教会学校教案誌』編集委員)

「本誌の基本方針～教会（日曜）学校像について～」（相馬伸郎編集長執筆、第21号掲載）（以下、基本方針）を展開するための学びを、前回から三回のシリーズで掲載しています。今回はその二回目です。基本方針は、下記のとおり六つの項目に分けられていますが、今回は3と4を取り上げることとなります。

〈基本方針〉

1. 子どもの「礼拝共同体」としての日曜学校
2. 分級中心より、礼拝式中心
3. 子ども礼拝式における説教の重要性—日曜学校の目標—
4. 説教の完成としての牧会—分級の目標—
5. 教会形成の一環としての日曜学校—教師会と教師—
6. 伝道する日曜学校像

1. 御言葉から信仰へ、信仰から祈りへ

基本方針において、日曜学校の目標は、「祈りへの生活へ導くこと」、「信じることは祈ること」であると語ります。この目標は、ただ日曜学校に留まることなく、すべての神の民、キリスト者の目標でもあります。このことは、ウェストミンスター小教理問答問86において確認することが出来ます。

問 イエス・キリストへの信仰とは、何ですか。

答 イエス・キリストへの信仰は、救いの恵みです。それによって私たちは、救いのために、福音において提供されているままにキリストのみを受け入れ、彼にのみ依り頼むのです。

「依り頼む」とは、まさに主の御働きを全て信じて、主に委ねる祈りと共にある信仰生活そのものであります。自分の力で生き抜くのではなく、全てを統治し支配しておられるお方に生活における全てのことを委ね、依り頼んで祈りつつ、主によって与えられている環境、賜物などを用いて努力することにより、主の愛と恵みに生きる者へとされていきます。

そしてさらに小教理問答では、主は救いに至るあがないの祝福を私たちに伝える外的手段として、キリストの規定、特に御言葉・礼典・祈禱をお与え下さっていることを教えています（ウェストミンスター小教理問88）。つまり、信仰が与えられ、主にすべてを委ねた祈りの生活に導かれるためには、祈りと共に、御言葉と聖礼典が共に必要なものであり、ただただすべてを主に委ね、熱狂的に主に祈り求めればよいものではありません。つねに、御言葉と共に祈る生活が求められているのです。

もちろん、ここの教理問答の答えを正確に語るならば、御言葉と聖礼典と共に祈る生活であります。しかし、日曜学校においては通常、礼典（洗礼と聖晚餐）の執行は行っていないでしょう。しかし私たちは、聖礼典のことも常に意識し、信仰告白・洗礼と主の晩餐に繋がる神の民の形成を目指したものとなるよう心がけなければなりません。

また、ウェストミンスター小教理問98は、次のように語っています。

問 祈禱とは、何ですか。

答 祈禱とは、神の御意志に一致する事のた

めに、キリストの御名によって、私たちの罪の告白と神のあわれみへの感謝に満ちたお礼を添えて、神に私たちの願いをささげることです。

つまり、御言葉の朗読と御言葉の説教抜きには、罪の告白も悔い改めもないのであり、御言葉の説教により、罪と救いの提示がしっかりなされなければ、主なる神さまへの信仰も与えられず、真の神への祈りに促されることもありません。このことを御言葉の説教を語る教師の立場から語りますと、主なる神さまによる救いの恵みだけを語っていても真の悔い改めを迫る説教とはなっていないのであり、恵みと共に、人間自身、そして私たち自身の罪の提示と悔い改めを迫ることも必要なのです。

このような、日曜学校の方向性は、礼拝指針における教会学校の目的を確認することにおいても、理解することが出来ることかと思えます。

礼拝指針第28条（教会学校の目的）

……（教会学校の）目的は、キリスト者の成長と完成であって、それは、主イエス・キリストにおいて啓示された神への信仰・キリストに対する救い主また主としての告白・キリストとの生命的交わり・キリスト者生活と教会員生活とへの明確な献身・教会の全活動への参与などによるのである。

つまり公的神礼拝と別個に教会学校、あるいは日曜学校が存在してはならないのです。そして、教会学校は、公的神礼拝の補助的な働きが委ねられています、特に日曜学校においては、公的神礼拝と切り離して考えることは出来ないのです。

こうしたことを考える時、必然と、日曜学校の礼拝式において語られる御言葉の説教が重要となってくることを理解して頂けるかと思えます。言い換えれば、日曜学校の礼拝式が、御言葉中心の充実したものにならないければ、信仰の

継承はおろか、信仰の養いを受けた教会役員を育てることも困難となり、教会形成・教会成長はあり得ないのです。

そして、一人の神の民が、御言葉の養いにより、信仰が確立していくことにより、自ずと、信仰告白へ、祈りの生活へと導かれていくのです。御言葉と信仰を抜きにして、主に全てを委ねた祈りの生活は、あり得ないのです。

2. 牧会としての役割を担う分級

以上見てきましたように、礼拝式において、御言葉の説教が語られることにより、聖霊の働きにより、信仰へと導かれます。

しかし、概して御言葉の説教は、教師の側から子どもたちに対して一方的に御言葉が届けられるのであり、子供たちは、一人ひとり聖書の理解度が異なりますし、さらには信仰の度合いも異なります。さらには、契約の子どもであれば、家庭において家庭礼拝などにも与えることにより、さらなる聖書教育の機会がありますが、家族の中で一人、日曜学校に来ている子どもであれば、そうした機会は少なくなってしまう。

だからこそ、分級において、一人ひとりの聖書の理解度や信仰の度合いを確認しながら、共に祈る牧会が必要となってくるのです。

ですから、私たちは、分級といえ、礼拝式における御言葉の説教の理解を助け、整理することに目が行ってしまいます。御言葉の解き明かしの理解を確認することも必要なことです。すべての子どもたちが同じ聖書理解に立たなければなりません。

しかしそれと同時に、教師が一人ひとりの子どもたちと向き合い、彼らの魂に目を向け、語り合い、祈りあうことが必要なのです。従って、分級の時間は、教師が教えるのではなく、教師が子どもたちの声に耳を傾け、子どもたちが自分の状態について語ったり、工作などにおいて表現出来る時間にしていかなければならないで

しょう。

このようにして、分級を、牧会的なものにしていく時、教案誌において提供している分級展開例をそのまま用いるのではなく、子どもたちの聖書理解度や信仰にあわせて、教師たちが工夫してアレンジして用いていくことも、必要ではないかと思います。

※注意

本稿においては、「教会学校」と「日曜学校」の言葉を使い分けています。

「教会学校」とは、礼拝指針によって定められる教会の教育事業全体（日曜学校、青年会、婦人会、壮年会……）のことであり、「日曜学校」とは、子どもたちを中心とし、礼拝と分級からなるクラス（本誌が中心的に扱っていること）のことを示しています。

（大垣伝道所協力牧師）

聖書学校は大きな恵み！

玄元清子（神港教会聖書学校教師）

浄土真宗の家に生まれ、教会とは無縁の生活をしてきた子ども時代に、友達に誘われて初めて行った教会学校（当時通っていた教会での呼び名）は、どこか異国の雰囲気が出て、あこがれのような感情を抱いて毎週通っていたことを思い出します。子どもの頃の記憶は鮮明で、のちの生き方に影響を与えるばかりでなく、そのとき歌った讃美歌や聞いた聖書の話が、人生のさまざまなステージにおいて思い起こされ、信仰への入口や道しるべになること知っています。聖書学校に通いキリスト教信仰へ導かれた者として、また職業から実感したことをもとに、聖書学校がどれほど素晴らしい働きで大きな恵みであるかをお話したいと思います。

子どもの頃の経験は人生に影響を与える

子どもの頃の経験や学んだこと、覚えたことは、その人の人生の基となり、何かを決断する際に少なからず影響を与えるのではないかと思います。私事ですが、小学生のとき通っていた教会学校で教えてもらった聖書の話や暗唱した聖句、歌った「こども讃美歌」など、ことあるごとに口ずさんだり心のなかで言ってみたりしていました。中学高校と進むなかで、勉強やクラブなどで忙しくなり、ときどきしか教会に行かなくなりましたが、大学受験を前に将来のことや進路のことを考えた時、自然と教会に足が向いていました。再び教会に通い始める背景には、教会学校の先生方からの折々にいただいた葉書や手紙が大きな励ましであったと思います。

教会へ通った記憶が芽を出し実を結ぶ

聖書学校に通っていた記憶が信仰の種まき

になり、のちになって実を結ぶことがあります。このことはキリスト教病院で働いていた経験から実感しました。キリスト教病院では、患者さまへの伝道のために、牧師とクリスチャンスタッフが、毎日院内放送で讃美歌と短いメッセージを流したり、患者さまを訪問したりしています。患者さま訪問をした時、その放送を聞かれた患者さまが「今日、知っている讃美歌が流れてきてうれしかったわ。実は、子どもの頃に教会に通っていたことがあるのよ。懐かしいわぁ」とおっしゃるのを何度か聞いたことがあります。このような患者さまは、もっと聖書の話が聞きたいとおっしゃったり、わたし自身の信仰の証をする機会が与えられたりしました。

病気になったり、人生における危機に直面したりすると、人はいろいろなことを考えたり、どこかに助けを求めて人生の意味についての答えを見出そうとするのではないのでしょうか。そしてそのようなとき、昔、聖書学校で聞いた御言葉や讃美歌の一節が思い出され、キリスト教信仰への一歩へと向いていくのではないかと思います。

聖書学校に繋がっているなかでの信仰の芽生え、そして教会に通ったことの記憶がキリスト教信仰への第一歩となりえることを述べてきましたが、教師をさせていただくなかでも大きな恵み受けています。

教師として仕える喜び

神港教会で聖書学校の教師をさせていただくようになってから3年になります。聖書学校で子どもたちと接するなかで、どのように子どもたちと接したらよいのか、どうしたら子どもたち

に神さまや信仰を伝えることができるのかなど迷うことの多い日々です。しかし、礼拝や分級、教師会のなかから、他の先生方から学んだり励ましをいただいていることが、どれほど大きな励ましとなっていることでしょう。未熟ながら教師として用いていただけることはとても感謝なことで、わたし自身の信仰の成長や教会生活の礎となっていることを心から感謝しています。

最近よく「今の子どもたちにとって聖書学校とはどういうものなのだろうか」と思い巡らします。多くの情報が氾濫するなか、判断基準を見失ったり、疎外感や孤独感を感じる人が多い社会において、聖書学校に通うことは何を意味するのだろうか。人としての関わりが少なく

なり、常に競争のなかにある子どもたちにとって、聖書学校は、温かい交わりを経験する場であり、何よりも創造主、救い主である神さまを知り信仰の道を歩む大切な場であるのではないかと思います。それゆえ、聖書学校の働きを主から委ねられた大切な仕事として、神さまが導いておられる子どもたちとまっすぐに向き合い、ひとりひとりを大切にしながら接していきたいと思っています。

御言葉の種をまき、それぞれの人生の必要なステージで芽が出て実を結ぶことを信じ、また信仰の土壌を耕すように子どもたちとかかわりを大切にしながら教師として主に仕えたいと思っています。



教会学校教師研修会のご案内



主催 中部中会教育委員会

場所 名古屋教会

日時 2006年11月23日(木・休)

(名古屋市西区浄心本通3-37-1、

午前10時～午後3時15分

Tel, 052-531-9768)

(受付＝10時～、開会＝午前10時30分)

主題 「日曜学校教師会の形成

～魅力ある日曜学校を目指して～



プログラム

午前10時～ 受付

午前10時30分 開会礼拝

午前10時50分 発題講演

1. 望月信牧師(高蔵寺教会牧師)
2. 辻幸宏牧師(大垣伝道所協力牧師)
3. 木下裕也牧師(名古屋教会牧師)

午前12時～午後1時 昼食休憩

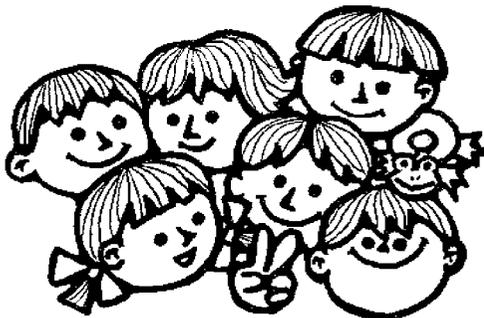
午後1時～2時30分 アンケート報告と分科会

午後2時30分～3時 全体会

午後3時～3時15分 閉会祈禱会

終了・解散

昨年に引き続いて、教師会の形成について話し合います。教師会が日曜学校の働きの鍵となるからです。各教会にお願いしている、教師会についてのアンケートにもぜひお答えください。課題と祈りを分かち合いましょう。



副読本のご案内

『主は羊飼―中高生のための教理入門―』

価 格 500円
著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集委員・神戸改革派神学校講師)

日本キリスト改革派教会は、契約の子たちへの信仰継承教育に心血を注いでいる教会です。ところが、日曜学校での楽しい教会生活を経て、中高生の時期に、自覚的で明瞭な信仰を告白を、と願いつつ、日曜学校教師はもとより、牧師たちも頭を悩ませつつも、真剣に告白準備のための学びのプログラムを整え、提供しています。

しかしながら、現実には、既成のテキストで、「これは使える！」というものがなかなか見当たらないのが実情です。ウエストミンスター小教理問答の解説を試みるか、牧師のオリジナルなテキストを作成して用いるか、果ては他教派のものをアレンジしながら用いるということが多いかと思えます。

このような現実の中で、ついに！ 中部中会教育委員会『教会学校教案誌』の副読本として、中高生の信仰告白準備のためのテキスト、『主は羊飼―中高生のための教理入門―』を刊行することと致しました。

すでに、副読本の『子どもカテキズム』は、2300部が子ども達、教師たちの手元に届けられています。この『主は羊飼―中高生のための教理入門―』も中高生、教師たちの手に広く行き渡るなら、必ずや、よき実りを与えられるものと確信いたしております。

廉価に抑えております。子ども達のお小遣いで購入できます。しかし、教会としてお買い求めいただき、契約の子らをはじめ地域の中高生にも、プレゼントできれば、なお、素晴らしいのではないのでしょうか。

著者の木下裕也牧師は、本誌編集委員であるばかりか、「創刊」の中心人物です。前任地の豊明教会での実践のなかから、日本キリスト改革派教会としての「教案誌」の必要性を深く認識され、しかもつぶやいているだけでなく、実際に、同志たちとともに、今日まで執筆、編集、刊行の中心で奉仕しておられます。現在、神戸改革派神学校講師でもあり、日本教会史を講じておられます。煮詰まった編集会議では、必ず、笑いのネタを提供して、場をなごませて下さる楽しい先生です。

教会学校教案誌編集部 (相馬伸郎)

目 次

第一部 人生の目的 1

一 人生の目的 3

1 人生の目的——神礼拝 4

2 主は羊飼い 7

二 聖書 11

3 聖書 (1) —— 聖書が必要な理由 12

4 聖書 (2) —— 神のみ言葉 15

5 御言葉はわが道の光 18

第二部 信仰の道 21

一 神 23

6 神 (1) —— 神とはどのようなお方か 24

7 神 (2) —— 三位一体 27

8 近くいます神 30

二 神のみわざ 33

9 聖定——永遠の計画 34

10 予定——恵みによる選び 37

11 創造——よきみわざ 40

12 摂理——み父の配慮 43

三 人間 47

13 人間——創造の冠 48

14 罪——造り主からの離反 51

15 パウロの叫び 54

四 救い主イエス・キリスト 57

16 恵みの契約——神の誠実 58

17 イエス・キリスト (1) —— そのご人格 61

18 イエス・キリスト (2) —— へりくだりの主 64

19 イエス・キリスト (3) —— 栄光の主 67

五 信じる者の祝福 71

20 信じる者の祝福 (1) —— 義とされること 72

21 神の義 75

22 信じる者の祝福 (2) —— 子とされること 78

23 父の愛 81

24 信じる者の祝福 (3) —— 聖とされること 84

25 苦しみの意味 87

26 キリストにある死——聖化の完成 90

27 復活——キリストの命を生きる 93

第三部 生活の道 97

一 感謝に生きる 99

28 悔い改めと信仰——神への方向転換 100

29 十戒——感謝の指標 103

30 第一戒——ほかに神があってはならない 106

31 第二戒——いかなる像も造ってはならない 109

32 第三戒——主の名をみだりに唱えてはならない 112

33 第四戒——安息日を聖別せよ 115

34 第五戒——父母を敬え 118

35 第六戒——殺してはならない 121

36 第七戒——姦淫してはならない 124

● 人生の目的——神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に通い始められた方と聖書の学びをしていたときの事です。そのときたまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつづつよくにおっしゃいました。わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということ考えたこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのと、知らずにいるのでは、やはり生きかたが大きくことなってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどで、これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを奪にふることもあります。熱烈な恋愛をすることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなものです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の眞の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手によるジュネーヴ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の眞の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身の何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会教育委員会は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに満5年となり、第23号まで発行して参りました。中部中会では7割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ50教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会教育委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています（2006年4月中部中会第一回定期会にて自由募金願いを可決承認）。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円
送金先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書研究・説教展開例・分級展開例

テキスト マタイによる福音書3章13～17節

〈洗礼とは〉

洗礼は罪が洗われたということの目に見える保証です。この洗礼という事実を通して、私たちの救いが、神の側から客観的に保証されており、ヨハネ福音書に「あなたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたを選んだのである」とあるまさにそのことを、私達は洗礼を通して目に見えるかたちで知ることができます。

〈14節～15節〉

主イエスは、ガリラヤ地方から、ヨハネのいる荒れ野に踏み込んで来られました。聖書には「それはヨハネから洗礼を受けるためである。」と書かれています。しかしこのことが、ヨハネにとっては予想外のことでした。この部分のこのやりとりは、四つある福音書の中でも、このマタイによる福音書の中にだけにしか出てきません。ですからそれだけ、福音書記者マタイは、主イエスがヨハネから洗礼を受けるということを、特別なこととして扱っています。救い主、神の御子であり、悔い改めと洗礼を必要とする罪人ではなかった主イエスが、なぜヨハネから洗礼を受けられなければならないのでしょ

〈罪人と等しくなられた主イエス〉

主イエスは全く罪のない、悔い改めを必要としないお方であられながらも、しかし罪人の中に入って来られます。罪なき方が、しかし罪人と肩を並べてくださり、罪人の中のひとりとして、罪人と共なる者として、洗礼を受けられたのです。しかも主イエスは、それがふさわしいことであると言ってくださいました。この言葉が、この福音書の中では主イエスが発する最初の言葉として語られています。主イエスは、自ら罪人の中に加わってくださることで、罪人の主となってくださったのです。

〈16節～17節〉

そしてこの主イエスのへりくだりを、父なる神が受け入れられました。ここに主イエスが神の子であるということが、高らかに宣言されます。このお方が、洗礼を受けて水から上がられると、天がイエスに向かって開きました。洗礼は、罪の洗いを通して天国への道を開くものです。神の御子主イエスが、十字架と復活の御業を通して、天への道を開いてくださった。私達は、この主イエス・キリストによって開かれた天への道を、この道のみを通ることによって救われるのです。洗礼とは、天への道を開いてくださったこの主イエス・キリストに結ばれるということです。このキリストを通らないで、キリストによらずに救われる、ということはありません。

〈主イエスと共に受ける祝福〉

主イエスは洗礼を受けられ、ご自身から私たち罪人の中に加わってくださいました。さらに主イエスは罪人と同様に洗礼を受けられたばかりか、さらに私達罪人と堅く結び付けてくださり、罪人が受けなければならない裁きまでも、自ら御自身の身に引き受けてくださいました。私達はキリストにあって、キリストと共に、神の子供とされる。父なる神のことを、今や主イエスと口をそろえて、「アッバ、父よ」と呼ぶことが許されるのです。そして主イエスと共に、神の恵みの相続人となることのできるのです。

洗礼を受ける時、私達は、私達自身のものである以上に、神様のもの、神の霊に導かれる者となるのです。そこで私達は、天から聞こえた神の声、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という呼びかけをも、私達の先頭に立って歩まれるキリストと共に、私達にも向けられている呼びかけとして、それを受け取ることが許されるのです。
(吉岡契典)

テキスト マタイによる福音書3章13～17節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問22、30、71、72、73

〔単元のねらい〕

先週まで続いた旧約の学びを中断し、今日から始まる年度後半は新約の学び、とりわけ主イエス・キリストの生涯を取り扱う。今号では、主イエスの洗礼に始まり、主イエスの福音宣教の初期、そしてアドベント、クリスマスを迎えて、主の降誕の御言葉に耳を傾ける。

マタイによる福音書において、主イエス・キリストの公生涯は4章12節から始まる。今日の御言葉は、その公生涯に先立って、主イエスが洗礼を受けてくださったことを物語る。洗礼とは罪を赦す神の御業の目に見えるしるしであり、洗礼を受けるとは罪人であることを意味する。すなわち、主イエスは、まことの神でありながらもまことの人となられ、しかも罪人と等しくなるまでにへりくだって、罪人の一人として洗礼を受けてくださった。この驚きを分かち合いたい。そして、私たちも信仰を告白して洗礼を受けられる。その洗礼は、私たちを主イエスに結び合わせ、一つとする神の御業である。洗礼によって、主イエスと結び合わせられ、神の子とされる。私たちの歩みがこの洗礼を目指すものであること、洗礼を受けた者として生涯を歩む幸い、それらを分かち合い、共に喜びたい。

「主イエスさまが洗礼を受けられた！」

先週まで旧約聖書の御言葉を学びました。今日からしばらくは、主イエスさまのご生涯をたどって御言葉を聴きます。今日は、主イエスさまが洗礼を受けられた御言葉です。主イエスさまは、ご自身の福音を宣べ伝える御業を始める前に、まず洗礼を受けてくださいました。福音書はそのことを大切に伝えています。

最初に、洗礼について、少し考えてみましょう。ここには、洗礼を受けているお友だちがおり、洗礼を受けていないお友だちもいます。聖書はみんなが洗礼を受けるようにと命じているのですが、わたしたちが受ける洗礼には、いったいどんな意味があるのでしょうか。

洗礼では水を使いますね。水を頭の上にしたたせませす。なぜ水を使うのかというと、洗礼には、よごれを洗い落とすという意味があるのです。水で顔を洗ったり、お風呂に入ったりして、よごれを洗い落としますね。毎日生活する中で、わたしたちの体にはいろいろなよごれがつき、ホコリまみれになりますから、水で洗い流さなければなりません。それは体だけではなく、わたしたちの心

や魂にもよごれがつき、ホコリまみれになってしまうのであって、洗い流さなければなりません。心のよごれ、魂にまわりつくホコリは、水では洗い流せません。神さまが、聖霊の御業によって、よごれやホコリを洗い流してくださいませす。洗礼は、その聖霊のお働きをあらわす、目に見えるしるしです。水が体のよごれを洗い流すように、聖霊がわたしたちの心のよごれを洗い流し、きよめてくださいませす。

ですから、洗礼を受けるとは、心によごれのある罪人であるということなのです。わたしたちは、心によごれがあり、神様から離れて罪を犯す罪人だから、洗礼を受けなければならない。その通りです。わたしたちは罪人なのです。

あれ!? それでは、主イエスさまは、どうして洗礼を受けられたのでしょうか。イエスさまはまことの神さまで、罪のないお方ではなかったのでしょうか。心によごれの無い、父なる神さまにすべて従われた、まったきお方だったのではないのでしょうか。いったいどうして、洗礼を受ける必要があったのでしょうか。

このとき、ヨハネがヨルダン川の川岸で洗礼を受けていました。このヨハネは、主イエスさまの母マリアの親戚であるザカリアとエリサベトの夫婦に与えられたヨハネです。ヨルダン川で洗礼を受けていたので、「洗礼者ヨハネ」と呼ばれます。ヨハネは、主イエスさまの福音宣教の御業に先立って、イスラエルの民に罪の悔い改めを求めるために、神によって遣わされていました。

主イエスさまは、このヨハネから洗礼を受けようとされました。ヨハネは、主イエスさまが自分のところに来たことに、たいへん驚きました。主イエスさまがまことの神さま、罪人の救い主であることに気づいたからです。主イエスさまに洗礼を授けることにとまどい、躊躇して、ヨハネは、「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか」と言いました。主イエスさまに思いとどまるように勧めたのです。主イエスさまは罪のないお方であり、ヨハネは罪人にほかなりません。ヨハネこそ、主イエスさまの洗礼を受けるべきです。これは、その通りなのです。

しかし、このとき主イエスさまは、「今は止めでほしい」とおっしゃって、洗礼を受けさせてほしいと願われました。今はこのことが正しいことなのであるとおっしゃって、ヨハネから洗礼を受けることを求めました。ヨハネは、この主イエスさまの求めに従って、主イエスさまに洗礼を受けました。

まことの神さま、罪なきお方である主イエスさまが、罪人であるヨハネから洗礼を受けたとは、何と驚くべきことでしょうか。しかし、このことには、主イエスさまがへりくだっておられること、まことに罪人の一人となられたことがあらわれています。まさにこの洗礼によって、主イエスさまは、罪ある者の一人に数えられ、罪人と等しくなっ

てくださったのです。主イエスさまの洗礼は、主イエスさまがまことの人であること、そして、ご自身を低くして、罪人の一人に数えられることを引き受けてくださった、そのしるしなのです。

天の御父は、この主イエスさまのへりくだりを喜んで、天から「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と呼びかけられました。主イエスさまのへりくだり、洗礼は、御父の御心になうものでした。罪人の一人となり、罪人の罪を引き受けられるからこそ、まことの救い主なのです。このようなへりくだられた神の御子を、天の御父が喜び、祝福しておられます。

わたしたちも洗礼を受けます。主イエスさまは、洗礼を受けるようにと、わたしたちに命じています。それは、洗礼によって、わたしたちが主イエスさまに結ばれるからです。わたしたちが受ける洗礼とは、主イエスさまの受けられた洗礼なのであって、洗礼によって主イエスさまと一つに結び合わせられるのです。主イエスさまが十字架につけられて死んでくださった、その死に結び合わせられてわたしたちも罪に死にます。主イエスさまが復活された、その復活に結び合わせられてわたしたちも復活するのです。洗礼とは、わたしたちの罪が取り除かれ、きよくされて、主イエスさまと共に生きる新しい命が与えられている、そのしるしです。洗礼を受けるとは、主イエスさまが共にいてくださることにほかなりません。

洗礼を受けてくださったイエスさまに感謝しましょう。そして、わたしたちの教会生活はこの洗礼を目指す歩みであり、洗礼を受けて主イエスさまと一つにされて歩む歩みです。洗礼の恵みに守られて、主イエスさまに結ばれて、生涯を神の祝福を受けて歩みます。みんなが洗礼を受けることをお祈りしています。みんなも、お互いの洗礼のためにお祈りしましょうね。（望月 信）

[今週の暗唱聖句] ガラテヤの信徒への手紙3章26～27節

あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。
洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。

〈ねらい〉

主イエスは全く罪のない神の子でありながら、やがて人々の罪を負うために、人間と同じ立場になられるため洗礼を受けてへりくだられ、私たち罪人が受けなければならない裁きをも身に受けてくださった。

〈展開例〉

1. 教会の礼拝で行われている洗礼の様子を話し、洗礼を受ける意味—私たちは心に汚れのある罪人であり、神様の御霊の御業によってのみ、その汚れがおとせる—を伝える。
2. 本日の聖書箇所に基づき、主イエスがバプテスマのヨハネから洗礼を受けられた時の様子を話す。

3. 主イエスは罪人ではないが、罪人のひとりとなって洗礼を受けられた。このことによって私たちの罪を引き受けて下さるまことの救い主となられた。洗礼を受けてくださった主イエスに感謝しよう。

〈おいのり〉

神様、何の罪もおかしていないイエス様が、私たち人間の罪を身代わりとなって背負い、罪人の一人として洗礼を受けてくださって、私たちの救い主となってくださったことをありがとうございます。小さい私たちもいつか洗礼を受けることが出来るように、神様が助けてください。幼児洗礼を受けている人々に、やがて罪を告白し、キリストを救い主として信じ、信仰告白できるようにしてください。



〈ねらい〉

わたしたちは洗礼の意味と、その恵みをどれほど理解しているでしょうか。洗礼は決して単なる入会儀式ではありません。洗礼は素晴らしい神様の恵みそのものです。子供たちに話す時、少し難しいかもしれませんが、その恵みの意味を共に分かち合しましょう。

〈展開例〉

1. 今日のお話で「洗礼」という言葉が出てきました。洗礼とは一体何でしょう。
→「子どもカテキズム」の問71～73を参考に通して、子供たちと洗礼の意味について話し合ってください。その場合のポイントは、①洗礼は目に見える神様からの恵みの保証であるという点、②洗礼はわたしたちがキリストに結ばれて神の子供とされていることを保証するものである点、③洗礼はわたしたちの罪を洗い流し、罪の赦しを保証するものであるという点、これらの三点を分かりやすく説明してください。
2. どうしたら洗礼を受けることができるでしょうか。
→恵みの契約の下にある幼児洗礼の場合と、自らの意思で信仰告白して洗礼を受ける場合があることを分かりやすく説明する。特に契約の子供と、未信者の子供が共にいる場合は、どちらも素晴らしい神様の恵みであることを強調してください。

3. ヨルダン川でイエス様に洗礼を授けた人は誰ですか。

→洗礼者ヨハネはイエス様とどのような関係にあったかを聞いてもよい（ルカ福音書1章を参考にする）。

4. イエス様は神の子で罪の無いお方なのに、どうして洗礼をお受けになったのでしょうか。

→イエス様がわたしたち罪人の友となってくださるためであり、わたしたちを愛し、わたしたちの罪の責任をすべて背負って十字架にかかってくださるためであったことを話してください。

〈おいのり〉

愛する天の神様。イエス様がわたしたちのために洗礼を受けてくださいましたことを感謝します。どうか、わたしたちも神様から洗礼を与えられ、イエス様に結ばれて神様の子供として生きることができるよう導いてください。



これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者

〈ねらい〉

主が洗礼を受けられたことの意味を考える。

〈展開例〉**1. どうしてイエス様が？**

洗礼は罪がゆるされ、洗われたというしるしです。洗礼式の中で必ず聞かれることがあります。それは「あなたは自分が神のみ前に罪人であり、神の怒りを受けて当然の者であることを認めますか」という問いです。私たちが洗礼を受けるのは、清められる必要がある罪人だからです。

しかし、イエス様には罪が全くありませんでした。罪を一度も犯したことがなく、悪いことを一度も思ったこともなかったのです。その聖い神の御子であるイエス様が、どうして洗礼を受けられたのでしょうか。

2. 想像してみよう

バプテスマのヨハネの前には、大勢の人たちが並んでいます。洗礼を授けてもらうために並んでいるのです。

「悔い改めよ」というヨハネの前で、自分が犯してきた罪を告白する人々がいます。自分の中の醜い思いを嘆く人々がいます。神に許しを求める人々がいます。その列の中にひっそりと立たれる方がおられます。罪のない方が、罪ある人たちと共に立っておられるのです。罪人によりそって、自分もその一人であるかのように、洗礼を受ける側に立っておられるのです。

洗礼を授けるべきはずのイエス様が、私たち罪人と同じ側に立ってくださり、罪人の一人のように洗礼を受けてくださったとは何という驚きでしょう。

3. 罪人の側に立たれ、そして罪を負うために

イエス様はご自分を低くして罪人の仲間のようにになり、洗礼を受けてくださいました。そればかりでなく、私たちが受けなければならない裁きを十字架で引き受けてくださいました。

イエス様は洗礼を受けることを、また罪の刑罰である十字架を受けることを、ご自分から引き受

けてくださいました。

イエス様がこのようにして私たちの罪の中に入り込んでくださらなければ、私たちがこちらから救いの扉を開くことはできません。

4. 洗礼の恵み

イエス・キリストにある洗礼を受けるということは、イエス様に結び合わされてイエス様と共に死に、罪から解放されて、よみがえられたイエス様と共に生きることです。

私たちが洗礼を受けるとき、私たちの中に入りこみ、罪を負ってくださったこのイエス様に結び合わされます。イエス様につながる者とされるのです。神様のみ心になわなない者が、かなう者とよばれるようになるのです。

私たちの受ける洗礼が、イエス様に結びつけられる洗礼となるために、イエス様ご自身が洗礼を受けてくださったのです。

5. 考えてみよう

ある銀行に銃を持った強盗が押し入りました。銀行員たちは皆、人質として銀行に閉じ込められました。何時間も経ちました。人質の人たちは恐怖と疲労で弱っています。しかし強盗はなかなか人質を解放してくれません。犯人も疲れてイライラしています。このままだと人質の命もどうなるかわかりません。

勇気ある警官の一人がいました。「僕が人質になる。だからみんなを解放してくれ」

その警官は銀行の扉を開けて一人で入ってきました。その人のおかげで人質は皆、解放されました。

- この警官が扉の外側にいながら人質となることができるのでしょうか。
- この警官はどんな気持ちでこう言ったのでしょうか。
- 自分が身代わりになるということは、どういう結果が考えられますか。
- 私たちは何から解放される必要があるでしょうか。

〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に……

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズム問22（二性一人格）、30（キリストとの結合）、71、72、73（洗礼について）が挙げられています。

☆問30は、洗礼が私たちがキリストに結び合わせ、一つとしてくださる神の御業であることに思いを向けさせてくれます。

問30 神さまの恵みは、どのようにして私たちに与えられますか。

答 聖霊なる神さまが私たちに信仰を与え、私たちが主イエス・キリストと一つに結び合わせてくださることによってです。

☆ではなぜ、あるいは、どのようにして、洗礼は私たちがキリストに結び合わせるのでしょうか。ハイデルベルク信仰問答では問69から問73まで、このことについて述べていますが、ここでは問69と問70を取り上げます。少し長いですが、特に問69は、中学生の皆さんにとってもリアルに実感できる言葉遣いで書かれていますので取り組みやすいのではないのでしょうか。

ハイデルベルク信仰問答

問69 あなたは聖なる洗礼において、十字架上でキリストの唯一の犠牲があなたの益になることを、どのように思い起こしましたか。確信させられるのですか。

答 次のようになります。

キリストがこの外的な水の洗いを制定された時、約束なさったことは、わたしがわたしの魂の汚れ、すなわち、私のすべての罪を、この方の血と霊とによって確実に洗っていただける、ということ、そして、それは日頃体の汚れを落としているその水で、わたしが外的に洗われるのと同じくらい確

実である、ということです。

問70 キリストの血と霊とによって洗われるとは、どういうことですか。

答 それは、十字架上で犠牲においてわたしたちのために流されたキリストの血のゆえに、恵みによって、神から罪の赦しを得る、ということです。さらに、聖霊によって新しくされ、キリストの一部分として聖別される、ということでもあります。それは、わたしたちが次第に罪に死に、いっそう敬虔で潔白な生涯を歩むためなのです。

☆ジュネーヴ教会信仰問答でも、問324で、洗礼の意義は、罪の赦しと霊的更新（新生）であると問答した後、水を象徴として用いることの意味を問325と問326で教えています。特に問326の答が興味深いので、参考までに記します。

ジュネーヴ教会信仰問答

問326 生まれ変わりについてはどうですか。

答 私たちの生まれながらの本性の死滅が生まれ変わりの初めであり、新しい創造物になることがその終わりでありますから、頭に水が注がれることによって死の印が私たちに示され、一方、私たちが水のなかに沈んだままでなく、ただ一瞬の間いわば葬られたようになるだけで、すぐに立ち上がることのなかに新しい命の印が示されます。

〈今週の聖書日課〉

日曜日	ガラテヤ3:26～27
月曜日	マタイ3:11
火曜日	使徒2:38
水曜日	ローマ6:3～11
木曜日	コリント一2:13
金曜日	ペトロ一3:21
土曜日	ペトロ一1:2

〈悪魔の存在と誘惑〉

聖書は悪魔の存在を認めて、その存在、その力について、一貫して語り続けています。悪魔の問題を真剣に扱うということは、現代では前近代的な迷信として退けられがちですが、しかし自分自身と世界の様々な罪の現実を見る時に、今この時代においても、悪魔はなお現実的存在として、私達に影響を与え続けているものだとわがざるをえません。そしてその悪魔の目的は、神様から私達を引き離すということです。

悪魔がやって来てささやくというこの場面は、どこかで見たことのあるような場面です。創世記の最初で、神に造られたアダムとエバは蛇に誘惑されました。そしてアダムとエバは誘惑に負けてしまいました。またこの場面は、イスラエルの民の姿とも重なります。荒れ野で主が40日間断食されたという姿は、イスラエルの民の荒れ野での40年間の歩みを彷彿とさせます。そしてその試練の40年間の間も、イスラエルの民は絶えず神様から離れる。誘惑に負け、罪を繰り返しました。人間がその最初から、絶えずその力に支配され続けてしまった悪魔の誘惑、主イエスは、ユダヤのベツレヘムで人間としてお生まれになり、全ての人間が直面してきた悪魔の誘惑をもまた、この人となられた主イエスは受けられたのです。

〈三つの誘惑〉

第一の誘惑を、主イエスは旧約聖書の申命記8章3節の御言葉をもって悪魔の誘惑を拒まれました。悪魔のささやきによって生まれるパンにではなく、神の口から出るひとつひとつの言葉にこそ命があると、主イエスは語られました。

また第2の誘惑においては、悪魔の方も詩編91編の言葉を用いて、その詩編を都合よく改変して誘惑を仕掛けています。御言葉を用いてさえ悪魔は働きかけてくるのです。そして主イエスはまたも、申命記6章16節の御言葉をもって答えられました。主イエスは神への従順の姿勢を崩されません。

そして最後の誘惑は一段と大きな誘惑に膨らんでいます。しかし主イエスはさらに申命記6章13節の御言葉によって、誘惑を退けられました。

〈主イエスの従順〉

主イエスは、神の子が持つ超人的な力によって悪魔を退けられたのではなく、現実にイスラエルの民に対して語られた聖書の御言葉、私達にも与えられている聖書の御言葉によって悪魔に勝利されます。私達に与えられた聖書の言葉は、ただ読まれて消費されるだけの言葉ではありません。この言葉は悪魔に勝つほどの力を宿した言葉であり、そこから神の命が生まれる言葉です。ただ読まれるためだけの言葉ではなく、それを生きるための言葉です。主イエスは、この御言葉に端的に表されていますように、私達と同じ人間として神に従順に歩み切ること、私たちの失敗の歴史を塗り変えてくださいました。確かに私たちは、誘惑に屈したアダムの子孫であり、日々悪魔の誘惑に敗北する失格者であることを認めざるを得ませんが、私たちはひとりで、何も持たずに、悪魔と戦うではありません。聖書の御言葉の真実な力と約束があり、誘惑への勝利者主イエスが共におられます。(吉岡契典)

テキスト マタイによる福音書4章1～11節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問22、27、26、84

〔単元のねらい〕

主イエス・キリストの公生涯に先立つ、もう一つの出来事として、悪魔の誘惑を受けられた御言葉に耳を傾ける。この出来事も、主イエス・キリストの生涯の全体像をあらかじめ明らかにする、大切な御言葉である。主イエス・キリストは悪魔の誘惑を受けられた。誘惑を受ける。このこと自体がすでに主イエスが真実に人となられ、人の弱さを担われたことを示している。弱さを担うとは、弱さを味わうだけでなく、戦ってくださったということである。御言葉は、主イエスが私たち罪人に代わって戦われた霊的な戦いを証しするのであり、早くも主イエスは悪魔に勝利された。主イエス・キリストの生涯は、ここで端的に示されている通り、霊的な戦いであったのであり、御父の御心に従順に従われることによって勝利を勝ち取られたのである。この主イエス・キリストの戦いに共にあずかる者とされて、わたしたちも霊的な戦いを戦う。試みを耐え忍ぶことによって、信仰的に強められ、成長させられる。そのことを目指して、忍耐強く試練に立ち向かう者でありたい。この戦いには勝利が約束されている。

「誘惑と戦って勝利された主イエスさま」

先週に続いて、主イエスさまのお話です。主イエスさまは、洗礼を受けられたあと、しばらくの間、荒れ野に行かれました。人の住んでいる家がない、町外れの場所です。主イエスさまは、しばしば町外れの寂しい場所に行って、お祈りの時を持たれました。このときも、洗礼を受けて、いよいよ神の国の福音を宣べ伝える、その始まりに備えて、お祈りをされたのです。福音を宣べ伝えるには労苦と忍耐が必要なのであって、ですから、主イエスさまは真剣にお祈りされました。食べ物を食べることも忘れて、40日間もお祈りしておられたと、福音書はそうように伝えていきます。

さて、40日もの間、食べることも忘れてお祈りして、主イエスさまは、お祈りを終えたときに、御自分が空腹であることに気がつかれました。おなかがすいたのです。

変な話をするようですが、主イエスさまだって、おなかがすくのです。主イエスさまは、真実に人間になってくださったのですから、疲れることがあれば、眠たくなることもある、おなかすく。それはわたしたちと同じです。そして、おなかがすくと、食べ物が欲しくなります。みんなは、お

なかがすいて、食べ物が欲しくなると、どうしますか。お母さんに「ご飯まだ？」って聞きますね。先生は小さい頃、「ご飯まだ？」って言うだけでなく、待ちきれなくて、テーブルの上に用意してあったおかずを隠れてそっと食べてしまったことがあります。いけないことだと分かっていたのですが、我慢できませんでした。こういうのを「誘惑に負ける」と言います。おなかがすいて、わたしたちは、誘惑に負けてしまうことがある。悪いと分かっている、やってしまうことがある。これも、わたしたち人間の罪の姿の一つです。

主イエスさまだっておなかがすく。そのところで、主イエスさまも誘惑を受けられました。「誘惑する者」、「悪魔」が来て、主イエスさまを誘惑したのです。「悪魔なんかいないさ」と思うかもしれませんが、聖書は、しかし、そのようには言いません。わたしたちをそそのかし、悪い心を芽生えさせようとする、わたしたちを悪いことへと導く、そういう力があるのです。その力を決して小さく考えてはなりません。

ここで聖書は、主イエスさまが三つの誘惑を受けられたと伝えていきます。どれも大切なのですが、

今日は、第一の誘惑について考えます。さっき、主イエスさまもおなかがすくと言いましたね。先生はおなかがすいて、誘惑に負けて、まだご飯のときでないのに、隠れて食べてしまいました。主イエスさまも、このとき、おなかがすいて、誘惑を受けられたのです。

悪魔が主イエスさまのところに来て、言いました。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ」。主イエスさまは確かに神の子であり、まことの神さまです。ですから、石がパンになるよう命じたなら、できたのでしょうか。おなかがすいているのですから、石をパンに変えて食べることができたなら、どんなによいことでしょうか。そのようにも思います。

この悪魔の試みのポイントは、「神の子なら」ということにあります。「神の子なら」、その力を用いて、自分を助けることができるであろう。とりわけ、人間とは、真実に人間であるとは、食べることで、肉体の命を支えることが大切なのだ。自分の命を助けるために、神の子としての力を使ったらよいだろう、というのです。こうして、悪魔は、主イエスさまに、自分のために生きようと誘惑したのです。さらには、人間の命の土台が肉体の糧にあるかのように思わせようとしたとも言えるでしょう。

しかし、考えなければなりません。主イエスさまはへりくだって、罪人の救い主となられたお方です。ご自分の命を捨てて、わたしたちのために仕えてくださったお方です。そのお方が、もし御自分の命を助けようとしたら、どうなっていたでしょうか。また、主イエスさまは、わたしたちが神さまによってこそ養われ、はぐくまれることを教えてくださったお方です。神さまが与えてくださる糧、御言葉によってこそ養われることが大切であると宣べ伝えられたのです。もちろん、肉体の食べ物も大切です。しかし、肉体の糧を求めることに惑わされて、そのために御自分の力を

使ってしまったら、どうなっていたでしょうか。ご自身のお働きと反対のことをしてしまう、ということになりかねなかったのです。悪魔のねらいは、実のところ、主イエスさまを天のお父さまから引き離すことにありました。「神の子なら」とささやいて、実のところ、神の子としての力を正しくない仕方では使わせようと、そうして、天のお父さまの御心から遠ざけようとしたのです。

ですから、主イエスさまは、悪魔の声に耳を傾けませんでした。「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と答えられました。これは旧約聖書からの引用なのですが、主イエスさまは、ご自身が神の御言葉を糧として生きること、自分を助けるのではなく、罪人のためにご自分をささげてくださいるお方であること、そのことから動かされませんでした。悪魔の誘惑に勝利されたのです。

実のところ、悪魔の誘惑、試みはみな、突き詰めるならば、わたしたちを天の御父、生けるまことの神から引き離そうとするものなのです。主イエスさまは、そのような神に敵対する力、誘惑と戦って勝利されました。それは、主イエスさまご自身の力であり、また、天のお父さまに対してお祈りをささげて、親しい交わりをつちかっけておられたからこそ、勝利することができたのです。

わたしたちも、誘惑を受けることがあります。おなかがすいて、いけないと分かっているも手が伸びることがあるでしょう。しかし、そのときに、主イエスさまから離れないようにしましょう。主イエスさまがわたしたちのために祈り、戦っておられます。わたしたちがどうすることが主イエスさまに喜ばれることであるのか、お祈りして神の御心を求めましょう。お祈りすることこそ、誘惑と戦い、試みに打ち勝つ、わたしたちの信仰の武器なのです。主イエスさまと一緒にいてくださって、わたしたちも誘惑に打ち勝つことができると、約束されているのです。 (望月 信)

[今週の暗唱聖句]

ヘブライ人への手紙2章18節

事実、試練を受けて苦しまれたからこそ、
試練を受けている人たちを助けることができになるのです。

〈分級では〉

明日は、体育の日ということで、「スポーツの秋」がやってきました。子供たち私たちの健康な体を主に感謝し、外で体を動かしてから分級を始めてみてもいいかもしれません（それだけで終わってしまわないように注意が必要です）。また、子供たちの興味のあるスポーツなどを聞いたり、「食欲の秋」として好きな食べ物を聞くことから、今日の話へうまく導けたらよいと思います。

〈分級のねらい〉

私たちは、日々悪魔の誘惑にさらされています。しかしイエス様は、私たち人間の弱さを担われ、その悪魔の誘惑に対して勝利するのです。ここで重要だったのは、やはり聖書の御言葉でした。悪魔もたくみに聖書の御言葉を引用して攻撃しますが、イエス様はその御言葉の濫用に対して御言葉をもって打ち破ったのでした。

私たちは、信仰者としてそのイエス様の勝利を約束されていますが、この世にあっては悪魔の誘惑からは逃れられません。私たちもこのイエス様に倣い、日々御言葉を蓄えられるように心がけ、それを子供たちに伝えましょう。普段の生活にお

いて、自分が御言葉（イエス様）を通して悪魔の誘惑から勝利することができたという簡単な証を子供たちにしてあげてはいかがでしょうか。

忘れてはならない大前提は、イエス様が私たちのために勝利されたことです。それがなかったら、私たちは毎日禁断の木の実でお腹を膨らませていることでしょう。そのことを深く心に刻み込み感謝して、子供たちを導くことが出来ますように主により頼みましょう。

そういうわけですので、ここでの分級のねらいは、①イエス様が私たちのために悪魔の誘惑から勝利された。②それは御言葉をもってであり、私たちもその剣を持って悪魔に立ち向かうことが出来る、といえると思います。このことが子供たちに伝わるように祈りましょう。

〈おいのり〉

イエス様、あなたが私たちのために悪魔の誘惑に勝って下さってありがとうございます。また聖書というプレゼントをありがとうございます。この御言葉を心の中に入れ、聖霊様のお守りとお導きによって、私たちもイエス様のようにしてください。

〈やってみよう〉**御言葉は悪魔の誘惑をやっつける！****目的**

教師と子どもたちの共同作業として、御言葉の力を視覚的なイメージで表現したい。

準備するもの

ダンボール、紙、ダンボールに穴をあける道具、マジック、ひもゴム、小さな封筒、テープ、はさみ

手順

- ①ダンボールにイエス様（神様）役、人間役、悪魔役をマジックで描き、はさみでそれぞれ切り抜く。
- ②人間役のダンボールには、ハート型にした封筒、もしくは袋を貼り付ける。
- ③イエス様役と人間役のはじめのほうに穴を開け、ひもゴムをその穴に通し、その二つをくっつける。
- ④封筒に入るように何枚かの紙に御言葉を書いたカードを切り抜いておく。

→一人の教師がイエス様役と人間役を持ち、もう一人の教師が悪魔役を持つ。悪魔役が近づいてきたら、イエス様役と人間役を引き離す。そして子どもたちに御言葉カードを封筒に入れさせる。そうしたらイエス様役を近づかせ、悪魔役は離れる。

〈ねらい〉

子どもたちの日々の歩みのなかにも、様々な誘惑が待ち受けている。イエス様に倣い、またみことばに励まされて、悪魔に打ち勝つことができることを、分かち合いたい。

〈展開例〉

1. この時のイエス様のようにお腹がすいていたり、何かほしい時など、いけないことだと分かっているけれども、つい悪いことをしてしまったことはありますか？（悪いことについてはあまり話したがない場合もあり得るので、先に教師が身近な話題（子どものころの失敗談など）で口火を切るのもよい。）

→子どもたちの自由な発言を促し、耳を傾ける。

2. この時イエス様は、40日間もご飯を食べていませんでした。イエス様は私たちと同じ人間の体でしたが、そのような時にも、悪魔の悪い誘いに負けることはありませんでした。それはなぜですか。

→イエス様が、人であると同時に、罪のない神のひとり子であることを確認する。

3. みんなは悪いことをしたくないのに、どうしてもしてしまうのは、私たちの罪（悪魔の力）ですね。そんな時、どうしたら私たちは、悪魔の力に勝つことができるでしょうか？

→お祈りする、聖書を読む、などの答えに導く。

〈ワーク〉

①イエス様が悪魔の誘惑を受けたのは、どんな場所でしたか。（荒れ野）

②おなかのすいたイエス様に、悪魔は「石をパンに変えればいいじゃないか」と言いました。イエス様は悪魔に、何と答えましたか。（4章4節）

③三度も悪い誘いをしてくる悪魔に、イエス様が最後におっしゃったことばは何でしたか。10節を、声に出して読んでみましょう。

〈おいのり〉

神様、私たちが悪い誘いに負けそうになる時、みことばを思い出して、悪魔に打ち勝つことができますように。私たちといつも一緒にいて、助けてください。



人はパンだけで生きるものではない
神の口から出る一つひとつの言葉で生きる

〈ねらい〉

誘惑の言葉に秘められた悪魔のねらいは？
イエス様はどのようにして悪魔の誘惑を退けられたのでしょうか。

〈展開例〉**1. 第一の誘惑**

「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ」

悪魔はイエス様に語りかけます。「お腹がすいているのでしょ。あなたが神の子、救い主なら神の力を発揮してこの石をパンに変えて食べたらどうですか」

しかしイエス様は神様がお命じにならない奇跡を行ったりはしませんでした。自分のために神の子としての力を使うことをなさいませんでした。イエス様は答えられました。『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある」

人間を幸せにするものは何でしょうか。お金ですか？ たとえどんなに生活が豊かになっても、それだけで人は決して幸せにはなれません。パンだけを求めるならパンを与えてくださるお方のことを考えず、自分の力だけで生きていこうと思うようになるでしょ。

人を本当の意味で幸せにし、生かすものは私たちを生かしてくださろうとする神の御心です。その御心があらわされた神様の言葉によって人は生きるのです。

2. 第二の誘惑

「神の子なら、飛び降りたらどうだ」
悪魔はさらに「あなたがそんなに神に信頼しているなら、飛び降りてみる。神が助けてくれるか試してみろ」と誘惑します。

イエス様は答えられます。「あなたの神である主を試してはならない」

これは神が自分を愛しているか、助けてくれるかをテストしてはならないということです。このテストに合格したら私は神様に従いますとっているのです。神様を試すということは神様に信頼

していないことと同じです。

イエス様は神様を試すようなことは決してなさいませんでした。

3. 第三の誘惑

「わたしを拝むなら、これらをみんな与えよう」
悪魔の目的は神様から人間を引き離し、神を礼拝させないようにすることです。そして悪魔を拝むようになってほしいのです。

「そんなに救い主、王になりたいのなら私が神様の代わりに全世界を支配する権力を差し上げましょう。私を拝むなら、世の権力も栄光もみんなあなたのものになるでしょ」

「十字架のつらい道をいかになくても、私を拝みさえすれば、全世界を手に入れることができますよ。富も力も栄光もみんな差し上げましょう」と悪魔はささやきます。

しかしイエス様は「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある」と悪魔を追い払います。

私たちが神様を礼拝するのは、何かを得るためではありません。神様を礼拝することこそが私たちの幸せなのです。私たちは神様だけを礼拝し、神様に従って生きる者として造られているのです。

4. 悪魔のねらい

これらの三つの誘惑のねらいは、「あなたが神の子なら」といって、神の力を御心に背く形で使わせ、イエス様が神様に従わないようにさせることでした。

しかし、イエス様は神様の御言葉によって悪魔の誘惑を退けられました。ただ神の御言葉に信頼し、どこまでも従い通すお方こそ、本当の「神の子」だからです。

5. 考えてみよう

次の中であなたにとって一番誘惑となるものは何ですか。それは三つの誘惑のうち、どれに最も近いと思いますか。

- 親への不満
- 万引き
- 性への関心
- 友達とのつきあい
- 占い
- ゲーム
- お金
- いじめ

〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に……

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズム問22（二性一人格）、26（キリストの祭司としての働き）、27（キリストの王としての働き）、84（主の祈り第六の祈願）が挙げられています。

☆問84はまさしく誘惑（試み）のことを祈る祈りについての問答です。

問84 「我らを試みにあわせず、悪より救い出したまえ」では、何を祈り願うのですか。

答 罪深い私たちは、神さまの憐れみがなければ、一瞬でも神さまの子どもとしての祝福に生きることはできませんし、またサタンも攻撃してくるので、罪の誘惑から守ってください、罪との戦いに勝てるようにしてください、ということです。

☆主の祈り第六の祈願についてのカテキズムは8月6日でも取り上げましたが、今回はジュネーブ教会信仰問答の問289（今回は渡辺訳で）と、ウェストミンスター小教理問答の問106を挙げておきます。

ジュネーブ教会信仰問答（渡辺訳）

問289 要約すればどういう内容ですか。

答 主が私たちを倒したまわず、あるいは罪に陥ったままでいるのを宜しとされぬこと、悪魔や絶えず攻撃してやまぬ肉の欲に敗北するのを許したまわぬこと、むしろ、それに抵抗する力を備えさせ、御手をもって支え、御保護のもとに守りまたかば庇いたまうこと、こうして私たちが神に保護され、世話されて安らかに住まうにいたりますように、ということです。

ウェストミンスター小教理問答

問106 第六の祈願では、私たちは何を祈り求めるのですか。

答 （「我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ」という）第六の祈願で私たちが祈る事は、神が私たちを罪の誘惑から守ってくださるか、私たちが試みられる時に私たちを支えて助け出してください、ということです。

〈今週の聖書日課〉

日曜日	マタイ6:13
月曜日	マタイ26:41
火曜日	コリント二12:7b~10
水曜日	ユダ24~25
木曜日	ヨハネ17:15
金曜日	コリント一10:12~13
土曜日	ヘブライ2:18

先生方へ①

今年度の中学科の分級では、教理問答を、文字どおり「問答」という言語活動をしなが、先生と生徒の間の対話を生み出し、生徒が心に御言葉を蓄えていく助けとなるよう、これを行うことを目的としています。けれども、前号の望月先生の記事を読んで、もしかしたら、分級展開例に書かれているものをそのまま生徒に一方的に語るという形に陥っているのではないかと、という危惧、そしてやはり問答が形式的になってしまっているのではないかと、という危惧が頭をよぎりました。実際のところはいかがでしょうか。分級展開例に書かせていただいていることは、むしろ、先生方の黙想の手助けをするようなものと考えていただいた方がいいと思います。私もいろいろな教会の中学生たちの顔を思い浮かべながらこれを書いています、それぞれの分級の状況まではわかりませんが、「自分の分級では、あの子とこういうことを話そう」と思いながらピックアップしたり、応用したりしていただければ、と思っています。

テキスト マタイによる福音書4章18～22節

〈召命とは〉

「召命」とは神様から召されて特別な使命を与えられることです。わたしたちクリスチャンは神様であるイエス様から召され、イエス様の弟子として働くという素晴らしい使命を与えられています。本日の箇所は、ペトロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネの四人の漁師たちの召しを通して、わたしたちがイエス様の弟子とされるということの意味を教えています。

〈イエスの方からの召し〉

ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたイエス様は、ペトロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネの4人の漁師を見て自分の弟子になさいました。しかし、本日の箇所から分かることは、イエス様は彼等を一方的に召して弟子になさったということです。決して、ペトロやアンデレたちの方からイエス様に弟子入り志願をしたわけではありません。この事実から、わたしたちがイエス様の弟子とされるということは、人間の意志や努力を超えた神様の側からの自由な召しであるということをお知らせします。

〈無条件な服従としての召し〉

19節でイエス様はペトロとアンデレに対して「わたしについて来なさい」とおっしゃいました。ここでイエス様は彼等にご自分の後に従うように命じられたのです。ここから教えられることは、わたしたちはイエス様の召しに対して「これこれの範囲でなら従います」とか、「もう少し後でな

ら従います」というように、わたしたちの方から条件を付けることは許されていないということです。

20節にあるように、イエス様の召しに対して、ペトロとヨハネは「すぐに網を捨てて従った」とあります。またヤコブとヨハネも22節で、「この二人もすぐに、舟と父親とを残してイエスに従った」とあります。このようにイエス様の召しは、わたしたちに無条件にイエス様の召しに従って歩み出すことを求めているのです。

〈何の為の召しであるのか〉

イエス様はそもそも何のために彼等を召して、ご自分の弟子となさったのでしょうか。イエス様は19節後半で、漁師であった彼等に「人間をとる漁師にしよう」とおっしゃいました。「人間をとる漁師」とは、簡単に言うと、罪によって神との交わりを失っていた人間を、罪の支配から救い、神の国へと導くための仕事をする人のことです。もちろん、主イエス・キリストこそが、わたしたちを罪から救い、神の国に導くために、天の父なる神様から遣わされた「人間をとる漁師」です。

しかし、本日の箇所から教えられることは、わたしたちがイエス様の弟子とされるということは、わたしたちもまたイエス様と共に「人間をとる漁師」として、神の国のために働くという素晴らしい使命を与えられるということです。イエス様は、わたしたちをそのような素晴らしい働きの協働者として召してくださるのです。

(弓矢健児)



テキスト マタイによる福音書4章18～22節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問37、38

〔単元のねらい〕

今朝はガリラヤの四人の漁師たちが主イエスの招きのみ声にこたえて、弟子となって従った箇所のみ言葉から学びたい。時は満ち、神の国は近づいたと、それゆえに悔い改めて福音を信ぜよと主イエスは仰せになる。そしてみ言葉を聞く者に、み国の祝福を分け与えてくださる。主イエスの招きが掛け値なしの恵みの招きであることを、それゆえに主イエスに従うことが掛け値なしの祝福であることを、子どもたちとともに確かめたい。

「わたしについて来なさい」

イエスさまがご自分の弟子としてお選びになった人の数を知っていますね。そう、十二人の人々です。この人々はイエスさまの救い、神さまの恵みのみ国のよきおとずれを宣べ伝える、たいへんたいせつな働きをしました。

今朝は、そのうちの四人の人々シモン（この人は、のちにイエスさまから「ペトロ」という名前をいただきます）、アンデレ、ヤコブ、ヨハネの四人です。シモンとアンデレは兄弟でした。ヤコブとヨハネも兄弟でした。そして、四人はみな漁師の仕事をしていました。毎日ガリラヤ湖で魚をとっていたのです。

その日も彼らは漁師の仕事の真っ最中でした。ガリラヤ湖のほとりで、魚を獲る網の手入れをしていたのです。そこへ、イエスさまが近づいて来られました。ご自分のほうから、彼らに近づいてくださったのです。

とてもおもしろいと思います。四人は漁師でした。漁師の仕事は魚を獲ることです。でも、ここでは彼らが魚です。そして、漁師はイエスさまです。イエスさまは、魚たちを神さまのみ国に招き入れる網を持って、四人の漁師たちに近づいて、ご自身のみ言葉によって彼らをすなだられたのです。

神さまのみ国の祝福は、とても大きな祝福です。そこにはイエスさまがともにおられます。そこではすべての罪はゆるされ、もう死ぬことさえもこ

わがなくてよいのです。永遠の命をいただけるからです。そこではもう嘆くことも悲しむこともありません。そういう国に、イエスさまは私たちをも招き入れてくださいます。今、この漁師たちをも入れてくださろうとしているのです。

魚たちは、みなイエスさまの網に入っていきます。

「二人（シモンとアンデレ）はすぐに網を捨てて従った」（20節）。

「この二人（ヤコブとヨハネ）もすぐに、舟と父親とを残してイエスに従った」（22節）。

すばらしいプレゼントをいただけるというときに、それをいらないと言う人はないでしょう。イエスさまが彼らに与えようとしておられるプレゼントー神さまのみ国の祝福、罪のゆるしと永遠の命の恵みは、最高のプレゼントです。地上のどんな宝と引き換えにしても惜しくはないほどの贈り物です。イエスさまはご自分に従うなら、このプレゼントを確かに与えると約束してくださいました。ですから、彼らはすぐに、すべてを捨ててイエスさまに従っていったのです。

それだけではありません。イエスさまはこのようなもおっしゃいました。

「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」（19節）。

それまで彼らは湖で魚を獲っていました。けれどもイエスさまに従っていくな、これからは人

間を獲る漁師となると言われるのです。すなわちイエスさまのみ言葉を宣べ伝えることによって、多くの人々を神さまのみ国の幸いへとすなごる漁師となるのです。神さまの恵みに捕らえられた彼らが、今度は人々をみ国の恵みに捕らえる人となるのです。み国の祝福を多くの人々とわかちあう人となるのです。そのようにしてイエスさまは、み国の幸いをおし広げていくお働きのために、彼らをもお用いになるのです。私たちをも用いてくださるのです。

イエスさまは四人の漁師たちに「わたしについて来なさい」と言われました。そして彼らはこの

み言葉に従って、イエスさまの弟子とされました。

イエスさまはわたしたちのひとりひとりにも「わたしについて来なさい」と仰せになって、招いてくださっています。これは神さまのみ国への招きです。わたしたちもまた、このみ言葉に従いましょう。イエスさまについていきましょう。

この招きにこたえるかどうかということが、わたしたちの人生を決めると言ってよいのです。なぜならイエスさまとともに生きる道、神さまのみ国に入る道こそがほんとうの幸いの道、命の道だからです。

(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書4章19～20節

イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。

二人はすぐに網を捨てて従った。



〈ねらい〉

四人の弟子のように、イエス様に従うことの感謝と喜び、神様と共に歩むことの素晴らしさを知る。

〈展開例〉

ある朝、イエス様がガリラヤ湖畔を歩いていました。そこで二人の漁師シモン（後にイエス様から「ペテロ」と呼ばれる）と兄弟のアンデレとが網を打っているのをご覧になりました。

イエス様は「わたしについてきなさい。あなたがたを人間をとる漁師にしてあげよう」と言われました。彼らは魚を捕るのが仕事なのに、ここではイエス様が漁師で二人は魚です。人間を捕る漁師？ どういうことかな？

それは人々をイエス様のもとに連れてくるということですよ。

すると二人は網を捨てて、すぐにイエス様に従いました。網は彼らにとってはすごく大事なもので、生活の糧です。しかし、それよりも、イエス様を選んだのです。

またイエス様がすこし進んで行かれると、ヤコ

ブと兄弟のヨハネが父親のゼベダイと一緒に網を直していました。そこで彼らをお招きになりました。

すると二人は舟と父をおいて、イエス様に従っていきました。

彼らもシモン、アンデレと同じように、大事な舟と父をおいてイエス様についていきました。

地上でのどんな宝よりもイエス様に従うことの素晴らしさを知っていたのですね。

彼ら四人は、イエス様がお招きになったのです。彼らが高いお金を払って買ったのではなく、山にこもって修行したのでもありません。イエス様の一方的な恵みにより招かれました。

また彼らは学者とか有名人ではなく、ごく普通の人です。招かれた彼らはすぐにイエス様についていきました。「この仕事が終わってから」とか「あとで」とかではなく、無条件に、すぐについていきました。

私達も彼らのようにイエス様のもとにたくさんの人々を連れていき、イエス様の素晴らしい愛を伝えましょう。



〈ねらい〉

今、教会に集められている私たちも、弟子たちと同じように、ひとりひとりが神様によって招かれていること、そしてみことばを宣べ伝えるはたらきに召されていることを、分かち合いたい。

〈展開例〉

1. 漁師さんたちは、「私についてきなさい」と言われて、仕事をやめ、家族とも離れて、イエス様に従いましたね。同じように、私たちもイエス様に招かれています。どんなことか、わかりますか？
→今日の日曜日、私たちがどこか他の場所ではなく、礼拝をするために教会に来ることができたのも、イエス様が招いてくださっているからですね。
2. 湖で魚をとっていた漁師さんたちに、イエス様は「人間をとる漁師にしよう」とおっしゃいました。お弟子さんになった人たちは、イエス様が神様のみことばをたくさんの人に伝えるお手伝いをしました。私たちにも、みことばを伝

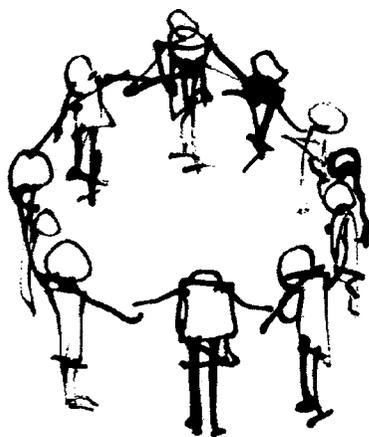
えるために何かできることはあるでしょうか？
→お友達を教会学校に誘う、イエス様を知らない人のために祈りする、困っている人を助けてあげる、など答えられるよう導く。

〈ワーク〉

- ①一緒にお弟子さんになった、シモンさんの兄弟の名前はなんですか。(アンデレ)
- ②あとになってイエス様につけていただいた、シモンさんの新しい名前はなんですか。(ペトロ)
- ③ヤコブさんの兄弟の名前はなんですか。(ヨハネ)
- ④お弟子さんになった四人が漁師をしていた湖の名前はなんですか。(ガリラヤ湖)

〈おいのり〉

神様、小さな私たちもイエス様の弟子として招いてくださることを、ありがとうございます。このお弟子さんたちのように、イエス様を心から信じ、素直に従うことができるようにしてください。



わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう

〈ねらい〉

弟子たちの召命をとおして、主に召され従うことの祝福を学ぶ。

〈展開例〉**1. 導入**

小学校の高学年になると自分の将来や進路について具体的に考え始める子もいると思います。

自分の人生の設計図は何を基準に描くのでしょうか。得意なことや興味のあることから将来の夢を描く子もいるでしょう。人との出会いによって心を動かされたことがきっかけとなる場合もあるでしょう。一人一人の子どもたちの将来の夢を聞いてみることから、話し始めるといいかもしれません。

2. 弟子たちの場合

今日のお話に出てくる、イエス様の最初のお弟子さんたちの場合はどうだったのでしょうか。

ペトロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネの四人はみな魚をとる漁師でした。それがある日、「人間をとる漁師」、つまりイエス様の弟子になるように召されたのです。

それは彼らが、自分から「どうか弟子にしてください」とイエス様にお願ひしたからでしょうか。そうではありません。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」とイエス様が招かれたからです。その言葉に彼らはすぐに従いました。

3. 召命とは

召命とは字のように、イエス様が召して命じることです。私たちがイエス様に、弟子になるようにと呼び出されることです。英語ではコーリング(calling)といいます。

呼び出された人たちはどう答えましたか。彼らは「突然そんなことを言われても……。もう少し考える時間をください」「わたしにはもっとやりたいことがあるんです」「今の仕事や用事がすんでからにします」などとは言わなかったのです。

彼らはすぐに網を捨て、父を残してイエス様に従いました。それは彼らが弟子としてふさわしい立派な人物だったからではありません。

イエス様が彼らをとらえたのです。彼らはイエス様の網にとらえられてしまったのです。

イエス様にとらえられると、自分のそれまでの古い生き方を捨て、新しく歩み出さざるを得ないようなことがその人の中で起こってきます。

4. 人間をとる漁師に

ペトロさんたちは、以前は魚をとって暮らしていました。彼らは魚をとる漁師から、イエス様のことを述べ伝える働き、人間をとる漁師に召されました。

彼らは永遠の命であるイエス様を宣べ伝えることによって、多くの人々を神様の国へと導く、すばらしい働きへと召されました。

5. あなたも呼ばれている

イエス様は、ご自分のもとに呼び出す人のことをよく知っておられます。その人がどういう性格でどんな癖があるのか。どこが弱いのか、苦手なのか、また得意なのか。将来の失敗も含めて、その人を知り抜いておられます。

イエス様は呼び出された人に、その人にしかできない働きをお与えになります。その人の手を用いて神様の働きを推し進められます。

呼び出してくださるお方は真実な方ですから、従う人を強め、その人を用いて神様に喜ばれる実を結ばせてくださいます。

イエス様を裏切ったような弱い弟子たちも、最後には死をも恐れない者とされました。大勢の人たちが、このお弟子さんたちの働きによって救いへと導かれたのです。

私たちもイエス様の働きに招かれています。イエス様に呼び出されたとき、あなたはどうかたえますか。

6. クイズ「わたしは誰でしょう」

大きな紙にペトロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネの名前を書いておく。118ページを参照してください。それぞれの人物の説明を書いて、それを一つずつ切り取ったものを用意しておく。誰のことなのかを考えさせて、当てはまる人の名前の下にその紙を貼ってもらう。

〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に……

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズム問37、38が挙げられています。

問37 神さまが人に求めておられることは何ですか。

答 神さまが私たちに求めておられることは、感謝することです。

問38 あなたはその感謝をどのようにしてあらわしますか。

答 神さまが聖書を通して明らかにしておられる御心に従うことです。

☆次のカテキズムの「なぜ善い行いをしなければならないのですか」という問いは、ちょっとカチンとくるかもしれません。けれども、答えの方を見ると、イエスさまに救っていただいて、福音を宣べ伝える働きに召された弟子たちが、そのように生まれ変わらせられたこと、感謝したこと、生活したこと、多くの人をキリストに導いたことを思い起こさせられます。そして、わたしたちもそうありたい、と思わせられると思うのです。長い文章ですが三つの部分に分かれていますから、少しずつ挑戦してみましょう。

ハイデルベルク信仰問答

問86 わたしたちが自分の悲惨から、自分のいかなる功績にもよらず、恵みによりキリストを通して救われているのならば、なぜわたしたちは善い行いをしなければならないのですか。

答 なぜなら、キリストは、その血によってわたしたちをあがな贖われたのち後に、その聖霊によってわたしたちを御自身のかたちへと生まれ変わらせてもくださるからです。

それは、わたしたちがその恵みに対して全生活にわたって神に感謝を表し、この方がわたしたちによって讃美されるため

す。

さらに、わたしたちが自分の信仰を 事実によって自ら確かめ、わたしたちの敬虔な歩みによって わたしたちの隣人をもキリストに導くためです。

〈今週の聖書日課〉

日曜日	ローマ12:1~2
月曜日	コリント一6:19~20
火曜日	ガラテヤ5:22~26
水曜日	ローマ6:13
木曜日	マタイ5:16
金曜日	ローマ14:17~19
土曜日	ペトロ一2:5~12

先生方へ②

今回は「教理問答と聖書と中学生」というテーマで少し書かせていただこうと思います。最近、教理問答についている引照聖句のリストはどのくらいの重みを持たれているだろうか、と思われています。今、西神伝道所の祈禱会で、ウェストミンスター小教理問答の一つ一つについて、挙げられている引照聖句を丁寧に読んでいくことで、その問答に込められている教えを読み解く、という学びをしています。今まで幾度となく解説を聞いてきたウ小教理ですが、祈禱会での学びを通して、ウェストミンスター信仰基準が徹底的に聖書に聞いて、その真理を追究し、その深い聖書理解に基づいて書かれているということがわかり、毎回感動を覚えています。問答の文言だけではわからない（隠されている）ことが、引照聖句をじっくりと読んでいくと、見事に明らかになるのです。やはり主体は教理ではなく聖書（引照聖句）の方なのだと思わされます。逆にまた、解釈の難しい聖書箇所について、問答が適切な読み方を教えてくれる例も見ました。

テキスト マタイによる福音書5章1～12節

〈誰に語られたのか〉

本日の箇所は、イエス様のお語りになった「山上の説教」の一番最初の部分です。2節にあるように、この教えは直接的には、近くに寄って来た弟子たちに対して語られたものです。つまり、山上の説教全体は弟子たちに対して語られた言葉であり、それは弟子とされた者が、この世にあっていかに生きるべきかを教えた言葉です。その中でも本日の箇所は所謂「祝福の教え」と呼ばれている箇所であり、「幸いである」というイエス様の言葉を通して、イエス様の弟子して生きる者に与えられる祝福がまず教えられています。

〈幸いであること〉

ここでイエス様がおっしゃっている「祝福」は、決して「遠い将来に祝福が与えられる」、「いつかは祝福が与えられるだろう」、というような曖昧なものではありません。本日の箇所「幸いである」と言われている言葉は、直訳するならば「幸いなるかな！」又は、「なんと幸いな！」という、今現在の祝福を喜ぶ感嘆詞です。つまり、イエス様はここで、主の弟子として生きる者は既に神様の祝福が与えられているのだ、という恵みの現実を語っておられるのです。

〈「心の貧しさ」とは〉

イエス様はこの祝福の教えの最初を、「心の貧しい人々は、幸いである」という言葉ではじめら

れました。それなら「心の貧しい人々」とは一体どのような人のことでしょうか。ここで言われている「心」とは「ブニューマ」、すなわち霊を意味します。つまり、ここでは単なる経済的な貧しさというより、神様との関係における、わたしたち人間の霊的な貧しさが強調されています。

イエス様がマタイ10:30で教えておられるように、人間は自分の髪の毛一本さえも自分の力ではなく、神様の摂理の御手に負っています。人間は全てのことを実は神様に負っているのであり、神の御手によらなければ生きることができません。だからこそ、わたしたちは自分の力におごるのではなく、神様の前に自分自身の無力さ、貧しさをまず知らなければならないのです。

〈天の国の恵みの中を生きる幸い〉

しかし、なぜイエス様はここでそのような「心の貧しい人々」が「幸いである」などと語っておられるのでしょうか。それは、イエス様が心の貧しさの現実、弱さの現実にあるわたしたちをそれでも愛し、わたしたちに天の国の恵みを与えてくださるお方だからです。「天の国の恵み」とは「神の国の恵み」と同じです。簡単に言うならば、「神様の愛の中で神様と共に生きる恵み」ということです。自らの貧しさを認め、イエス様を信じ、イエス様の召しに従って歩む者は、そのような素晴らしい祝福の中を生きることができるのです。

(弓矢健児)



テキスト マタイによる福音書5章1～12節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問2

〔単元のねらい〕

主イエスの山上の説教は、まず幸いな人々について語る。幸いな人々とは「心の貧しい人々」「悲しむ人々」「柔和な人々」「義に飢え渴く人々」「憐れみ深い人々」「心の清い人々」「平和を実現する人々」「義のために迫害される人々」を言うが、今朝はとくに「心の貧しい」人々について学びたい。

ここで留意すべきことは、「貧しい」の意味である。それは空である、うつろであるということである。カルヴァンが、信仰とはそれ自身はひたすらむなしのものであると指摘していることも思い合わされる。

「心の貧しい人々は幸いである」

だれもが幸せな人生を送りたいと願っていると思います。わざわざ不幸な人生を望む人などありませんね。では、幸せな人とは、どのような人と言うのでしょうか。

イエスははがるときに山に登られて、み言葉をお語りになりました。そのみ言葉は、幸せな人とはどのような人と言うのかということから語り出されました。

そしてイエスさまは、まっ先にこうおっしゃったのです。

「心の貧しい人々は、幸いである。

天の国はその人たちのものである」(3節)。

心の貧しい人々は幸いであるとイエスさまははっきりとおっしゃいました。そして、そのような人々こそ神さまのみ国に入ることができることもおっしゃったのです。

これを聞いて、皆さんはどう思いましたか。貧しいことが幸せだなんておかしいな、貧しいことは不幸なことではないのかなと思った人はいませんか。

確かに、生活は貧しいよりも豊かであってほしいですね。それから、心も貧しいよりは豊かでありたいと思います。豊かな心を持つ人になれたなら、やはりそのほうが願わしいことだと思うのです。

でも、イエスさまは心の貧しい人々こそ幸いなのだとおっしゃるのです。このイエスさまのみ言

葉は、どのような意味なのでしょう。

このみ言葉を理解するうえでたいせつなことは、貧しいという言葉の意味を正しくわきまえることです。実はここで貧しいとは、からっぽであるということです。うつろであるということです。ちょうど、からっぽの器を想像してくださいとよいと思います。つまりイエスさまは、心がからっぽな人々は幸いであると仰せになるのです。

では、なぜ心がからっぽな人々は、幸せなのでしょう。

それは、心がからっぽな人ほど、そこにイエスさまのみ言葉をたくわえることができるからです。うつろな所にこそ、イエスさまの恵みがあふれるほどに満たされるからです。

わたしたち人間は神さまに造られました。人間の命も神さまによって生かされています。わたしたちが日々生きるための食べ物も飲み物も、知恵や力も、神さまが備えてくださる恵みの賜物です。

けれども、人はどうかするとそのことを忘れてしまいます。そして、自分ひとりで生きている、神さまの守りや支えなしに、ひとりで生きていけると思い込んでしまいます。そうすると、イエスさまを心から締め出してしまうことも起こるのです。イエスさまのみ言葉をたくわえておく場所を、この世のもろもろのことでいっぱいにしてしまうのです。そういう人々は、幸いな人々ではないのです。いちばんたいせつなことを忘れ果てて

しまっているからです。

心の貧しい人々とは、心をからっぽにしておく人々です。それはイエスさまの恵みをそこにいっぱい満たしていただくためです。その人々は、人はイエスさまの恵みなしには一日も生きることができないことを知っています。イエスさまのみ言葉に豊かに養われて生きることが、天国の幸いをもたらすことをよく知っているのです。

世の中には、貧しいことが不幸である、みじめであるという考えがあるかもしれませんが、けれども、神さまのみ前で貧しくあることは、不幸なことでもみじめなことでもないのです。はたいたに、

これほど幸せなことはないのです。

イエスさまこそがわたしたちのほんとうの宝です。ほんとうの富、豊かさは、イエスさまが私たちの心に住んでくださることです。どうかこのことを、しっかりと覚えておいてください。

パウロはイエスさまを信じて生きる人を、イエスさまという宝を納めた土の器にたとえています。器は土でできていますから、もろくこわれやすいのです。わたしたちも、弱く罪深い器です。でもその器には永遠の命の宝が納められています。ですから、どんなときにも輝きを失うことはないのです。
(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書5章3節

心の貧しい人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。



〈ねらい〉

「幸い」な人とは、自分の中には神さまに喜ばれるものは何一つない、ただ罪人でしかないことを認める人のことです。神さまの前に物乞いのように、赦し、義を求める人、つまり心の貧しい人のことです。なぜなら、神さまはそのような人といつまでも共にいてくださるからです。子どもたちに、自分は幸せな子ども、神さまがいっしょにいてくださっている子どもだと分からせてあげたいと思います。そのために、「〇〇ちゃんは、今日、教会学校に来れたから、イエスさまから、『幸せだよ』と言われているんだよ」と告げてあげましょう。

〈お話例〉

今から約2000年前、主イエス様が、ガリラヤ湖のそばの山に登りました。イエス様は私たちを救うために、神の国から来て下さった神様です。十字架にかかって下さるまで、いろいろなところでたくさんの人々に神の国についてお話して下さいました。今日は、山に登り、いままで誰も聞いたこともない素晴らしいお話をして下さいました。イエス様のそばにいる弟子たちと、その周りには、イエス様を信じて歩む人たちに「幸せな人生」についてお話されたのです。

「心の貧しい人たちは、幸いである。天国は彼らのものである。」

この「心の貧しい人」というのは、どういう人のことでしょうか。ギリシャ語では、「おびえた人、怖れて身を隠し震え上がった人」のことです。ユダヤの言葉でも「貧しい」というのは「悩ま

れる人」のことを意味します。または、「物乞い」ともいうのです。

この世の中の人々は、幸せになるためにお金持ちになりたい、有名になりたい、地位を得たい。学歴や才能がほしい、美しくなりたい、こうしたことが幸せになると思って追い求めているかもしれませんネ。〇〇ちゃんも、きれいな洋服、おいしい食べ物、たくさんのおもちゃ、立派なお家がほしいと思っているかもしれませんネ。

でも、こうしたものは、人を心の底から幸せにはしてくれないのです。こうしたものは、すぐなくなってしまうものだからです。

なくなるもの、それは、神さまです。イエスさまとおもちゃとどちらが大切ですか。おもちゃが一杯あって、イエスさまを大切にしない人は「心の貧しい人」ではありません。「心の貧しい人」というのは、「ただ、ただ、神様の助けと見守りとお支えがなければ、一歩たりとも進めません。どうか、神様、私を助けて下さい」と祈る人、神さまでしか心が満たされることのない人のことです。

ほんとうの「幸せ」というのは、神様が私たちに御顔を向けて祝福し、恵みを与えて下さり、私の人生を神様の御旨によってご計画して下さいるかどうかにあるのです。そして、私たちは、神様のご計画に従って従順に誠実に忠実に歩んでいるとき、どんな迫害や、試練の中にある時でも「幸せ」なのです。神さまが、その人を満たして下さい、一緒にいてくださるからです。神の国は、このような人たちに用意された、神様のおそばにいられる住まいなのです。

〈ねらい〉

神様が、私たちの貧しさを知ってくださり、憐れみ、天の国に入れてくださる祝福を知る。「貧しさ」「幸い」など、子どもたちには具体的にイメージしにくい事柄を扱うので、身近な例を用いつつ、対話の中で、神様からいただく真の幸福について分かち合いたい。

〈展開例〉

1. 皆さんは今、幸せですか？ どんな時、どんなことを、幸せと感じるでしょうか。また反対に、幸せでない、と感じるのはどんな時ですか。
→自由に発言させ、耳を傾ける。
2. では、私たちが一生懸命神様にお祈りするのには、幸せな時、そうでない時、どちらでしょうか？
→私たちは、楽しい時や、なんでもうまくいっている時は、ついつい神様のことを忘れてしまったりします。でも、幸せでない時、困った時や悲しい時は、「神様、助けてください！」とお祈りします。そして、神様が私たちのそ

ばにいて、いつも守ってくださることを知ることができます。

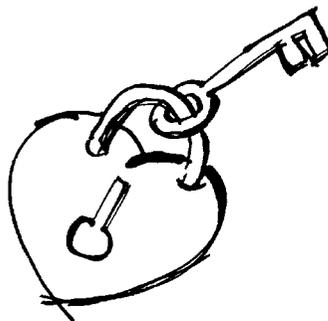
3. 私たちは誰でも、罪という貧しさを持っています。神様はそんな私たちに、素晴らしい約束をしてくださいましたね。
→天の国に入れていただける。

〈いのりあおう〉

展開例1で、子どもたちから今抱えている悩みや不安が出た時は、それに寄り添いつつ、お互いのため、またはしばらく来ていないお友達のために、それぞれが一言ずつ祈る。お祈りをしたことがない人にも、教師が導いて、祈るきっかけを作れると良いが、無理強いしないよう配慮する。

〈おいのり〉

神様、心の貧しい私たちを憐れみ、私たちがお祈りを聞いてくださることを、ありがとうございます。どんな時も喜んで、この一週間を過ごすことができるようにしてください。



心の貧しい人々は、幸いである
天の国はその人たちのものである

〈ねらい〉

どうして「心が貧しい人は幸いである」のか。

〈展開例〉

1. どういうときに幸せを感じる？

あなたはどのようなときに幸せを感じますか。

- ・成績が上がったとき？
- ・欲しいものを買ってもらったとき？
- ・苦手なことができるようになったとき？

それぞれ、思いつくことを紙に書いてみましょう。共通していることはありますか。

- ・気分がよかったり、楽しかったり、うれしいこと。
- ・前よりもよくなり、よくなること。

幸せの感じ方は人によって違います。ある人にとっては幸せだと感じることで、別の人にとっては幸せだと思わないこともあります。また、時間がたつとその喜びがなくなってしまうこともあります。反対にその人が幸せだと思っても、実はちっとも幸せではないこともあるのです。たとえば泥棒が、「今日は盗みがうまくいって大金がごっそり入ったぞ」と喜んでいても、その泥簿を本当に幸せな人と言えるでしょうか。

2. 本当の幸せとは

本当の幸せとは何でしょうか。

本当の幸せとは何かを考える前に、不幸がどこから始まったのかを考えてみましょう。

人は初め、神様から祝福された幸せなものとして造られました。神様と人間の関係を妨げるものは何もありませんでした。しかし、人間の中に罪が入り込んだことによって病気や死、争いや犯罪が起こってきました。この罪の問題が解決されない限り、人は本当の幸せを手に入れることができません。

幸せとは神様との関係がこわれていない状態、神様に祝福されている状態のことです。

3. 心が貧しい人が幸せ？

イエス様は、心が貧しい人が幸せな人であると教えてくださいました。心が貧しい人とは、どんな人のことでしょうか。それは性格が悪い人とか、

感情が乏しい人という意味ではありません。

心の渇きを感じている人、心に大きな穴がぼっかり空いていて、それを埋めてほしいと願っている人のことです。

人の心には神様にしか埋められない大きな穴があいています。それを人はお金によって、夢によって、家族によって、趣味によって埋めようとしています。

うまく埋められたと思っていても、本当はポロポロで隙間だらけだということに気がつきません。人間がどんなに努力してもその穴を埋めることはできないのです。

心が貧しい人とは「わたしは自分を救えるものを何ひとつ持っていません。わたしは本当に惨めな人間です。神様なしには生きていけないものです」と告白できる人のことです。そういう人は、神様にだけより頼むようになります。そして神様から幸いな人と呼んでいただけるのです。

その人が幸いな人と呼ばれるのは、そういう人だけが神の御国に入ることができるからです。

神の国とは、神様のご支配が隅々にまで完全に及んでいる国です。神様との壊れた関係をイエス様によって正しく回復された私たちは、すでに神の国に入れられている幸いな人なのです。

4. 和紙のちぎり絵でしおりを作る

【用意するもの】画用紙（台紙）、いろいろな色の和紙（ちぎり絵用のセットもあります）、ヤマトのり（チューブなどに入っている糊）またはでんぷん質の糊、パンチ、ハサミ、リボン、糊付けするときの敷紙（チラシ）

①台紙をしおりの大きさに切る。

②台紙に鉛筆で花などの下絵を描く。ペンなどで「心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである。」と書く（絵と文字をバランスよく）

③和紙を下絵に合わせて指先でちぎり、細かいところはハサミで切って、台紙に置いてみてから糊で貼る。（和紙は縦方向に切るほうが切りやすい）

④台紙の一番上の真中にパンチで穴をあけてリボンを結ぶ。

〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に……

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズム問28が挙げられています。

問28 主イエス・キリストの救いは、どのようにして私たちのものとなるのですか。

答 私たちが持っている正しさやかしこさ、そのほか、どんな良いものでも、自分の力で救いを手に入れることはできません。救いは、ただ神さまの恵みとして与えられるのです。

☆子どもカテキズム問28を違う言葉で言い換えると、ハイデルベルク信仰問答の問60のようになります。この答えはとても長いので、覚えるのは後半の「神は、わたしのいかなる功績にもよらず……」以降だけでもよいでしょう。そして、最後の「そして、そうなるのはただ、わたしがこのような恩恵を、信仰の心で受け入れる時だけなのです」の「信仰の心」が、今日教えられている心の貧しい状態、からっぽで、イエスさまに満たしていただくのを待っている状態につながるような気がします。

ハイデルベルク信仰問答

問60 どのようにしてあなたは神の御前で義とされるのですか。

答 ただイエス・キリストを信じる、まことの信仰によってのみです。
すなわち、たとえわたしの良心が私に向かって、「お前は神の戒めすべてに対して、はなはだしく罪を犯しており、それを何一つ守ったこともなく、今なお絶えずあらゆる悪に傾いている」と責め立てたとしても、神は、わたしのいかなる功績にもよらず、

ただ恵みによって、キリストの完全な償いと義と聖とをわたしに与え、わたしのものとし、あたかもわたしが何一つ罪を犯したことも 罪人であったこともなく、キリストがわたしに代わって果たされた服従をすべてわたし自身が成し遂げたかのようにみなしてくださいませ。

そして、そうなるのはただ、わたしがこのような恩恵を 信仰の心で受け入れる時だけなのです。

〈今週の聖書日課〉

日曜日	フィリピ3:8~11
月曜日	ローマ4:5
火曜日	ローマ4:24~25
水曜日	テトス3:4~5
木曜日	ヨハネ3:16~18
金曜日	使徒16:30~31
土曜日	エフェソ2:8~10

先生方へ③

ポーレンがカテキズムを、聖書を凝縮した詩だ、と言った話を以前書きましたが、西神伝道所の牧師はもともと詩を深く学んでいた人。詩を読める人が教理問答を読むと、この深みにまでたどり着けるのか、と思われています。問答の一つ一つについて引照聖句をじっくりと読む作業、これによって、今まで気づかなかった新しい発見があるかもしれません。毎週の分級の準備の際に、その日のカテキズムの引照聖句を開いたり、聖書日課の聖書箇所をあらかじめ見たりなどしてこの作業をすることを、まずぜひご自分でなさってみることをお勧めします。

イエス様は、「思い悩むな」と語られました。今日の聖書箇所を理解する上で、思い悩み（思い煩い）と心配とを区別することは有益です。思い煩うとは、思いの病気（煩い）とも言える現象で、寝ても醒めてもそのことを考え続け、何もできなくなることで、心配とは心を配ることで、生きる上で用心深く振る舞うことは必要です。

誰かが手術をするとすれば、周りの者は心配して祈ります。寝不足で車の長距離運転をするときは、眠くなってきたら、途中で車を止めて、仮眠します。居眠り運転の心配があるからです。帰りが遅れるとき、家に電話を入れます。両親が心配しているからです。試験が近づいてきたら、勉強します。よくできるかどうか心配だからです。

それに対して、思い煩いとは、試験で悪い点をとったらどうしようと考えても、勉強しません。手術を心配し過ぎて、寝付かれなくなり、祈ることもできなくなり、体調を崩してしまいます。自分のことで心が一杯になり、両親が心配して待っていることにまで、心が回らなくなります。

イエス様が、「思い悩むな」と語られたのは、神様が、私たちのことを十二分に心配してくださっているからです。神様が、心を配ってくださるのに、そうでないかの如くに、自分一人で考えて悩むのは、事実認識において誤っています。また、神様が心配してくださることよりも、自分が考えることの方が確かであると思えば、それは不信仰そのものです。

ここには、空の鳥と野の花が登場します。空の鳥は、神様に支えられて生きる豊かさや自由さの象徴であり、野の花は、神様が与えてくださる美しさの象徴です。人間が自分の努力で到達できる豊かさや美しさより遙か上の祝福を、すべての人は、神様から与えられています。

ここで、私たちは、イエス様の約束の言葉を信じなければなりません。私たち人間は、鳥よりも野の花よりも、神様の御前で価値ある者であると

いうことです。創造主である神からすれば、人間も野の花も鳥も、すべては等しく被造物です。しかし、イエス様が語る神様は、「あなたがたの天の父」です。イエス様と結ばれた者に対して、父として振る舞ってくださる神様です。神様は天におられ、私たちは地にいますが、神様の御手は短すぎて届かないことは決してありません。完全な父として、鳥を養うとき以上に優しく私たちに接し、野の花にしてくださった以上に清楚な美しさで私たちに装ってくださいます。

ですから、神様を知らない者であれば、自分の力に頼るはずの場面で、私たちキリスト者は神様に依り頼みます。私たちの父なる神様は、私たちに必要なものをご存知であり、必ず、備えていてくださるからです。鳥や野の花が生きていることに関して思い悩んでいないように、私たちも生存を維持することに関して、心を砕いても、思い悩みません。父なる神様が、すべてをご存知で、整えてくださるからです。

キリスト者は、その代わりに、神の国の進展を祈り、そのために心を用います。神様の御心に適う神の義が地上に実現されるために、自分がすることは何かを考えます。イエス様は、何よりも先ず、神の国と神の義を求めなさいと語られました。これは、主の命令です。私たちが求めるべきは、自分のことではなく、神様のことです。神様のことを第一に考え始めるとき、自分のことは第二になり、自分のことばかりを気にする思い煩いから解放されます。そして、神様は、神の国の進展に添えて、神を慕う者の生活を豊かに祝福してくださいます。

神の国を第一に求めるとき、自分の明日は、神様の御手のなかにあるのですから、思い煩いの対象とはなりません。明日のことではなく、今日なすべきことに集中します。神様は、今日を精一杯生きるに足る生き甲斐と仕事を、毎日毎日、豊かに与えていてくださいます。（岩崎 謙）

テキスト マタイによる福音書6章25～34節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問31、58
 ウェストミンスター信仰告白 12章、14:3
 同大教理 問74、136、142、同小教理 問34、75

(単元のねらい)

何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようか、何を買おうかと考えることは、非常に楽しいことです。しかし、それらのものが、誰によって与えられているのかを、子どもたちと一緒に確認したい。また、そうすることにより、全てのものをお与え下さっている神さまに感謝して、神さまを信じるこそが、何よりも重要なことであることを、子どもたちに示して頂きたい。

「本当に必要なものは、神さまがお与え下さいます」

みんなは、お家の人と一緒に買い物に行った時に、「このお菓子を買って」、「この服を買って」とおねだりしたことはありませんか。お家の方は、「一つならいいよ」って言って、買ってくれる時もあるかも知れませんが、「今日はダメ!」、「こんなにいっぱいなら買わない」と言われて、買ってもらえないこともあるかも知れません。そういう時は、「あれ欲しかったのに、残念だなあ」と思うでしょうね。でも、「今日はダメ」ってお家の方が言うのは、みんなのことをよく知っているから、今日は必要ないと思うから、買ってくれないんだよね。でも、「学校で必要だから買って」って言ったら、お家の方は必ず買ってくれるでしょう。お家の方は、みんなのことを、本当に愛してくれているから、そして今、何が必要で、何が必要でないかを、ちゃんと知っているんだよ。だから、本当に必要なものであれば、必ず買ってくれるし、そうでない時は、たまには買ってくれるかも知れないけれど、買ってくれない時もあるんだよ。

神さまも、同じなんだよ。神さまは、神さまを信じるみんなを、神さまの子どもとして下さいますから、みんなが大好きです。だから、みんなが生きていくためには何が必要で、何が必要でないかを、ちゃんと知っていて下さいます。そして、本当にみんなが必要なものがあれば、ちゃんと用

意して下さいませ。

聖書を見て下さい。「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。」(26節)と書いていますね。神さまは、みんなを愛してくださると同時に、自然の中の鳥や花も愛されています。神さまがおつくりになられたものだからです。だから、鳥が生きていくために、どこに餌があるか、ちゃんと分かるようにして下さいませ。

みんな渡り鳥って知っていますか。これからだと、白鳥が飛んでくるかも知れませんよね。夏の間にはシベリアが寒くなり、食べ物もなくなるため、南の日本に来ることによって、冬を越すことが出来、また食べ物も得ることが出来るのです。神さまは、こうした知恵を、白鳥に生まれ持ったものとしてお与え下さいませ。

また聖書は、「野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。」(28節)とも語っています。秋になって、いろんな花が花を咲かせていますね。こうしたお花も、神さまがお花を咲かせて下さるのです。

でもね、神さまは、こうした鳥やお花よりも、ずっとずっと、みんなのことが好きなんだよ。あれもない、これもない、あれも欲しい、これが欲

しいと考えるよりも前に、本当にみんなにとって何が必要なのかを、ちゃんと知っておられる神さまが、今、ここにいて下さっています。この神さまを信じて頂きたいのです。そうすると、神さまは、みんなが必要なものをちゃんと知っていて下さるから、毎日の生活に必要なものを備えて下さいます。だから、主の祈りで「我らの日用の糧を、今日も与え賜え」と祈ることを、主イエスさまはお許し下さっていますよね。神さまは、私たちが本当に欲しいものを知っていて下さると同時に、私たちの祈りをも聞いていて下さいます。だから

こそ、神さまは祈りに答えて下さるのです。

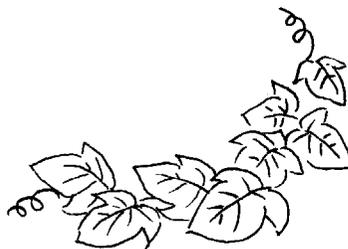
それだけではありません。神さまは、なによりもみんなにとって一番必要な、救いをお与え下さいます。

だから、何が欲しい、これが欲しい、みんなが持っているから買って、と願うのではなく、本当に必要なものをお与え下さる神さまを信じて、神さまによる恵みによって、日々、歩んで頂きたいと思います。 (辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書6章33節

何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。

そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。



〈ねらい〉

すべてのものをお創りになった神さまは、私たちが、生きていくために必要なものをすべて知っておられ、それらを与えてくださいます。神さまを信頼して、毎日お祈りしましょう。

〈展開例〉

みんなは、神さまが、すべてのものを造られたことを知っていますよね。月や太陽や星、海や空やこの世界。そして鳥や魚や動物たち、草や花やおいしい果物。そして一番最後に人間を造られました。

神さまは、人間をご自分に似せて造られ、神さまの息を吹きかけてくださいました。神さまを信じれば、神さまの子どもとしてくださるという約束もしてくださいました。神さまはみんなのことが大好きです。お母さんやお父さんや先生がみんなのこと大好きだと思ふよりもずっとずっと大好きです。(一人一人にハグハグしてあげてください。)

聖書の中でイエスさまはおっしゃいました。

「空の鳥をみてごらんさい。人間のように働いたりしません。それなのに、鳥は神さまから食べ物をしていただき、元気に空を飛んでいます。人間は鳥よりもすばらしいものではありませんか。」

「野に咲く花はどのようにして育ちますか。花も人間のようにはたらきませんが、なんてきれいに咲いているのでしょうか。」

鳥や花以上に、人のことを神さまは考えてくださっています。神さまは、私たちのことなら何でも知っています。体のこと、そう、この髪の毛の数まで知っておられます。食べること、飲むこと、着ること、生きていくために必要なことをなんでも知っておられます。

みんなの周りに赤ちゃんはいますか？ 赤ちゃんはまだおっぱいしか飲みませんし、みんなみたいにあれが食べたいこれが食べたいとは言わないけれど、おっぱいは、赤ちゃんにとって大切なものがたくさん入っていて、赤ちゃんだけがおいしいと思うように神さまは造ってくださいました。

神様はすばらしいお方ですね。神さまは、私たちに必要なことをすべて知っておられます。そして与えてくださいます。神さまにいつもありがとうございますと心から感謝いたしましょう。そして信頼して、「私たちの日ごとの糧を今日もおたえください。」とお祈りしましょう。

〈おいのり〉

大好きな天のお父さま、いつも私たちに必要なものを下さってありがとうございます。私たちの日ごとの糧を今日もお与えください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

月や星、動物やお花、虫、子どもの好きな食べ物、のりものなど自然やまわりのものを絵にしてカードを作ります。なぞなぞゲームをして遊んでみてください。子どもが当たったらカードをもらい「神さま、〇〇を下さって(または、造ってください)ありがとうございます」と言ひましょう。答えは先生が考えているものと違うかもしれませんが、子どもの想像力を喜んで一緒に楽しめます。

〈聖書箇所〉

わたしたちに必要な糧を今日与えてください。(マタイ6:11)

〈ねらい〉

欲しい物に心を奪われ簡単に動揺してしまう人間の罪に注目したい。しかし、単に禁欲が良い事としないように注意したい。その点を誇張するのではなく、弱いながらも神様にどの様に仕えるのか、また、それによって様々な欲望から解放される神様の愛のメッセージを的確に伝えるようにしたい。

〈展開例〉

1. みんなは何か欲しい物があるとき、誰に、どうやってお願いしますか？ その願いは、必ず聞いてもらえるかな？ 聞いてくれる事もあるけど、いつも聞いてもらえないね。聞いてもらえなかったらどうしますか？
→自分の親と答える場合と、神様、と答える場合のリンクを考えながら、必ず良い物を与えるように考えられている、という事を一緒に考える。
2. 神様は「思い悩むな」(25節)とおっしゃっていますが、何か欲しい物があって悩んだり、考えたり、心配した事がありますか？
→誰でも思い悩み、心配事としてその点を共に共有したい。
3. 「空の鳥」(26節)を養っているのは誰ですか？
→大自然をも愛して下さる神様の広い愛と一緒に考える。
4. 私たち人間はその鳥よりも良いもの、とおっしゃっていますが、どうしてだと思いますか？
→自分たちで考え、働き、そしていつも最善の道、物を用意して下さっている事を聖書から知る事ができる。

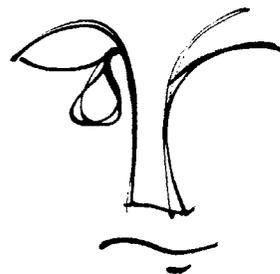
5. (上記を踏まえ)「何よりもまず神の国と神の義を求めなさい、そうすればみんな加えて与えられる」とおっしゃっています。
→この世の思い煩いからの解放が、まず神様の恵みである事を一緒に考えたい。

〈ワーク〉

- ①食べ物より大切な物は何ですか？(25節)
- ②衣服(洋服)より大切な物は何ですか？(25節)
- ③飲み食いすることと、着る服の事で「思い悩むな」(25節)とありますが、どういうことだと思いますか？ 一緒に考えてみよう。
→聖書箇所にとらわれず、自由な意見、感想を話し合おう。
- ④そんな事よりも、何を求めなさいと神様はおっしゃっていますか？ 33節を読んで答えてみよう。
- ⑤そうすると、何を神様は与えて下さる、とおっしゃっていますか？(33節)

〈おいのり〉

神様、私たちはいつも欲しい物ばかりで神様の事をすぐ忘れてしまう愚かな者です。どうか、罪の道に歩むのではなく、イエスさまの道に歩ませて下さい。そして、神様の国と神様の義を求めるとなりますように。



何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい
そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる

〈ねらい〉

思い悩むとはどういうことかを考える。

〈展開例〉

1. どれが思いわずらい？

イエス様はおっしゃいました。「『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』といて、思い悩むな」

次の中でこの「思い悩む」に一番近いものはどれでしょうか。

- ①明日のパーティーにどんな服を着ていこうかとあれこれ悩む。
- ②レストランに入って、何を注文しようかと迷う。
- ③いつお金が必要になるかと思うと心配なので、日曜日にも仕事をして備えておこうと考える。

①～③はここでいう思い悩むことではありません。思い悩むとは、生きていくために必要なものが本当に与えられるか不安で、どうしようかと心配して悩むことです。思い悩むとは、自分の命と体を生かすために必要なものがちゃんと備えられるか心配で、そのことで頭がいっぱいになっている状態のことです。

2. どうして思い悩んではいけないの？

思い悩むのは、自分を生かすために必要なものは、自分の力で何とかしないといけないとっているからです。自分の力でどうにかできているからです。

それはまるで生まれたばかりの赤ちゃんが、明日私が飲むミルクはちゃんと用意されているだろうか心配しているようなものです。

ミルクだけでなく、部屋の温度やおむつやベット、赤ちゃんに必要なものすべてを整えてくれてお母さんを信頼していないのです。

私たちに命をくださった神様は、私たちが生きるために必要なものをすべてご存知です。

野の花や空の鳥をよく見なさいとイエス様は言われます。人の目にとまらないような所でも美しく咲いている野の花のすばらしさに驚かされます。野の花にさえ最高の配慮をもって美しく装っ

てくださっているのです。まして、はるかに価値のある私たちを、神様はどんなに愛してくださっていることでしょう。

神様は私たちを救うために、イエス様を十字架につけることによってその愛を示してくださいました。御子の命を与えてくださるほどに私たちを愛してくださる神様にかわって、明日の心配をしてあくせく悩むことは、神様を信頼していないことと同じです。

3. まず神の国と義を求めなさい

どうしたら思い悩まない人となることができるでしょう。そのためにはまず、「神の国と神の義を求めなさい」と神様は言われます。思いわずらっている人は、生活に必要な「物」が自分を安心させ、幸せを保証してくれるのだと思っています。そういう人は心が「物」に支配されているのです。

しかし、私たちが幸せにしてくれるのは物ではなく、それらを惜しみなく与えてくださる神様の愛です。

神の国と神の義を求めるとは、私たちの心を神様に支配していただくことです。そうすれば必要なものもすべて与えられると神様は約束してくださっています。

4. 野の花、空の鳥をよーく見てみよう

①野の花の観察

野の花や高山植物などの写真集などを用意する。わたしたちの目にふれないところに咲くような、名も知らない花も、いかに種類が多くあり、可憐で美しく造られているかを見る。(本物の花などがあれば観察し、話し合う)

②賢いカラスの話 (ルカでは鳥はカラスとなっている) 嫌われ者のカラスにもすごい知恵が与えられていることを学ぶ。

・ニューカレドニアにすむカラスは倒れた木の中にいる幼虫を、落ち葉の柄の部分を使って魚釣りのように釣って食べる。

<http://homepage3.nifty.com/shibalabo/crow/index.htm>の「ニューカレドニアの天才カラス」を参照。

〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に……

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズム問31（子とされること、義認）、58（第八戒）が挙げられています。

☆今回はむしろ、暗唱聖句「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」との関連で、次の問答を選びました。

☆十戒がなぜ厳しく説かれるのかといえば、「キリストにある罪の赦しと義とを求めるようになるため」というのがハイデルベルク信仰問答の問115。「そうすれば、これらのものをみな加えて与えてくださる」、良きものすべての唯一の源であられる神さまを覚えるのが問126です。

☆一人で二つとも覚えてもいいですし、生徒が複数いたら、どちらか一つずつを選んで覚えてもいいでしょう。工夫してください。

ハイデルベルク信仰問答

問115 この世においては、だれも十戒を守ることができないのに、なぜ神はそれほどまで厳しく、わたしたちにそれらを説教させようとなさるのですか。

答 第一に、わたしたちが、全生涯にわたって、わたしたちの罪深い性質を次第次第により深く知り、それだけより熱心に、キリストにある罪の赦しと義とを求めるようになる

ためです。

第二に、わたしたちが絶えず励み、神に聖霊の恵みを請うようになり、そうしてわたしたちがこの生涯の後に、完成という目標に達する時まで、次第次第に、いよいよ神のかたちへと新しくされてゆくためです。

問125 第四の願いは何ですか。

答 「われらの日用の糧をきょうも与えたまえ」です。

すなわち、わたしたちに肉体的に必要なすべてのものを備えてください、それによって、わたしたちが、あなたこそ良きものすべての唯一の源であられること、また、あなたの祝福なしには、わたしたちの心配りや労働、あなたの賜物でさえも、わたしたちの益にならないことを知り、そうしてわたしたちが、自分の信頼をあらゆる被造物から取り去り、ただあなたの上にもみ置くようにさせてください、ということです。

〈今週の聖書日課〉

日曜日	マタイ6:33
月曜日	ヤコブ1:17
火曜日	使徒14:17
水曜日	使徒17:24~25
木曜日	コリント一9:24~27
金曜日	フィリピ3:12~14
土曜日	ヨハネ一3:1~3

テキスト マタイによる福音書7章1～6節

イエス様の大工の仕事場には、木片があり、おが屑があり、加工前の丸太が無造作に置かれていたことでしょう。今日の箇所のおが屑と丸太との比較の中に、大工としてのイエス様の感性が働いているかもしれません。

目の中には、ちょっとしたおが屑でも入ると、痛みを感じます。涙がでます。タオルで拭くと、かえって眼球を傷つけてしまうかもしれません。今日の箇所に登場します人は、おが屑が目に入って痛がっている他人を助ける人ではありません。頼まれてもいないのに、「あなたの目におが屑が入っているのが見えるから、わたしがとってあげましょうか」と願い出る人です。目の中にある異物を取り出す際の慎重さを弁えずに、他人に干渉します。

ここでの対比は、そのように干渉する人の目に、丸太が刺さっているという点にあります。これは、大げさな表現です。自分の心に宿る丸太のような大きな罪に気付かず、他人の心に宿る小さな罪を指摘する人が、このたとえで表されています。他人の罪はよく見えても、自分の罪には全く気付かないのです。その人こそが丸太を取り除いてもらわないと何も見えないのに、その必要性を全く感じていません。

マタイによる福音書では、この箇所が山上の説教の一部をなしています。これは、イエス様の周りに集まっている群衆とお弟子さんの双方に語られたメッセージです。また、ルカによる福音書の平行箇所にあるファリサイ人批判が省かれています。マタイは、今日の言葉をキリスト教会の問題として語りたのです。そのことは、3節、5節の「兄弟の目」から取り除こうとするという言葉にも表われています。

1節で、イエス様が「裁くな」とお命じになられたのは、裁くことは、神様に属する事柄であるという了解の上でのことです。「裁くな」と語られたのは、神の裁きを待たずに、自分勝手に人を裁く者が、イエス様の周りにいたからです。神様

が裁かれる時、悲しむ者を励まし、義に飢え渴く者を神の義で満ちたらせてくださいます。そのことが、山上の説教で豊かに約束されていました。このような神の裁きとは違う基準での裁きを、教会の中で行う者たちがいたのです。彼らが裁く厳しさをもって、彼らは神に裁かれる、とイエス様は警告しておられます。2節には、自分で測る秤で、自分も測られるとあります。自分には甘く、他人には厳しくというダブルスタンダードは成り立ちません。自分勝手に裁き、神の裁きを恐れない信仰の姿勢が、問われています。

イエス様は、この説教によって、群衆と弟子達の間から、陰口と中傷とが無くなることを願っておられたはずで、もし、誰かが、人の批判を始めたとしても、あらゆる快楽に追従するのではなく、人を批判し、品定めする喜びを、悪徳と看做すことをできるようになることが求められています。弟子達は、人を裁こうとする時、「自分の目にある丸太に気付かず、人の目からおが屑を取ろうとしている」のではないかと、深い反省へと導かれたはずで、

5節の言葉によれば、イエス様は、キリスト者の友の過ちを見過ごすことを願っておられるのはではありません。おが屑が目に入り、人が痛そうにしていたら、取ってあげたらいいのです。人への助言は、必要です。問題は、そのような助言を与える人は、自分がもうすでに丸太をイエス様からとっていただいた経験を持っているということです。自分が過去に犯してきた丸太のような罪に比べると、今、自分が批判し忠告を与えようとしている人の中にある罪は、小さな罪です。

そのことに気付くと、助言と忠告は、配慮と思いやりに満ちたものとなります。それは、見下げる態度ではなく、愛と尊敬をもって、教会の建徳の為に行う業となります。私たちの丸太を除く為に十字架で死んでくださったイエス様への感謝なしには、また、イエス様の愛と憐れみの中でしか、助言することはできません。 (岩崎 謙)

テキスト マタイによる福音書7章1～6節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問59、83
ウェストミンスター信仰告白 29:8、30:3
同大教理 問145、173、同小教理 問78、105

(単元のねらい)

「人を裁くな」と語られた主イエスは、同時に私たちに、主の祈りにより、「我らに罪を犯す者を、我らが赦す如く、我らの罪をも赦し給え」とお教え下さっています。人の罪を見て、自らの罪を顧み、自らの罪を赦し、救いをお与え下さった主の愛に感謝しつつ、赦された者として、人の罪をも赦す者であるよう、語っていききたい。

「自分には悪いところがない？」

みんなは、人が失敗したり、悪いことをした時に、すぐに気が付き、笑ったり、怒ったりしたことはありませんか？「〇〇ちゃんが叩いてきた」なんて、みんなに言い触らしてしまうことはありませんか？

聖書では、次のようなことが語られています(参照：ヨハネ福音書8:1～11)。悪いことをした女の人が、律法学者やファリサイ派の人々の中に連れて来られました。そして「こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じられています。ところで、あなたはどうお考えになりますか。」(8:5)とイエス様に尋ねました。この時、イエス様は、「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」と語られました(8:7)。すると、これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った(8:8)のです。ようするに、イエス様の言葉により、ここにいた全ての人が、自分には罪があるから、この人を裁くことなど出来ないことを知ったのです。

つまり、イエス様は、人を裁く前に、自分の罪について考えてみなさいと語られていたのですね。私たちは、先生を含めて、みんなが罪人なのです。「悪いことをしたことなどない」と言える人はいるでしょうか？ たとえ、行動として悪い

ことをしていなかったとしても、言葉で人を傷つけるようなことはしていませんか。心の中で悪いことを考えたりしたことはないですか。神さまの前では、その全てが悪いことであり、罪になります。ですから、ここにいるみんなが、神さまの前には罪人なのです。

そして、神さまの前に示されたこの罪は、どれ一つをとっても、死刑に値する罪なのです。しかし、神さまを信じる人は、イエス様の十字架によって、この罪が赦されて、救われるのです。罪人であり、死刑になる私たちが救われたのです。だからこそ、私たちは、イエス様の十字架に感謝して、神さまを信じるのですよね。

だからこそ、人の罪を見つける前に、まず、私たちは自分自身の内にある罪を見つけなければなりません。そして、この罪のためにイエス様が十字架に架けられたんだということを忘れてはなりません。私たち自身が十字架に架からなければならなかったのに、イエス様が私たちの代わりに十字架に架かって下さったから、私たちはもう十字架に架けられることがなくなったんだということ、心から喜んで頂きたいのです。

イエス様が、「あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。」(マタイ7:3)と語られたのも、同じ事です。私たちは、どうしても人の悪いところ

は見つけようとするのだけれども、自分の悪いところは隠そうとするのですね。でも、イエス様は、他人の罪の指摘してばかりではダメですよと語っておられるのです。まず、自分の罪を見つめ、それでも、神さまはあなたを救って下さっていることに感謝しましょう。

そうすれば、もし悪いことをしている人がいたのを見つけたとしても、自分の罪がイエス様によって赦されたんだから、あの人の罪も赦してあげようと、あの人もイエス様の十字架によって罪が赦され救われますように、と考えることが出

来るのではないのでしょうか。そういう気持ちになることが出来れば、その人に対して、責め立てたりするのではなくて、「それは悪いことですよね。これからはしないで下さい。」と、声をかけることで出来るのではないのでしょうか。

イエス様は、私たちに主の祈りの中で、「我らに罪を犯す者を、我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ」と祈るように求めておられます。私たち自身の罪をイエス様が赦して下さったのだからこそ、人の罪も赦し合えるようになりますように。 (辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書7章1節

人を裁くな、あなたがたも裁かれないようにするためである。



〈ねらい〉

今日の学びを準備するにあたって、深く反省させられるのは、わたしたちが人の心を傷つけることがいかに多いかということです。特に、近しい人、例えば家族、友人に対して、なかでも自分の子どもに対しては、やさしく接することが非常に困難です。教えることよりもさばくことが日常的になってしまいます。そして、子どもたちはそういう親でも受け入れてくれています。そんな自分の罪を主の御前に告白したうえで、クラスの幼児たちにも「ごめんね」の気持ちを伝え、「イエス様なら……」と主の愛を再確認し、主に感謝しましょう。

〈展開例〉

みんなのなかで、怒ったことがない人はいますか？ 保育園、幼稚園のお友だち同士とか、お家のお兄ちゃんお姉ちゃん、弟妹とか、ときどき「いやだな～」と思うことがあるでしょう。そんなとき、みんなはどうしますか？

「ぜったい、ゆるさない！」

「もう、〇〇ちゃんとは、一生、遊ばない！」

そういうことを言っちゃうこと、あるでしょう。イエス様なら、そういうとき、何ておっしゃると思う？

ヨハネ8章1～11節より、「悪いことをした女の人の話」として簡単にお話する。

イエス様は、「主の祈り」の中で、わたしたちは悪かったのに、罪をゆるしていただいたことを思い出さない、と教えてくださいました。そして神様は、わたしたちを「ゆるせる人」につくってくださいました。だから、他の人のことをゆるしてあげましょう。

(子どもたちへの「いつもごめんね」の気持ちを伝える場合はここで。)

先生は、こんど「ぜったいゆるさない！」と言いたくなったら、「ぜったいゆるす！」と言ってみます。みんなもやってみてね！

〈おいのり〉

かみさま、わたしたちを「ゆるせる人」につくってください、ありがとうございます。それなのに、すぐに人を悲しませる言葉を言うてしまうことがあります。ゆるしてください。イエス様のように、やさしい気持ちをもって、ゆるしあうことができますように。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

私たちは全く私たちの価値基準、判断で人を裁いてしまう事を当たり前のごとくしてしまう。人を裁く権限があるのは神様だけであって、人を裁くだけ自分も神様から裁かれる小さい器、存在であるという事の理解を深めたい。

〈展開例〉

1. 何か自分とは違った考え・間違った考えをしていたり、みんなとは違う格好をしていたりする人を見て、仲間はずれや、その人は悪い、と思ってしまった事がありますか？
→この場合どうしてその様な人を受け入れる事ができないか、などを語り合えると理解が深まる。
2. そんな時、自分は一番正しい、と思った事がありますか？
→自分が正しい以前に、自分の罪、悪い心をまず心に留める様に導く。
3. 私たちの目の中には大きな罪・丸太がある（3節）のですが、全く気が付きません。この丸太はあまりにも大きくて本当は他の人の目の中もよく見えない位大きいのです。それなのに他の人の目の中まで心配して小さな埃が気になって仕方ありません。どうしてでしょう？
→人は自分勝手に自分には優しく、他人には厳しい側面がある事を理解させる。神様を信じ、神の愛に触れる事ができれば丸太がよく見えるようになる事を知る。

4. その大きな罪・丸太を取り除くにはどうしたらいいでしょう？

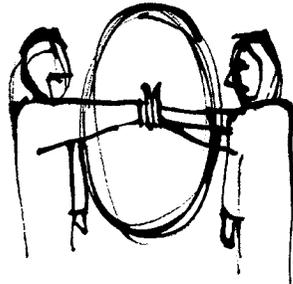
→自分中心で利己的な考えをする私たちの心を、神様にお委ねして歩み、罪を取り除いてもらう以外方法がない、という事を伝えたい。

〈ワーク〉

- ①「人をさばくな」（1節）とはいったいどういう事ですか？（展開例1を参照）
- ②丸太（3節）とは何ですか？（展開例3を参照）
- ③よく見えるようになるにはどうしたら良いですか？
→5節……丸太を取り除く。つまり、神様を信じる事によって罪許され、丸太を取り除いて下さる事を知る。
- ④よく見えるようになるのと何ができるようになりますか？
→人を裁く事ができるようになる…のではなく、人（相手）の目に入った埃の痛み、苦しみが理解できるようになる、という事を理解し合いたい。

〈おいのり〉

私たちの悪い心が人を裁いてしまいます。まず、自分の心の中の罪をお許し下さい。そして、痛み、苦しんでいる人の心が分かるようにして下さい。



人を裁くな
あなたがたもさばかれないようにするためである

〈ねらい〉

自分の目の中の丸太とは何かを考える。

〈展開例〉**1. 人を裁くのが大好きな私たち**

「あの人のああいうところがむかつくんだよね」「〇〇さんはずるいよね」私たちはすぐに人のことをあれこれと批判します。

その人のいないところで、また心の中で、私たちはなんと簡単に人を裁いてきたことでしょう。私たちは人の悪口を言うことが大好きなのです。自分が人より上の人間なのだと安心したいのです。自分の方が偉い人間だと思いたいのです。

2. 「人を裁くな」と言われたら

そんな私たちに向かってイエス様は「人を裁くな」と言われます。それに対して「そのとおりです。人を裁くことはよくないことです」と誰もがそう答えるでしょう。

なぜ人を裁いてはならないのでしょうか。人の中にある罪は自分の中にもあるので、人のことはいえないという意味でしょうか。人を裁く基準で今度は自分が裁かれるようになるからでしょうか。

3. おが屑とは？ 丸太とは？

「あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか」

おが屑というのは木を切ったときに出る細かい木の粉のことです。丸太というのは家の柱ぐらいの太さの木のことです。あなたの中には目の中に入らないような大きな罪、丸太があるのだという意味です。

人と比べてあなたの方が罪を多く犯したといっているではありません。裁くことそのものが、大きな丸太という罪なのです。

「自分はあの人よりはましな人間だ。自分にはあの人を裁く資格がある」と裁判官のように高いところに座って人を見下しているのです。神様に代わって自分が主人になろうとしているのです。

その高ぶりが丸太であり、おが屑とは比べられ

ないほどの大きな罪だと言われるのです。

4. まず自分の目から丸太を取り除け

どうしたらこの丸太を取り除くことができるのでしょうか。私たちは自分の力ではこの丸太を取り除くことはできません。

イエス様を十字架にかけた人々の中にあつたものは、まさにこの高ぶりの罪でした。人を裁く言葉がその人の心に突き刺さるように、イエス様を十字架に突き刺したのは、私たちの中にあるこのような罪です。

自分の目から丸太を取り除くためには、まずこの十字架を見つめなければなりません。自分の中の丸太が神様の御子を殺すほどの大きなものであり、その罪がどんなに神様の御心を今も傷つけているのかを考えなければなりません。

しかし神様は、私たちの代わりにイエス様を十字架にかけて罰することによって、この丸太を取り除いてくださいました。

この取り除かれた丸太がどんなに大きなものであったか、自分に与えられたゆるしがどんなに大きなものであったのかを見つめることです。

ゆるされた者は、裁く人ではなくその人の側に寄り添い、その人のおが屑が取り除かれるように、その人と共に祈る者へとつくり変えられるのです。

5. 四コマ漫画を描いてみよう

①118ページの漫画をコピーして、吹き出しに言葉を書き入れる。

②色をぬって完成させる。

(吹き出しの例)

1コマめ 「あれ、あれー」

2コマめ 「目の中におがくずが入ってるよ」

「えー、ほんと？」

3コマめ 「ぼくがとってあげるよ」

4コマめ 「……………」

自分なりの言葉になおすとよいでしょう。

〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に……

☆参照カテキズムとして子どもカテキズム問59（第九戒）、問83（主の祈り第五の祈願）が挙げられています。問83を記します。

問83 「我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ」では、何を祈り願うのですか。

答 イエスさまの恵みによって罪赦されていることを繰り返し思い起こし、自分たちも隣人を赦すことができるようにされていることを心に刻みつけてください、ということです。

☆ウェストミンスター小教理問答から、同じ第五の祈願についての問答を挙げます。

ウェストミンスター小教理問答

問105 第五の祈願では、私たちは何を祈り求めるのですか。

答 （「我らに罪をおかす者をわれらがゆるすごとく、我らの罪をもゆるしたまえ」という）第五の祈願で私たちが祈る事は、神が、キリストのゆえに、わたしたちのあらゆる罪を一方的にゆるしてくださるように、ということです。私たちは、神の恵みによって他人を心からゆるせる者とされているので、なおさらこれを求めるように奨励されているのです。

☆次のカテキズムは、十戒の第九戒についての問答です。敬語がややこしさを助長するようであれば、「禁じたまいます」→「禁じられます」と言い換えて覚えてもいいでしょう。

ジュネーヴ教会信仰問答（渡辺訳）

問212 では、神の欲しておられることは要するに何であるかを説明しなさい。

答 神は私たちが隣り人について悪く思ったり、まして彼らの名声をけがす傾向に陥るのを禁じたまいます。むしろ、真実の許す限り彼らのことを好意的に考え、彼らの名声を傷つけずに守ろうと努める公正さと人間性を備えよと命じておられます。

〈今週の聖書日課〉

日曜日	マタイ7:1
月曜日	マタイ6:12
火曜日	ルカ11:4
水曜日	マタイ18:35
木曜日	ローマ2:1~4
金曜日	詩編51:3~4
土曜日	詩編51:9、11

先生方へ④

ところで、1995年のことになりますが、東部中会の夏のヤングサマーキャンプで、榊原康夫先生が「おもしろ聖書入門」という題で講演をなさいました。私は直接その講演を聞いていないのですが、参加した中学生が書いた報告によると、榊原先生は、説教の時に挙げられるいろいろな聖書箇所をメモしておいて、後で自分で聖書を開いて確認してみることや、ウェストミンスター小教理問答書の1つ1つの引照聖句を全部自分で聖書を開いてみて、正しいかどうか確認してみようことを、中学生に勧めています。

テキスト マタイによる福音書7章24～29節

28節に、「イエスがこれらの言葉を語り終えられる」とあるように〈山上の説教〉と言われる主イエスの教えは終わることになります。「語り終える」というのは、主イエスの話がただ終わったというのではなく、主ご自身が語られた言葉を、完成に導かれたという意味を持っています。

〈言葉を聞いて行く〉

どうしてこの話が山上の説教の結論とされているのでしょうか。それを明白にしないといけません。それは、「わたしのこれらの言葉を聞いて行く」(24節) ことと深く関係しています。このことは言葉を実行していないだけではなく、実行していないことは聞いていないことを明らかにしています。聞くことと行うことは一つです。聞き損ってしまうということが愚かなことでもあります。つまり、主イエスの言葉を愚かな者は、聞いてもいないし、信じてもないのです。それは主イエスの言葉を「岩」とは思っていないということです。

〈賢い人と愚かな人〉

この箇所における「賢い人」(24節)は、見るべきものがはっきりと見えているということです。ですから、この世、あるいは自分の知恵によって生きない人のことです。自分の知恵ではなく、神の知恵によって生きる人のことです。もちろん、神との神秘的な体験を勧めているわけではありません。主イエスの言葉を聞いて、それを信じ受け入れ、それに生きるということです。主イエスは、この言葉の完成のために、全生涯をかけておられます。全存在をかけておられます。ですから、権威は主イエスにおいて、言葉と存在がひとつになっています。

それだからこそ、主イエスの言葉と存在に恐れられた群衆は、「その教えに非常に驚いた」とありま

す。しかしながら、群衆のこの驚きは、やがて鈍くなって行きます。世の現実、罪が人々の心を弱らせてしまうからです。しかし、注意しなければならないのは、「賢い人に似ている」という言葉が未来のことを語っていることです。つまり、将来に、賢い人と比べられるときが来ると言っています。今ここでの話してはありません。主の言葉を信じて生きるのか、信じないで生きるのかの生き方の違いは、まだ明らかになるわけではありません。現在では、まだ同じようにしか見えないのです。

〈岩の上と砂の上〉

岩の上に家を建てるのが賢いことなのか、砂の上に家を建てるのが愚かなことなのか、明らかになるのは、まだ先のことだということです。「雨が降り、川があふれ、風が吹いて」ということは、人生に起こる嵐のことを思い起こさせる言葉です。しかし、それ以上に、この雨、川、風は終わりの出来事を思い起こさせるものです。終わりのときに、人のすべての業が神の前に明らかにされるときが来ます。神の裁きの嵐といってもよいかもしれません。それに耐えるような家を建てるということ、そのことがここで求められていると言えます。

終末のことに対する私たちの切迫感はあまりないかもしれません。希薄といえます。そういう意味では信じようとしていません。「わたしの言葉を聞いて行く者は皆」と言われるとおりです。しかし、間違っただけではないのは、終末の出来事で私たちを脅しているわけではありません。まさに、神さまの招きの言葉です。岩の上に家を建てるということは、神の国の支配の中に、しっかりと立つことでもあります。 (安田恵嗣)

テキスト マタイによる福音書7章24～29節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問70

〔単元のねらい〕

ヘブライ人の手紙は、「神は、終わりの時には、御子によって語られた」と言う。主イエスの説教は、神の御子の説教である。それゆえに、必ず、実現する力ある言葉なのである。本日のテキストは、その主イエスの山上における説教の結びの言葉である。マタイは、「律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになられた」と告げている。言葉と行いとが一つになっておられるお方だけが、唯一の権威ある神の言葉の語り手である。ゆえに群衆は、その教えに驚かされただけでなく、教え方にも驚いたのである。このお方こそ、岩なるキリストご自身に他ならないし、このキリストの確かさを説くことが狙いである。そのとき、子ども達の前に立つ教師自身の全存在も問われる。御言葉を聞いて行って、その実りにあずかった者がキリストの証人だからである。しかし、よって立つ「岩」が揺るがないゆえに、欠け多き我々は、証人として立たされる。この恵みの事実立ち、子ども達に、共に御言葉の力を証しし、行う者となろうと呼びかけたい。

「賢い人って、誰のこと？」

イエスさまは、山の上に上られて、お弟子さんたちに、そして大勢の群衆にも、たくさんのお話を語っていただきました。

僕たち私たちも、これまで「心の貧しい人は幸いである。天の国はその人たちのものである。」「悲しむ者は幸いである。その人たちは慰められる。」「何を食べようか、何を飲もうかと、何を着ようかと思悩むな。神の国と神の義を求めなさい。」「人を裁くな」などの素晴らしいお話を学んだのです。

さて、イエスさまの説教が終わりました。すると、聞いていた大勢の人たちは、とても驚きました。実は、大勢の人たちは、これまでも、神さまの御言葉のこと、聖書の教えには慣れ親しんでいたのです。ユダヤの人たちは、神さまの御言葉を聞くことをとても大切にしていたからです。それを教えてくれる人のことを律法学者、聖書の学者というのですが、その人たちはたくさんいたのです。ところが、イエスさまの語ってくださったお話は、その人たちとは、違っていました。何よりも、語っている態度がまったく違っていたのです。いったい何がどう違っていたのでしょうか。

皆さんは、「うそつき」ですか？もしも、いつも、うそばかりついているなら、お友達にも先生にも信用されなくなってしまおうでしょう。けれども、悲しくて、残念ですが、うそをついてしまうこともあるのではないのでしょうか。それは、「よし、ここはうそをついて自分を格好良く見せてやろう。」「うそをついて、得をしてしまおう」などと、最初から、うそをつくことを心に決めてうそをつくことは、あまりないかもしれません。もしも先週、このような、うそをついてしまったお友達がいるなら、きちんと悔い改めのお祈りをしてください。でも、このようなうそをついてしまったお友達が、もしかするといるかもしれません。「お友達との約束を破ってしまった。忘れてしまった。」しっかりと約束したのに、自分の言葉を守れなかった。これは、子どもも大人も、残念ですが、繰り返してしまうことでもあります。

お父さんやお母さんが、遊園地やお買い物に連れて行ってけると約束してくれたのに、「今日はだめ」とか、「そんな約束していないよ」とか言われたことのあるお友達もいると思います。つまり、言ったことを必ず実行することのできる人

は少ないのです。先生もまったく同じです。

ところが、「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」とイエスさまはお命じになられました。イエスさまは、完全な人間だから、堂々と言えるのです。つまり、イエスさまの語られた御言葉は、必ず実現されるものなのです。イエスさまは言ったとおり実行なさるのです。ところが、聖書の先生、律法学者は、そうではありません。正直に言うと、先生も、同じです。

今、イエスさまは、これまでの説教を語り終える最後に仰せになられました。神さまの御言葉を聞く人にとって、とても大切な、つまり要点を語られたのです。「わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。」

岩の上に家を建てた人がなぜ、賢いのかというと、嵐の日にも倒れないからだたとえて教えてくださいました。逆に、イエスさまの御言葉、聖書のみ言葉、日曜学校の礼拝式でのお話を聞いても、分級での先生のお話を聞いても、右の耳から左の耳へと聞き流してしまう人は、神さまの御言葉の力をなにも知ることができないのです。イエスさまは、そのような人のことを、砂の上に家を建てた愚かな人に似ているとたとえられました。

今、僕たち私たちは、説教を聞いていますね。愚か者か賢い者か、どちらだとイエスさまに言われるでしょうか。賢い人は、御言葉を信じて聞く人のことです。信じるとは、御言葉に自分の全部をかけてそのとおりにすることです。耳で聞くだけではなく、心で聴くのです。そうすると神さまの御言葉が動き出して、働きだして効いてきます。神様の御言葉には、ものすごい効き目があるのです。神さまに従う力も、この御言葉の力の効き目、効力なのです。

もう一つのことをお話します。僕たち私たちは、

イエスさまの御言葉を聴いて、そのとおりにやってみます。そうすると、それができない自分であることも分かるのです。つまり、自分が本当に、罪深いことが分かります。

けれども、そこでこそ、イエスさまの御言葉を、しっかり聴くのです。イエスさまは、「信じなさい。従ってきなさい」と招いてくださいます。だから、僕たち私たちは、信じて、ついて行くことができるのです。そしてイエスさまを信じている人は、どんな人かというと、岩の上に家を建てた人に似ていると、他の誰でもなく、イエスさまがはっきりと言ってくださいるのです。それが、僕たち私たちのことなのです。確かに、僕たち私たちは、ちょっとした風や雨でも倒れてしまう小さな家かもしれません。すぐ自分の弱い心に負けてしまうけれども、イエスさまは、僕たち私たちを支える岩となってくださるのです。

僕たち私たちは、イエスさまから賢い人と呼んでいただきたいと思いませんか。そのように願っているお友達は、もう岩の上に家を建て始めているお友達です。このイエスさまのおかげで、たとえ、イエスさまのように言うこととすることとがいつも一緒になっていなくても、神さまは、そんな僕たちをも愛していてくださるのです。だから安心して、失敗しても、何度でもイエスさまのみ教えを行うのです。何度失敗しても、イエスさまを信じている人は大丈夫です。岩の上に支えられているからです。この岩は不思議な岩です。建物そのものも頑丈になって行くのです。先生も、イエスさまを信じて、今日まで、支えられてきました。イエスさまの御言葉は、確かで、裏切らず、いつも先生を守り、励まし、支えていてくださるのです。だから、今朝も、心から喜んでイエスさまは、すばらしい、イエスさまの御言葉を信じて行う人生はすばらしいと、みんなに勧めることができるのです。 (相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書7章24節

そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、
岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。

〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉

- 1) 11/5にお休みの子はいませんか？ どうしてお休みだったのでしょうか。次回出席できるようにお祈りください。できたらお手紙を出しましょう。
- 2) 11/12の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……。
- 3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族の皆さんのために祈りましょう。

〈分級では〉

だんだん外も寒くなり、日の暮れるのも随分と早くなりました。神様から頂いた秋の実りの栗やお芋もおいしくいただいたことでしょうか。神様は私たちに一番良いものをくださいます。おいしい果物、ご飯、一緒にいると楽しいお友達、そして神様はいつでも私たちを愛し見守っていてくださいます。神様に感謝の気持ちでお祈りしましょう。

〈分級のねらい〉

聞き損ってしまう事は愚かなことです。聞くこと、行うことは一つのことです。イエス様の言葉を岩と信じ、説教をよく聞き頑丈な家を建てましょうと話しましょう。

〈展開例〉

みんなお家を建てている所を見たことあるかな、大工さんがトンカン、トンカン建てているよねと具体例を出して言ってみると良いと思います。

す。地面を平らにしてコンクリートというかたい岩のようなものでしっかりと土台を作り、その上にお家をトンカントンカンと建てていくよね。雨が降り、風が吹き、川が溢れても壊れちゃうことはないよね。でも、かたい岩を置かないでサラサラの砂の上に造ったらどうだろう。雨の水がいっぱいになって、家の下の方から流されてしまい壊れてしまうよね。

イエス様を土台として、生活を整えていくことが大事です。だから皆もしっかりした岩の上にお家を建てようね。イエス様の御言葉を聞いて信じ守ろうね。そうしたら皆の家も壊れないよね。

歌があるので手遊びしながら一緒に楽しみましょう。

①賢い人が家を建てた、岩の上に家を建てた、岩の上に家を建てた、雨が降ってきた。

雨が降り水が増し、雨が降り水が増し、雨が降り水あふれ、その家は大丈夫。

②愚かな人が家を建てた、砂の上に家を建てた、砂の上に家を建てた、雨が降ってきた。

雨が降り水が増し、雨が降り水が増し、雨が降り水あふれ、その家はペッチャンコ。

※『教会学校・日曜学校子どもさんびか』（日本ホーリネス教団）より

※当教案誌第16号29ページを参照

〈おいのり〉

神様、どうぞ私たちがイエス様のお話をよく聞き、神様の教えてくださったように良いことができるようにしてください。いつも神様が守ってくださっていることを感謝します。

〈ねらい〉

みことばを聞いて行うとはどういうことか、具体的に話し合い理解を深める。岩の上の家と砂の上の家、賢い人と愚かな人、という子どもにも明快な対比が用いられているたとえ話なので、そこを際立たせて印象づけたい。

〈展開例〉

1. 皆さんは、「三匹のこぶた」というお話を知っていますね。三匹のこぶたは、それぞれどんなおうちを建てたか、覚えていますか？
→わら、木、れんが。できれば話のあらすじも子どもたちに話してもらおう。

2. みんなだったら、どんなおうちを建てるかな？
考えてみると、楽しいね。でも、今日は「何で」家を建てたのか、ではなく「どこに」家を建てたのか、というお話でしたね。公園の砂場や、海辺の砂浜を思い出してみましよう。どんなに立派な、すてきなおうちを建てたとしても、砂の上だと、どうなってしまうかな？ 丈夫なおうちにするには、どこに建てたら良かったのかな？
→皆で説教を思い出しながら、砂の上・岩の上の対比をイメージ付ける。

3. 岩の上に家を建てる、というのは、神様のことばをよく聞いて、神様に従うことでしたね。私たちの建てるおうちはそれぞれ、小さかったり大きかったり、違う形や色でも、土台はみんな同じ、イエス様という岩の上になりたいですね！

〈ワーク〉

クイズ「砂か岩か？」

身近な出来事の例に対して、神様が悲しまれることなら「砂」、神様に従っていることなら「岩」と答えてもらおう。

例1) 家の大切なものを壊してしまいました。お母さんが気がつかなかったので、黙っています。

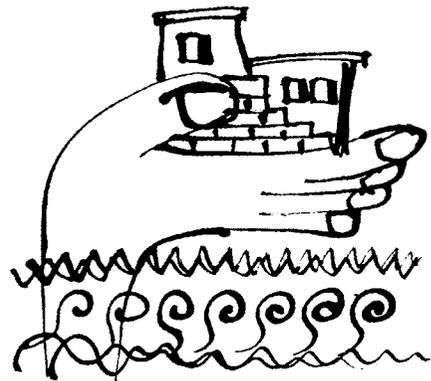
例2) 学校のお友達にも、イエス様のことを教えてあげたいので、教会学校に誘いました。

例3) 嬉しいことや悲しいことがあったら、お祈りして神様にお話ししています。

※子どもたちにあわせて、例は自由に作ってみてください。

〈おいのり〉

神様、私たちが砂の上に家を建てる愚かな人にならずに、イエス様というしっかりとした岩の上に家を建てる、賢い人になれるようにしてください。



そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行なう者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている

〈ねらい〉

岩の上に家を建てるとは？

〈展開例〉

1. 家を建てるとはどういう意味？

イエス様はこのたとえを用いて何を教えようとなさったのでしょうか。このお話は私たちが自分の人生をどのように築いていくべきか、何を土台にして生きていけばよいのかを教えてください。

2. 二つの家を比べてみよう

この二つの家について、表を用いて整理してみましょう（ルカ6章46～49節も参照して完成させる）。聖書を開いて調べながら（ ）の部分を書いてもらう。

	岩の上に建てた家	砂の上に建てた家
建て方	(地面を深く掘り岩に固定し建てる)	(土台なしにそのまま砂の上に建てる)
洪水で	(倒れなかった)	(倒れて壊れた)
どんな人	(賢い人)	(おろかな人)
土台	岩とは ()	砂とは ()
生き方	(御言葉を聞いて行う)	(御言葉を聞くだけで行わない)

表を見ながら一緒に考え、話し合う。

- ・家とは何でしょう。→ 私たちの人生
- ・洪水とは何でしょう。→ 私たちの人生に起こる危機（病気、事故、災害、失敗、死など）

3. 砂の上に家を建てるとは？

- ・砂とは何でしょう。

(ヒントは洪水が襲ってきたときに、倒れてしまうもろい土台であるということ)

砂の上に家を建てるとはどういうことなのかを考える。生徒たちに何が砂にあてはまるのかを考えさせる。(自分の能力、学歴、お金、健康、権力、人気、家族など) 砂の上に家を建てるとは、これらの頼りにならないものを土台とする生き方のことです。

これらはいつかなくなってしまうたり、突然取り去られてしまうものです。健康な人もいつかは病気になり、老いていきます。お金や人気も一日で消えてしまうこともあります。頼りにしている

家族でさえ、死という別れが必ず来ます。すべて砂のように崩れ去ってしまうのです。

たとえ、一生の間これらのすべてに恵まれていたとしても、自分の死を前にしたとき、この中のどれも持っていくことができません。

そしてもっとも厳しい嵐、死んだ後、待っている神様の裁きに対して、これらのものは何一つ役に立たないのです。

4. 岩の上に家を建てるとは？

岩とは何でしょう。洪水が襲ってきても家が倒れなかったように、どんな嵐がやってきても、しっかりと私たちを支えてくれるものです。

それは人間の中にはないものです。岩とはすべてのものを支配されるお方、永遠に変わらないお方、私たちの救い主イエス・キリストのことです。

イエス様は言われます。「わたしのこれらの言葉を聞いて行うものはみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている」

しかし、それは道德のお手本のような立派な生き方をしなさいという意味ではありません。正しく生きることそのものが目標となるならば、それもまた自分の正しさを土台とする生き方になってしまうからです。

イエス様の言葉を聞いて行う人は、心の貧しい人であったはずですが。そのような生き方からほど遠い、みじめな自分であることを教えられた人です。もはや自分の中には土台となるものは何もありません。命をくださるほどに私を愛してください。くださったイエス様だけが私たちの土台です。

この土台は死の闇がせまるときも、神様の裁きのときもわたしを倒れないように支えることのできるただ一つの土台です。

すでにこのイエス様が私たちの土台となっていてくださるのです。ですから私たちはこのお方の言葉を、自分に語られた言葉として深く掘り下げて聞きましょう。他のむなししいものを頼りせず、このイエス様だけを土台として生きるのです。

5. ペーパークラフトの家を作ろう

119ページを参照してください。

〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に……

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズム問70が挙げられています。

問70 御言葉は、どのようにしてあなたに救いの恵みを与えるのですか。

答 私たちが、神の御言葉である聖書と説教に正しく聴き従うことによってです。御言葉をよく聴くことこそ、神さまへの愛と奉仕です。

☆同じ内容をウェストミンスターでは次のようにまとめています。

ウェストミンスター小教理問答

問89 御言葉はどのようにして救いに有効とされますか。

答 神の御霊が、御言葉を読むこと、特に説教を、罪人に罪を自覚させて回心させるため、また信仰によってきよめと慰めのうちに救いに至るまで建て上げるために、有効な手段とされます。

問90 御言葉が救いに有効となるには、御言葉をどのように読み、また聞かなければなりませんか。

答 御言葉が救いに有効となるには、私たちは、勤勉、準備、祈禱をもってこれに傾聴し、信仰と愛をもって受け入れ、私たちの心のうちに蓄え、私たちの生活の中で実践しなければなりません。

〈今週の聖書日課〉

日曜日	マタイ7:24
月曜日	使徒20:32
火曜日	コリント一15:4
水曜日	テモテニ3:14～17
木曜日	ローマ10:14～17
金曜日	詩編119:105
土曜日	ローマ1:16

先生方へ⑤

日本聖書協会の理事をずっと務めてこられた榎原先生によれば、聖書は中学生が読んでわかるレベルの日本語で書かれているとのこと。そう言われた中学生たちは、今までわからないと思っていたけれども、わかるはずだと思って聖書を読もうと思った、と言っています。「自分で（自力で）読もう」という気持ちにさせられたのです。「自分で（自力で）読む」方法として、教理問答の引照聖句等を自分で聖書を開いて調べ、教理問答で言われていることは、本当に聖書で言われていることかどうか、確める作業を勧められたのです。中学生にもできるはずだから、と。こういう聖書の読み方は、確かに聖書の中にできませぬ（「このユダヤ人たちは、テサロニケのユダヤ人よりも素直で、非常に熱心に御言葉を受け入れ、そのとおりかどうか、毎日、聖書を調べていた。」使徒17:11）。聖書主体で教理問答を読む。1つ1つの問答について聖書を開く作業、できるはずだからと励まして、中学生たちにもぜひ勧めたいですね。

（おわり）

テキスト マタイによる福音書10章26～31節

奇跡を連続して取り扱った第9章を結ぶにあたって、マタイは、ガリラヤ全土でのイエスの宣教をまとめて、以降の物語との接点としています。「群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」(9章36節)。そして、続く第10章は、12人の弟子の選びと、彼らを派遣するに際してのイエスの教えが記されています。「行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。病人を癒し、死者を生き返らせ、らい病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい」(10章7～8節)。

この箇所には三度「恐れる」という言葉が繰り返されています。「人々を恐れてはならない」(26節)、「魂を殺すことのできない者どもを恐れるな」(28節)、「減ぼすことのできる方を恐れなさい」(28節)。私たちは、神を畏れて生きる者です。ですから、神以外のものを恐れることはありません。でも現実には、いろいろなものを恐れて生きています。まだいろいろなものを恐れるということは、まことの神を真実に畏れていないからです。神を畏れることを息るときに、恐れなくてよいものを恐れなければならなくなります。信仰を持っているにもかかわらず、いつも不安が心を占領してしまいます。そんな私たちに対して、「恐れるな」と励ましの言葉をかけてくださいます。まさに、私たちに勇気を与えて、慰めてくださる言葉です。この「恐れるな」という主イエスの言葉を私たちは聞き取らなければなりません。

〈恐れるな〉

私たちの恐れの一つは、主イエスが指摘されます体を殺される恐れです。私たちは、確かに、命が奪われることを恐れます。体が少しでも弱れば不安をいただきます。しかし、主イエスは、ただ体のことだけではないかと言われます。彼らは、あなたの魂を殺すことはできないことを、どうして知らないのかと言われます。でも間違っただけではないのは、主イエスは体を軽んじてはおられない

ということです。30節に、「あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている」と言われました。「髪の毛」は明らかに体の一部です。髪の毛の一本までが神さまによって大事されていることを表現している言葉です。私たちの体も魂も神の御手の内にあるのです。ですから、28節で、「魂も体も地獄で減ぼすことのできる方を恐れなさい」と言われます。このことから、私たちの魂は神によって減ぼされるものであることを知らなければなりません。つまり、自分が減ぶべき存在であることを真実に恐れるということです。神によって初めて減びることはあっても、人々によっては減ぼされることはないと言は語っておられます。

〈髪の毛までも一本残らず〉

一本の髪の毛までも、恵みの中で数えてくださる神が、主イエス・キリストにおいて、私たちがどれほど大切にしてくださるかを知るのであります。「魂も体も地獄で減ぼすことのできる方を恐れなさい」(28節)。魂と体の両方を備えている私たちが減ぼすことのできる方は、神お一人であられるということです。神さまが、生命を与えてくださるからです。「二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない」(29節)。減ぼす力を持っておられる神は、恵みの力においても、大きな方なのです。

弟子たちは、主イエスによって丁寧に説き明かしを受けたにもかかわらず、恐れしました。主イエス・キリストが十字架に付けられたときには、裁きを恐れて逃げてしまいました。主イエスにこのように言われながら、弟子たちは逃げてしまったのです。しかし、まことに恐れてくださったのは主イエスご自身であったことを忘れてはなりません。この主が十字架で死んでくださり、甦られたのであります。(安田恵嗣)

テキスト マタイによる福音書10章26～31節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問13、14

〔単元のねらい〕

主権者にして創造者なる神が、今、何をしてくださるのか。このわたしのためにどのようにかわってくださるのか。そのことをいつも知り、喜び、感謝する人間が信仰者である。つまり、摂理の信仰に生きることである。多くの日本人の「宗教」とは、結局、「霊的なたたり」からどのようにして身を守ることができるか、この「恐怖」を克服し、「わざわい」から逃れる企てである。そこに、まことの神を知らない人間の悲惨な姿がある。そうであれば、キリスト者の信仰こそ、彼らの求め、憧れに決定的に応え、満たしてあまりまるものである。地域の子ども達は、幼いときからこのような霊的な環境に閉じ込められている。生ける主イエス・キリストとの交わりこそ、その解放の唯一の道である。礼拝式、説教によって、イエス・キリストの御臨在を証しさせていただきたい。

「一本の髪の毛も散えておられる神さま」

今日のイエスさまのお話の中には、雀が出てきました。皆の中で雀を見たことのある人はいますか。もちろん、見たことがあるでしょう。それなら、雀を食べたことのある人はいますか。きっといないでしょうね。先生もないです。でも、イエスさまの頃は、雀が食べる為に売られていたのです。小さな雀ですから、食べる場所は少ないでしょうし、おいしいのかどうか分かりません。

イエスさまは、何のためにこの雀のことをお話しされたのでしょうか。イエスさまは仰いました。「二羽の雀は市場に行くと、一アサリオンで売られていますね。」一アサリオンというのは、イエスさまの時代のお金の中で一番安いお金の単位でした。日本でいうと一円玉ですね。その一円で買えるような食べ物が雀です。貧しい人は鶏肉なんか食べられずに、雀を食べていたのです。一円を持ってお店屋さんに行くと、雀を二羽くれるのです。「一羽でいいのになぁ」と思っても、二羽で一アサリオンなのです。つまり、雀は一羽では売り物にならないほどの、安物なのです。

実は、イエスさまはこのお話を何度もなさいました。ある時は、こう仰いました。「五羽の雀は一アサリオンで売られていますよ。」中級の小学生のお友達はすぐに割り算ができるでしょう。で

も割り切れないですね。あまりが出ます。ニアサリオンで四羽買えるのですが、お店には一つのお皿に五羽並んでいるのです。一羽オマケです。つまり、雀はそれほど、安いのです。

でも、イエスさまは、仰いました。「そんな安くて小さくて、名前もない一羽の雀でさえ、神さまはお忘れになることはありません。神さまのお許しがなければ、その一羽だって生きることすら死ぬ事もないのです。だから恐れる必要はありません。」

皆の中でペットを飼っているお友達もいるでしょう。小さな動物、ハムスターやウサギを飼っているお友達もいるかもしれません。手のひらの中に入ってしまうような小さな動物も、神さまの許しがあって生きています。死ぬこともそうです。神さまは、あなたの飼っている小さなペットだって、生かしておられるのです。そして、イエスさまは、僕たち私たちにこのように呼びかけてくださいます。「君のペットより、君の方が大切だよ。君の命の方が、比べられないほど大切なのだ。そして、いつも、君を守っているのは、わたしだということ信じなさい。」

イエスさまはまた、こうも教えてくださいました。「あなたがたの髪の毛までも一本残らず数え

られている。」皆さんのなかで、自分の髪の毛が何本生えているかを、知っている人は誰もいないはずです。ところが、ある人はこんな風に言うことがあります。「自分のことなら、自分が一番良く知っている。」本当にそうでしょうか。違います。僕たち私たちは、自分の全部を自分では知らないのです。体のこともそうです。おなかの中とか、心臓とか、頭の中とか、自分のものなのに、見たことはありません。レントゲンで見たことのあるお友達がいるかもしれませんが、見ても、なんだかよく分からなかったのではないですか。体ばかりではありません。心の中だって、自分で自分のことをすべて分かっているわけではありません。神さまこそ、僕たち私たちのすべてをご存知なのです。しかもその神さま、天のお父さまは、僕たち私たちのことをいつも見てくださり、守ってくださるのです。子どもカテキズムの問13に、「神さまは私たちの父として、私たちを守ってくださいます。ですから、健康も病気も、嬉しいことも悲しいことも、すべてのことが私たちの役に立つよう働くのです。」とあります。すばらしいですね。僕たち私たちは、なんて幸せな人間なのでしょう。問14には、こうあります。「運が悪いと言ったり、占いを気にしたり、たたりを気にすることはできますか。」「わたしたちにはできません。神さまより大きく強いものはないからです。父なる神さまは私たちを愛してくださるのです。ですからたとえひとりぼっちでいても、こわくありません。」本当にこのとおりですね。こんなすばらしい幸せを、イエスさまがお与えくだ

さいました。

だから、たとえば、ときどき、テレビなどで、占いのおばさんが出てきますね。でも、僕たち私たちは、占いのおばさんなんかの声に負けてはいけません。また、たとえば、死んだ人の靈魂がたるとか、守るとか、見てきたことのように言う人も出てきますよね。しかし、僕たち私たちは、心配いりません。天と地をお造りになられた神さまを信じているからです。たとえ、病気になっても、つらいことが起こっても、イエスさまと一緒にいてくださいます。まことの神さまは、僕たち私たちのお父さまだからです。

でも、これは、毎日お祈りしていないと、分からなくなってしまうのです。お祈りしている人は、分かってくるのです。だから、今週も、天のお父さまとお呼びしましょう。神さまが、おられて、わたしのお祈り、呼ぶ声を聞いてくださることが分かるまで、何度でも、天のお父さまと呼んでみましょう。

このような幸せを与えてくださったのは、イエスさまです。イエスさまが、十字架にかかって、僕たち私たちの悲しみ、悩み、苦しみを全部、お一人で受けてくださったからです。僕たち私たちの代わりに、苦しんでくださったおかげで、僕たち私たちには、すべてのことが役立つように働くことができるのです。だから、イエスさまは、僕たち私たちに命じてくださいます。「どんなに強い人間でも、死でも、神さま以外に、恐れてはいけません。勇気をもって、天のお父さまを信じ続けなさい。」
(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書10章30節

あなたがたの髪の毛一本までも残らず数えられている。

〈ねらい〉

「かわいいものしらず」という言葉がありますが、小さい子どもたちは冒険家である一方、とてもこわがりやです。毎日がチャレンジの連続で、少しのことで自信を失ってしまうことがたびたびあります。そんな子どもたちに、私たちのすべてをご存じで、いつも守ってくださる神様のことを知らせ、神様、イエス様と共にいる安心を伝えましょう。

〈展開例〉

今日のイエス様のお話の中に、すずめができました。みんなのお家のそばにもいるかもしれませんね。すずめやからすはよく見かけるでしょう。すずめはね、遠いお山よりも人の家のそばが好きな鳥なんだって。イエス様のころから、みんながよく知ってる鳥だったようですね。

すずめは、たくさん集まって飛んだり、えさを食べたりしていることが多いですね。どうしてかな。小さくて、弱いからかな。たくさんでいればさびしくないからかな。あんまりたくさん集まっていて数え切れないこともあるよね。でも、そん

なすずめの一羽のことも、神様はちゃんと知っていらっしゃるんです。

もっとすごいことに、神様は私たちの髪の毛が何本あるかも知っていらっしゃるんだって！ おとなりの〇〇ちゃんの髪の毛、数えてみようか。……どう？ 数えきれない？ 無理だよ。あんまりたくさんありすぎて、数えきれないよね。でも、神様は、誰が何本髪の毛があるか、ぜんぶ、知っていらっしゃいます。すごいですね。

イエス様は教えてくださいました。ぜんぶ知っていらっしゃる神様が、わたしたちのことが大好きで、とっても大事に思ってくださってます。だから、心配しないでいいよ、大丈夫だよ、ってね。よかったですね。

〈おいのり〉

かみさま、小さいわたしたちのことも忘れずに、いつも知っていてくださり、大事に思ってください。これからも、いつも守ってください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

子どもたちの身近には占いや迷信があふれている。また、子どもたちが犯罪に巻き込まれるニュースも過剰なほど報道され、恐怖心をあおられていることだろう。そのような世の中にあって、本当に恐れるべき方は主なる神であることをしっかりと確認し、分かち合いたい。

〈展開例〉

1. 皆さんは、占いを知ってますね。生まれた日や、名前、血液型などで、将来のことを予想したり、こうしたらいいことがある、なんて、まるでなんでも知っているかのようです。占いを信じたり、気になったことはありますか？

→信じるべきではないと分かっている、誘惑を受けることは多いだろう。まず子どもたちのありのままの気持ちに耳を傾けたい。その上で、占いは本当の神様を知らない人間が勝手につくったものであることを確認する。

2. 今日のお話を聞いて、ここで言っている「恐れる」ということは、ただ「こわい」という意味ではないことが分かりましたね。この世をつくり、支配しておられる神様だけが、本当に「恐れるべき方」です。その神様がつくられたあらゆるものの中で、もっとも良いものは、なんだと思いますか？

→小さな雀でさえ慈しみ、支配のうちに置かれている神様が、何よりも私たち人間を愛し、髪の毛一本までも数えておられる！ その恵みの、驚きと感謝を分かち合う。

〈おいのり〉

神様は、髪の毛一本一本まで数えておられるほどに、私たちのすべてをご存じです。そのような神様が、いつも私たちと共にいて、守り、励ましてくださることを信じて、この一週間を歩んでいくことができますように。

〈やってみよう〉

しおりをつくろう！

☆用意するもの

色画用紙（できれば、雀にちなんで茶色など）、リボン（きれいなひもでも良い）、色鉛筆かサインペン、穴開けパンチ

☆作り方

色画用紙を小鳥の形に切り抜く。

目・くちばし・羽など、それぞれ自由に貼り付けたり描いたりする。

裏に今日の暗唱聖句を書き込む。パンチで穴をあけ、リボンを通す。



あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている

〈ねらい〉

迫害を恐れるなどいわれる理由を考える。

〈展開例〉

1. 私たちの中には恐れがある

あなたは学校の友達に、自分が教会に行っていることや、イエス様を信じていることを話したことがありますか。

そんな勇気はないと思っているとしたら、何を恐れているのでしょうか。それをいい表すことを妨げる恐れの中で、当てはまるものがないか考えてみましょう。

- みんなから理解されないのではないかと思う
- 人と違う人間だと思われて、孤立してしまうのが心配
- 仲間はずれにされたり、いじめられるのでは
- いい子ぶっている人と思われるのがイヤ
- それでもクリスチャン？といわれたくない

2. 何を恐れるなどいわれるのか

「恐れるな」とイエス様はいわれます。ここでいう恐れとは何でしょうか。その答えは今日の聖書箇所の前書に書いてあります。そこには「迫害を予告する」という題がつけられています。迫害とはイエス様を信じているために、憎まれたり苦しめられたり、悪口をいわれたり、捕まえられたり、攻撃されることです。

イエス様はこれから弟子たちが必ず迫害にあうことを知っておられました。イエス様はその弟子たちに迫害する人々を恐れてはならないとおっしゃいました。

3. どうして迫害する人々を恐れてはならないのか

なぜ恐れなくてもいいとおっしゃるのでしょうか。三つの理由が書かれています。

①神の国が完成するとき、隠されているものが明らかにになる

人々は神の国が近づいていることを信じないかもしれませんが。しかし、終わりの日にはすべて隠されていることが明らかにになります。そのとき、イエス様こそ神の子であることが誰の目にも明らかにになるのです。

②人々は体を殺しても魂を殺すことはできない

迫害する者たちは私たちの体を傷つけ、命を奪うことができるかもしれませんが。しかし私の魂を殺すことはできません。私たちが本当に恐れるべきお方は、体も魂も地獄で滅ぼすことのできる神様ただお一人だけです。

③神様は愛をもって私を覚えていてくださる

一羽の雀さえも神様は覚えておられます。私たちの髪の毛までも1本残らず数えられるお方は、雀よりはるかにまさって私たちを大切に取り扱いってくださいます。

イエス様をくださるほどに私たちを愛してくださった神様は、迫害のとき、特別な力で私たちを守ってくださいます。たとえ苦難や悪しき力が襲ってきても、神様の力と御支配はゆるぐことはありません。

イエス様を信じているという理由で苦しむことも起こってくるでしょう。しかし、そのときには聖霊なる神様が、耐える力と勇気と知恵を与えてくださいます。

4. 力となる御言葉

あなたを勇気づけてくれる御言葉を心の中に蓄えましょう。

①下記から御言葉を選んで、まずその聖書の箇所を開き、書き写す。

②暗唱する。(1~3分)

③2人ずつ組になり、相手に自分の書いた紙を渡す。

④紙を見ないでもいえるかを聞いてもらう。

★マタイ10章28節「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな」

★マタイ10章31節「だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている」

★イザヤ43章1節「恐れるな、わたしはあなたを贖う。あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ」

★イザヤ43章5節「恐れるな、わたしはあなたと共にいる」

〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に……

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズム問13（摂理）、14（運命や占いやたたりについて）が挙げられています。前号に何度か出ていますので（7/16、30、8/6）、ここでは省略します。

☆次の問答は以前にも紹介しましたが、別の訳でもう一度取り上げたいと思います。訳を比較してみると勉強になりますので、これは先生方のために記します。生徒たちには、前にのせた訳で、まだ覚えているかどうかをおさらいした方がいいかもしれません。（前号p.54参照。）

ジュネーブ教会信仰問答（渡辺訳）

問28 しかし、不敬虔なものや悪魔のことを私たちはどう考えるのでしょうか。

答 神は御霊をもって彼らを治めることはされませんが、御自身の権勢をもって、いわばくつわを掛けるように彼らを抑制したまい、そのため彼らは許された範囲しか動くことができませぬ。また、彼らは神の御意志に仕える者とされて、心ならずも、そして自らの計画に反して働かされ、神のよしと見たもうところを行なわずにはおられな

くされているのであります。

問29 このことについての認識は、あなたにとってどういう益となるのでしょうか。

答 たくさんの益があります。すなわち、もし悪魔や不敬虔な者たちに神の御意志に反したことが実行出来るとすれば、私たちは惨めな目に遭いましょう。また、彼らの欲望のまえにむ剥き出しにされていると考えると、私たちの心は決して平静ではおられません。しかし、神の決定によって手綱が掛けられ、いわば柵の中に閉じ込められ、神の御許しなしには彼らは何も出来ないとする時、やっとなんか私達は確実に静穏になるのであります。というのは、神御自身が特別に私たちのために守り手となり、救いと保護とを引き受けて下さるからです。

〈今週の聖書日課〉

日曜日	イザヤ43:21～25
月曜日	イザヤ40:18
火曜日	詩編50:21～23
水曜日	詩編78:17～29
木曜日	ヘブライ3:12
金曜日	ヨハネ2:15～17
土曜日	エフェソ4:30～5:5

テキスト マタイによる福音書11章25～30節

第10章から第20章の終りまでは、主イエスが教えを説いて廻る際の説教が取り上げられています。それぞれの説教が行われた場面の具体的な描写は、ほとんどありません。全体として主イエスが語りかけた相手は、十二人の弟子たちでした。第11章からはまた、取り巻く群衆に向かって、語りかけています。もちろん、主の近くには弟子たちがいました。また、ファリサイ派の人々が、質問をし、隙あらば主を落とし入れようとして、聞き耳を立てていました。

〈軛を負う〉

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」(28～30節)。主イエス・キリストが与えてくださる休み、それは重荷を取り去ってくださることはありません。荷を軽くしてくださることです。軛はなおも負い続けなければなりません。しかしながら、その軛は主ご自身が与えてくださった軛であることを忘れてはなりません。軛を負うとは、主イエスに学び、真似ることでもあります。私たちに対して主イエスは、主の真似をして生きるように招いておられます。そのようにして、私たちは主の弟子となっていくのです。

私たちには、どうして重荷を負わなければならないのか、という不安があります。せっかく、主イエス・キリストを信じて生きているにもかかわらず、どうして主は重荷を取り去ってくださらないのだろうか、という眩きがあります。主は負えるかどうかの不安を私たちの中に呼び起こしておられるわけではありません。重荷を負うところで、

安らぎを得ることができるのであります。ですから、そのような重荷を負えるのか、という不安はありません。背負うことができるのか、という重荷に脅えることもありません。これこそが、私たちのために重荷を負ってくださる主イエス・キリストの招きであり、慰めであります。

〈わたしが〉

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」(28節)。原文においては、「わたしが休ませる」というように、「わたし」が強調されています。30節までに、主イエス・キリストは、何度も「わたし」を強調しておられます。主イエスがこれほどまでに自己主張しておられるのはめずらしいことです。鍵はこの「わたし」にあるのです。あなたがたが無視している、この「わたし」にすべてがかかっているのです。

〈安らぎを得られる〉

「得られる」という言葉は、「見出す」とも言うことができる言葉です。つまり、安らぎは、探して見つけるものなのです。私たちはどこか温泉でも行って休みたいと思います。ここで休むことはそういうことなのでしょう。

実は、「安らぎを得られる」という言葉は、三つの言葉からできています。「わたしの軛を負い」、「わたしに学びなさい」、そして、「自分の魂の安息を得られる」という三つの言葉を重ねています。安らぎを得られるということは、軛を負うことであり、キリストに学ぶことであるということなのです。「軛」は、牛や馬が農作業するときにつけるものです。休ませるときにははずすものなのです。主イエスは、軛を負うことは安らぎを見出すことなのだと言われるのです。(安田恵嗣)

テキスト マタイによる福音書11章25～30節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問13、14

〔単元のねらい〕

「わたしのもとに来なさい。」この主イエスの愛の迫りを伝えることが狙いである。しかも、肝心なことは、単にこれを伝えてよしとするということで留まってはならない。目の前にいる子らが、すでにこの招きを受けていること、すでに主のみもとに来ていることを説教によって、礼拝式のなかで、納得させ、体験させることである。しかもさらに深く主イエスの御許に来させ、留ませ、主イエスをより愛し、主のために働く幼子へと育てたい。同時に、「休ませてあげよう」との主イエスの約束を語る、我々にとって、子ども達の安らぎの場である教会であるとは、どのような日曜学校像、教会の姿を意味するのかも深く問われ続けている課題であろう。いずれにしる、主イエスを知り、信じ、御許に近づくことの許されている幸いを、共に心から喜ぶ日としたい。

「イエスさまのもとに行こう」

おはようございます。僕たち私たちは、今日も、イエスさまの教会に来ることができました。先生は、皆が、日曜日に教会に来てくれることを心からうれしく思っています。教会では、毎週の水曜日の朝と夜のお祈りの会で、日曜学校の先生たちが、毎日、皆のためにお祈りしています。だから、本当にうれしいのです。

どうして、僕たち私たちは、今日、ここに來ることができたのでしょうか。もちろん、元気な体が与えられ、健康が守られ、遊びやテレビなどの誘惑、家の用事から守られて、ここに來ることができたわけです。みんな、努力して教会に來てくれたわけで、とってもすばらしいことです。

でも、それだけではありません。たとえば、学校や塾、映画館とか遊園地とか、そういうところは、自分で行こうと考えて行く場所でしょう。それなら、教会はどうでしょうか。教会に來ることができている子ども達は、ものすごく少ないでしょう。悲しいけれど、そうだと思います。どうして、他のお友達ではなく、何故、僕たち私たちは、ここに來ることができる、できたのでしょうか。

今日のイエスさまのお話は、そのことを教えてくださっています。最初に、イエスさまはこうおっしゃいました。「天と地をお造りくださいました

お父さま、あなたをほめたたえます。賛美します。」つまり、これはお祈りですね。イエスさまが天のお父さまに呼びかけておられるのです。

次に、こうおっしゃいました。「これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。」つまり、「イエスさまが救い主であって、神さまの御子であられることを、自分で頭がよいか、自分が考えることは間違いないとぬぼれているような人ではなく、僕たち私たちのような小さな子、幼子、素直にイエスさまのお話を聞いて、信じる人に示してくださいました。」ということです。

その次にこのようなことを教えてください。「イエスさまのことは天のお父さまがよく知っておられるし、天のお父さまのことは、御子イエスさまがよく知っておられる。」しかも、びっくりするようすばらしいことですが、そのような神さまのことを、イエスさまが、他の誰でもなく、ここにいた僕たち私たちに教えてくださった、だから、僕たち私たちはイエスさまのことを信じることも、天のお父さまのことを信じることもできるようにさせていただいたのだと、お教えくださったのです。

さて、イエスさまは、ここまでは、お祈りして

おられたのです。天のお父さまの方を向いてお話ししておられたのです。ところがこんどは、み顔をお弟子さんたちに向けて、人々に向かって話し始められます。つまり、僕たち私たちの方に顔を向けてお話を始めてくださったということです。それが、今日の暗唱聖句です。皆で唱えてみましょう。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」

そこにいたのは、お弟子さんたちです。イエスさまは、その人たちを、幼子のような者と呼んでくださいました。皆は、確かにイエスさまからすれば、幼子、子ども達ですね。けれども先生たちも幼子のような者なのです。ここにいる僕たち私たちはみんな、イエスさまから幼子のような者と見ていただいているのです。本当にうれしいですね。

イエスさまが仰った、「知恵ある者、賢い者」とは、イエスさまのことを必要としていない人、イエスさまに教えてもらわなくても、イエスさまに頼らなくても、イエスさまに従わなくても立派に生きてゆけると自信を持っている人のことです。神さまを信じてお祈りしなくても、けっこうまくやってゆける。教会学校に行かなくても、ちっとも困らない、教会に行ってお祈りしなくても、平気だと、うぬぼれている人のことです。けれども、僕たち私たちは、どうでしょうか。僕たち私たちは、今、ここにいます。イエスさまの教会にいます。イエスさまが呼んでくださったからです。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。」イエスさまが呼んでくださったのです。そして、「休ませてあげよう」と約束していただきます。今、イエスさまの教会に来た僕たち私たちは、休み、平安、安らぎ、楽しさを味わっていますか？先生は、イエスさまを礼拝し

ていると、本当に、平安です。イエスさまが生きておられて、先生に「近くに来なさい。わたしのそばに寄りなさい。あなたの重荷、苦しみ、悩みをわたしのところで、降ろしてしまいなさい」と、愛をもってやさしく語ってくださるからです。

僕たち私たちは、疲れ、重荷を持っていますか。「子どもには、疲れも重荷も関係ないさ、僕は、心も体もいつでも元気はつらつです。」こんな風に言えるお友達がいるのでしょうか。

子どもも大人も、誰でも、疲れと重荷を負っているのです。それは、罪という重荷です。罪があれば、それは、自分ひとりで背負いきれません。押しつぶされるのです。けれども、イエスさまは、十字架で、その罪を身代わりに背負ってくださいました。だから、軽いのです。それが、イエスさまが与えてくださる、イエスさましか与えることのできないまことの安息です。やすらぎです。「罪なんて、ないよ。わたしは、神さまに赦してもらわなくてはならないことなんかありません。」そんな人は、きっと、イエスさまのところに来ないでしょう。でも、僕たち私たちは、今、ここにいるのです。心から感謝します。

それなら、ここに来ていないお友達は、呼ばれていないのでしょうか。いいえ、皆を通して、イエスさまは呼んでおられます。ここに来ていないお友達には、イエスさまが必要ないのでしょうか。いいえ、必要は必ずです。イエスさまは必要としておられます。お友達と一緒に、イエスさまのところに来たいと思います。イエスさまのところでやすらぎが与えられている、僕たち私たちは、イエスさまのお手伝いができます。そして、イエスさまのために、イエスさまと一緒に働けば、ますますイエスさまの近くで、イエスさまをますます知ることができ、イエスさまからの安らぎを知ることができます。(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書11章28節

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。

〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉

- 1) 11/19にお休みの子はいませんでしたか？ どうしてお休みだったのでしょうか。次回出席できるようお祈りください。
- 2) 11/26の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。出席する子供たちの顔を浮かべながら……。教案の準備は祈りで始めましょう。
- 3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族の皆さんのために祈りましょう。

〈分級では〉

だんだん寒くなってきました。今日皆がイエス様の教会に来てくれた事を大変うれしく思っています。先生たちは皆が教会にこられるように祈っています。来週はもう12月になります。クリスマスの意味、イエス様の誕生の喜びを少しずつ伝えていきましょう。

〈分級のねらい〉

僕たち私たちが今日ここに来到ることが出来たのは、イエス様が「これらのことを知恵ある者や、賢い者に隠して、幼子のような者にお示しになられました。」とあるように、イエス様が他の誰でもなくて、ここにいる僕達私達に教えて下さった

からです。それにより私達も信じることができるようにさせていただいたことを感謝しましょう。

「疲れた者、重荷を負っている者は誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」という御言葉があります。私達僕達は小さいのでお父さんお母さん達に守られています。だけど幼稚園や保育園で、またいろいろな場面で疲れや重荷を負っています。けれども神様にお祈りすると、心が軽くなるよね。お友達とけんかしちゃって元気がない時、あやまる勇気が欲しい時、寂しい時、いつでも神様にお祈りしてね。神様はいつも皆のことを見ていて神様の良いようにしてくださいませ。そしてお祈りすると心が軽くなります。それは神様が一緒に悩みを分けて半分にしてくれるからです。そして心も軽くなります。お友達にも「神様って優しいよ、困った時いつでも助けてくれるよ。」と教えてあげましょう。また、教会の行事にも誘ってあげましょう。

〈おいのり〉

神様、今日、教会に来られたことをありがとうございます。いつでも一緒にいてくれる事をありがとうございます。困った時、寂しい時、いつも神様にお祈りできるようにして下さい。そしてまた元気が出るように導いて下さい。感謝します。



〈ねらい〉

今、世の中には楽しい場所、面白い場所がたくさんあります。しかし、そういう場所が、わたしたちに本当の幸せや安らぎを与えてくれるのでしょうか。そうではありません。聖書は、イエス様のもとに行き、イエス様のくびきを負うこと、そこにこそ、わたしたち人間の真の幸せが、真の安らぎがあると教えています。

忙しい毎日の中で、それでもイエス・キリストの体である教会に来ることができ、そこでイエス様にお仕えすることができる恵みの素晴らしさを子供たちと分かち合しましょう。

〈展開例〉

1. 25節でイエス様がおっしゃっている「これらのこと」とはどんなことですか。
→27節にあるように、イエス様だけが父なる神様の独り子であり、神様のことを知っておられるということ。また、イエス様が御言葉を与えてくださる人だけが、そのような天の神様のことを知ることができるということ。
2. ここでイエス様がおっしゃっている「知恵ある者や賢い者」、「幼子のような者」とは、どういう人だと思えますか。

3. 28節でイエス様は「疲れた者、重荷を負う者」に、どうしなさいと教えておられますか。

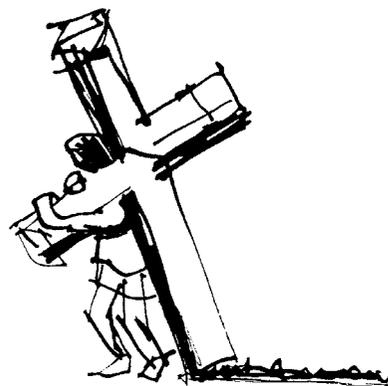
4. 29節でイエス様はそのような人たちに、どうしたら安らぎが得られると、教えておられますか。

→イエス様のくびきを負うということは、子供たちには少し難しいので、教師が分かりやすい具体的な例をあげて説明してください。

5. あなたは教会に来て、みんなで神様を礼拝し、御言葉を聞いて、どんな安らぎが与えられていますか。

〈おいのり〉

愛する天の神様。わたしたちに神様のこと、イエス様のことを教えてください、教会に導いてくださったことを感謝します。わたしたちのすべての重荷をイエス様は背負ってくださっています。イエス様の愛に毎日感謝して生きることができまうように。イエス様のことをしらない友達にもイエス様のことを伝えることができますように導いてください。



疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。やすませてあげよう

〈ねらい〉

イエス様の轆を負うとはどういうことを考える。

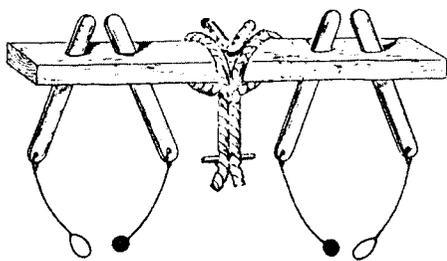
〈展開例〉**1. 重荷を負っている私たち**

子どもだって疲れます。悩みや心配事という重荷を負っています。勉強がわからない。友達関係がうまくいかない。学校に行きたくない。受験の苦しみ。親や兄弟とうまくいかない。病気など、避けることのできない様々な重荷があります。

私たちを苦しめる重荷の根っこには罪があります。神様から離れた結果、人は自分勝手に生きるようになりました。その罪が生み出す重荷が、私たちを苦しめるのです。

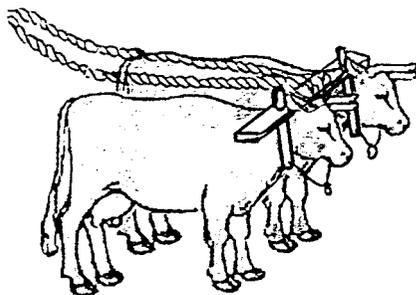
2. 重荷を負ってくださったイエス様

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい」とイエス様はおっしゃいます。イエス様は私たちの罪の重荷を十字架で引き受け、減ほしてくださいました。私たちの罪の重荷は、すでに十字架の上に釘付けにされてしまったのです。イエス様のもとに行く（イエス様を信じる）とき、私たちは重荷をおろすことができ、本当の休みを得ることができるのです。

3. 轆とは何か

くびき

（新教出版社、『新共同訳聖書辞典』より）



轆とは家畜などの首につけるもので、たとえば2頭の牛をつないで畑などを耕やさせたり、車を引かせたりするものです。（前の絵を参照）

轆とは、主人が牛や馬を主人の思いのままに歩かせるための道具です。

4. イエス様の轆は負いやすい

イエス様は「わたしの轆を負いなさい」といわれます。そういわれると私たちは、「轆なんて負うのはいやだなあ」と正直、思ってしまう。

轆は自分の好きなように生きたいと思う者にとっては邪魔なものです。轆がなければもっと思いのままに生きられるのにと思うかもしれません。

イエス様の轆を負うとは、イエス様に従っていくことです。イエス様の轆は、人を無理やり型にはめるようなものではありません。

イエス様に重荷を負っていただいた私たちは、神様の御心に喜んで従いたいと思うようになるからです。イエス様が私たちを導いてくださること（イエス様の轆）は、私たちにとって喜びであり、実際には轆とはならないからです。

イエス様が私たちを愛し、イエス様のところに引き寄せてくださったので、私たちはイエス様を信じ、従っていくことができます。

そのとき神様は私たちに、神様しか与えることのできない休みを与えてくださいます。

5. タングラムに挑戦しよう

- ①119ページの図をコピーしてバラバラに切る。
- ②シルエットのようになるように、組み合わせる轆をつくる。（時間があれば、十字架もつくる）

〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に

☆参照カテキズムは、前回と同じです。

☆暗唱聖句「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」とおっしゃるイエスさまが、わたしたちを罪から救うことのできる唯一の救い主であることを次の問答で確認しましょう。特にこの問29の力強い答えの言葉が、本当に生徒たちのものになったら素晴らしいですね。

ハイデルベルク信仰問答

問29 なぜ神の御子は「イエス」すなわち「救済者」と呼ばれるのですか。

答 それは、この方がわたしたちをわたしたちの罪から救ってくださるからであり、唯一の救いをほかの誰かに求めたり、ましてや見出すことなどできないからです。

問30 それでは、自分の幸福や救いを 聖人や自分自身やほかのどこかに求めている人々

は、唯一の救済者イエスを信じていると言えますか。

答 いいえ。

たとえ彼らがこの方を誇っていたとしても、その行いにおいて、彼らは唯一の救済者また救い主であられるイエスを否定しているのです。

なぜなら、イエスが完全な救い主ではないとするか、そうでなければ、この救い主を真実な信仰を持って受け入れ、自分の救いに必要なことすべてを この方のうちに持たねばならないか、どちらかだからです。

〈今週の聖書日課〉

日曜日	マタイ 11:28
月曜日	マタイ 1:21
火曜日	ヘブライ 7:25
水曜日	ヨハネ 15:5
木曜日	使徒 4:11～12
金曜日	テモテ 2:5
土曜日	コロサイ 2:6～7

テキスト イザヤ書52章7～10節

このテキストはローマ書10:15における引用で良く知られている。またアドベントにおける説教という教会的文脈を重視するならば、より注目すべきはルカ3:6との関連であろう。ここでイザヤ40:3～5までを引用することで、普遍的救済を強調しているのがルカ神学の特色である（マタイ・マルコではイザヤ40:3だけが引用されているのと比較して。またシメオンによる万民の救いの告知も参照）。そして著者の意図がそうである以上、そこにはイザヤ40:5「主の栄光が現れるのを肉なる者が共に見る」という預言に加え、今日のテキストの最後にある「地の果てまで、すべての人が神の救いを仰ぐ」（52:10）という預言も重層的に響きあい、キリストによる普遍的救済の成就という希望を増し加える効果が期待されているということは十分に考えられる。おそらくルカはそのようにすることで、洗礼者ヨハネの告げる「来るべき方」の到来の時と、このイザヤ52章で歌われる救いの成就の時とを重ね合わせようとしているのだろう。そして今日のテキストによれば、その時の到来を告げる者こそ「良い知らせ＝福音」を伝える者であって、そのような者の足こそ美しいのである。その足は「その使信の実現の美しさを告知するゆえに美しいのである（C. ヴェスターマン）」。

それでは使者の伝える「良い知らせ」は何か。原典では7節は、「良い知らせを伝える」という分詞に、「平和を告げる」「すばらしいこと（幸い、恵み）を伝える」「救いを告げる」そして「シオンに向かって『あなたの神が君臨される』と言う」といった分詞が並列されており、このことから「良い知らせ」の含蓄も分かるであろう。それはアドベントの文脈において考えるならば、来るべきキリストがもたらす平和であり、彼が教えてくださる神の恵みの数々であり、罪の赦しと永遠の命に集約される救いであり、そして生においても死に

おいても私たちを片時も離すことなく所有される（ハイデルベルク問答問1参照）恵みの王による支配の始まりを指していると言えるだろう。

ここでは特に、主題「平和の主」との関係から、メシアのもたらす平和について考えたい。旧約における平和とは、単なる戦争の反対の言葉ではない。シャロームとは、個々人の調和のとれた健全なあり方、心も体もすべてが十全に平安であるという豊かな意味を持った言葉であり、時としてそれは救いを、特に共同体の救いを表す。それはセンチメンタルな弱々しい平和ではなく、むしろ健全に喧嘩をできる平和と言うべきか。そういう健全やかな関係性の中で人間が生きることができている状態のことを指すのが、この平和という言葉。イザヤ書によれば、この平和＝調和をもたらすがメシアであり（2:4、9:5参照）、特に11章においては、その調和は人間世界のみならず被造世界全体に及び、本来の創造世界の調和、神の創造の完全な秩序が回復されるという美しい幻がうたわれる。神が創られたこの世界に本来満ち満ちていたあらゆる被造物間の健全な信頼関係、自然との調和、人間同士の調和、隣人との調和。環境汚染もなければ、戦争も無い、人間関係の破れもない、そういう平和をもたらす救い主の到来を預言者は告知し、人々は待ち続けてきたのである。

そして時が流れ、このイザヤの預言の矢は、すでに歴史から失われかけていたダビデの末裔を正確に選び出し、家畜小屋の飼葉桶において成就する。安全のための力がはびこる時代に、そのような力とは正反対のお姿で、もっとも弱く惨めなお姿で、平和の君は生まれ給う。人間の尊厳が最も低められたその淵において、強く輝きだす神の力、神の命、それこそが絶えることのない平和をもたらす。それがクリスマスにおいて示される、キリストの平和の奥義である。（坂井孝宏）

テキスト イザヤ書52章7～10節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問22、23

〔単元のねらい〕

旧約以来、神は苦しむ者のもとへと到来されるお方であるということをはっきりと明らかにしながら、クリスマスにおける御子の到来、その恵み、その励ましを学びたい。イザヤ書における、バビロン捕囚からの解放、イスラエルの民のシオンへの帰還というメッセージが、新約の主イエスの到来に至って、罪と悲惨からの解放、全世界の人々の神のもとへの帰還というメッセージへと深化していく恵みを伝える。また、子供たちがクリスマスを待ち望むだけでなく、その喜びを伝える者となっていくことができるようにも励ましたい。

「クリスマスの良い知らせを伝えよう」

クリスマスが近づいてきました。クリスマスを楽しみに待つ時期のことをアドベントと言いますが、聞いたことがあるでしょうか。元々は「近づく」という意味の外国語（ラテン語）の言葉でしたが、ここには、神さまが私たちのところに近づいてくださる、やって来てくださるという意味があります。クリスマスとはまさしく、神さまの独り子イエスさまが私たちのもとにやって来てくださったことをお祝いするときです。カレンダーを見ながら、クリスマスが一日一日と近づいてくるのを楽しみに待ちながら、何よりもイエスさまご自身がみんなのところへ近づいて来てくださること、いえ、もうすでに近づいてきてくださっていることを感じていたいものです。

今日は旧約聖書のイザヤ書を読みました。これはイエスさまが来られるよりもずっと前に書かれた預言書ですが、ここには何か、クリスマスに負けないような楽しそうな言葉があります。7節「いかに美しいことか、山々を歩き巡り、良い知らせを伝える者の足は」。8節「その声に、あなたの見張りは声をあげ、皆共に、喜び歌う」。良い知らせがやって来て、みんな喜んでいてこのことです。まるで、サンタクロースがやって来たという知らせを聞いて子供たちが喜んでいてというような感じがするかもしれません。一体、みんな何を喜んでいてのでしょうか。

クリスマスのことを考える前に、少しイザヤという預言者が活躍した時代のことをお話したいと思います。この時代は、国と国の間で争いが絶えない時代でした。どこの国の王さまも戦争が好きで、相手の国を滅ぼして、自分の国を大きくしようとしていました。そんな中で、やがてイザヤの後の時代になると、聖書を信じていたイスラエルの人たちの国も戦争に巻き込まれ、ついに、国が滅んでしまうということが起きてしまいました。そして、人々はバビロンという外国に連れて行かれてしまいます。昔々、モーセの時代にイスラエルの人たちはエジプトの国で奴隷であったことがありましたが、そのとき以来のとても悲しい出来事でした。彼らは、自分たちの国が負けてしまったというだけでなく、自分たちの神さまが他の国の神さまに負けてしまったのだと思い、ますます悲しい気持ちになりました。

しかし、それから数十年後、驚くべきことが起こります。バビロンに代わったペルシアという国が、自分たちの国に帰っていいという許可を与えてくれたのです。このことは、とてもうれしいことでした。山々を歩き巡りながら、みんなに伝えてあげたいと思うような良い知らせでした。そして、彼らはこのことを、神さまのおかげと信じたのでした。一度は見失いかけた神さまを、しっかりと信じるのができたのでした。良い知らせと

は、「あなたの神は王となられた」という勝利の声であり、「エルサレムの廃墟よ。主はその民を慰め、エルサレムを贖われた」という救いの声でした。イスラエルの人たちは、この声を聞いて、子供のように喜んだのでした。

ところで、このことは、聖書の神さまが戦争に勝ったということでしょうか。前は負けたけど、今度は勝ったということでしょうか。聖書の神さまは、まるで野球やサッカーのチームのように、あるときは勝ったり、あるときは負けたりするのでしょうか。

そうではありませんでした。実は、前にイスラエルの人たちの国が減ってしまったのは、神さまが負けたからではなく、神さまがイスラエルの人たちのひどい罪に罰を与えられたからなのでした。神さまはそうにして、イスラエルの人たちが罪を悔い改め、神さまのもとに立ち帰ることを願われたのでした。

大切なことは、戦争に勝つことではありませんでした。そして、国に帰ることよりも、町が再建されることよりも、大切なことがありました。それは、私たちが、罪を離れ、神さまのもとに立ち帰ることでした。

実はクリスマスの意味もここにあります。私た

ちが神さまのもとに帰ることができるようになるために、まず神さまご自身が私たちのところに来てくださったのがクリスマスです。旧約聖書の時代に、捕囚という悲しい状況の中にあつたイスラエルの人たちのもとに、神さまは訪れてくださいました。そして、新約聖書の時代になってついに、神さまは、罪の中で悲しんだり怒ったりしている人々のもとへ、人となって訪れてくださったのです。誰もが罪人です。しかしそれは、誰もがイエスさまの訪れを喜ぶことができるということです。イザヤもすでに、10節「地の果てまで、すべての人がわたしたちの神の救いを仰ぐ」と言っています。イスラエルの人だけでなく、世界中の人がイエスさまの訪れを喜ぶのです。確かに、今、世界中でクリスマスのお祝いがなされています。

そして、私たちは、この良い知らせを喜ぶと共に、世界中にこの良い知らせを伝える者になりたいと思います。例えばプレゼントをもらったら、みんなに知らせたくなるはずですが、クリスマスの本当のプレゼントはイエスさまです。そして、そのように良い知らせを伝える人の足は「美しい」と言われるのです。こんなにうれしいことが他にありませんか。(石原知弘)

[今週の暗唱聖句] イザヤ書52章7節

いかに美しいことか、山々を歩き巡り、良い知らせを伝える者の足は。

〈ねらい〉

クリスマス喜びをもって待ち望むとともに、クリスマスの恵みを自分たちだけのものとせず、本当の意味（クリスマスとは何か）と喜びを伝える者となろう。

〈展開例〉

1. 今日からアドベントである。アドベントの意味（アドベントとは何か）を話し、クリスマスを待ち望む喜びについて話す。
2. 今日の聖書箇所が書かれた背景について簡単に説明し（幼稚科なのであまり話の幅を広げすぎたくない）、7節の「良い知らせを伝える者の足」に着目。「みんなもすごく嬉しいことや

楽しい事があったら、たくさんの人に聞いてほしかったり、教えてあげたいと思いませんか？」と、子供たちに問いかける。

3. クリスマスは私たちにとって神様からの素晴らしいプレゼントの日である。このうれしい知らせを私たちは自分でとどまらずことなく、たくさんの人に伝える者になれるようにしよう。

〈おいのり〉

神様、イエス様がお生まれになったクリスマスの恵みをありがとうございます。このとても嬉しいクリスマスの本当の意味を、たくさんの人に話すことが出来るように助けてください。



〈ねらい〉

神様は、わたしたちに本当の平和を与えてくださるため、平和の主であるイエス・キリストをお遣わしくされました。この良い知らせを世界中の人々に伝えることがどんなに素晴らしい恵みであるかを子供たちと分ち合ひましょう。

〈展開例〉

1. 「良い知らせを伝える者」が伝える「良い知らせ」とは何のことですか。
→神様がイスラエルの王となられ、人々に平和と救いをお与えになるということ。

2. 神様は王としてイスラエルの民にどのように平和と救いを与えてくださいますか。
→神様はその民を慰め、彼等の罪を贖うことによって、彼等に平和と救いを与えてくださいます。

3. 神様の平和と救いの恵みに与ることのできる人はイスラエルの国の人だけですか。
→神様は地の果てまで、すべての人が、神の救いを仰ぐことができるようにしてくださいませ。

4. 神様は世界中の人々に平和と救いを与えるために何をしてくださいましたか。

→神の御子イエス・キリストをわたしたちの平和の君、救い主として、この世界に遣わしてくださった。それがイエス・キリストの誕生です。

5. わたしたちにとって「良い知らせ伝える」とはどういうことですか。

→御子イエス・キリストこそ、真の平和であり、救いであるということを、みんなに伝えること。そして、みんなと共に平和に生きること。

〈おいのり〉

愛する天の神様。あなたは、わたしたちの罪を赦し、わたしたちに本当の平和と救いを与えるためにイエス・キリストを遣わしてくださいませ。どうかこの素晴らしい良い知らせを、世界中のお友達に伝えることができますよう導いてください。



いかに美しいことか
山々を歩き巡り良い知らせを伝える者の足は

〈ねらい〉

クリスマスの喜びを自分のものとし、告知らせる者となろう。

〈展開例〉**1. クリスマスがうれしいのはどうしてだろう？**

クリスマスが近づくとなんだかワクワクしてきますね。それはどうしてでしょう。おいしいものを食べたり、プレゼントがもらえるからですか？楽しいパーティーがあるからですか？

教会へ来ている子どもたちは、クリスマスがイエス様の誕生日をお祝いする日だということを知っていると思います。

それはあなたにとってどういう意味を持つのでしょうか。考えてみましょう。

2. 「彼は平和を告げ、恵みの良い知らせを伝え、救いを告げ あなたの神は王となられた、とシオンに向かって呼ばれる」(イザヤ52章7節)

この御言葉はイエス様がお生まれになる500年以上も前に与えられた御言葉です。

このときの「良い知らせ」とは、長く敵の国の奴隷となっていた人々が解放されて自分の国に帰ることができるという、うれしい知らせです。イスラエルの人たちは40年以上も捕虜として、外国で不自由な生活をしなければなりませんでした。

「おまえたちの神様が弱いから負けたんだ」とばかにされることはとても辛いことでした。ですから「あなたの神は王となられた」という知らせを聞き、それを信じた人々はどんなにうれしかったことでしょう。もう敵に支配されるのではなく、本当の王である神様が自分たちの国を支配してくださいます。

3. 王となられるために来られたイエス様

あなたは誰の声に従って生きていますか。神様から離れてしまった人間は、自分が王様となり、悪しき者に支配される者となってしまいました。罪の奴隷となってしまいました。しかし、神様はこの世界に救い主をお送りくださるといふ約束を与えてくださいました。

イエス様が私たちの王となるためにこの世に

てくださったのがクリスマスです。ですから「あなたの神は王となられた」という今日の御言葉は、昔のイスラエルの人たちだけでなく、私たちにとっても、うれしい知らせなのです。

4. 神様の救いの約束は本当だった！

私たちに与えられた救いの約束は、クリスマスにおいて実現しました。これは「神が人の姿をとってこの世に来てくださった」というビッグニュースです。

長い間、イスラエルの人たちはこのときを待ち望んでいました。ついにその救い主がお生まれになったのです。神様の約束は真実だからです。

5. このニュースをどう伝えますか？

昔はニュースを伝える手段は「足」でした。「いかに美しいことか 山々を行きめぐり、良い知らせを伝える者の足は」(7節)とあります。

今は、新聞やテレビ、ラジオ、インターネットなどがあります。どのような方法でもこの「良い知らせ」を一人一人に伝えるには、まずそれを聞いた人が自分の言葉で伝えなくてはなりません。

先にイエス様の救いを知った人が、次の人にバトンを渡していくようなものです。あなたはこの「良い知らせ」をどのようにして伝えますか。

6. クリスマス壁新聞を作ろう！

救い主がお生まれになったことを、まだ世界の人たちが知らなかったとしたら、どんなふうに伝えたらよいでしょうか。新聞記者になったつもりで考えてみましょう。

【用意するもの】

聖書、模造紙(方眼紙)2枚、鉛筆、消しゴム、定規、色鉛筆、カラーサインペン、マジック、のり、ハサミ、クリスマスに関係のあるイラスト等

- ①まず、何と何を伝えるのかを考える
- ②新聞全体のレイアウトを考え、模造紙の1枚をそれぞれの記事の大きさに切る
- ③各記事の担当者を決め、切った紙を配る
- ④自分の担当の記事の見出しと文章、レイアウトを考える(絵を描いたり、イラストを貼る)
- ⑤それぞれの記事ができたら、模造紙に貼る

〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に……

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズム問
22、23が挙げられています。

問22 私たち、神の民のあがない主はどなたですか。

答 私たちの唯一の主、イエス・キリストです。イエスさまは、永遠の初めから御父より生まれた真の神さまです。私たちの救いのために聖霊によっておとめマリアより肉体を取り、真の人となってくださいました。イエスさまは、真の神であり真の人であり続けてくださる二性一人格の神さまです。

問23 主イエス・キリストとお呼びするのはなぜですか。

答 イエスとはお名前で「罪からの救い主」、キリストとはお働きを表し、「神さまから油を注がれた方」という意味です。このお方が私たちの主として与えられました。ですから、私たちは、喜びと感謝をもって主イエス・キリストとお呼びするのです。

☆同じ問いがハイデルベルク信仰問答でもなされています。そしてこの問答では「キリストの三職」についても言及されているわけですが、最後の方の「わたしたちの永遠の王として」というところは、きょうの聖書の御言葉「あなたの神は王となられた」との預言が成就したからだと気づかされます。

ハイデルベルク信仰問答

問31 なぜこの方は「キリスト」すなわち「油注がれた者」と呼ばれるのですか。

答 なぜなら、この方は父なる神から次のように任職され、聖霊によって油注がれたからです。すなわち、

わたしたちの最高の預言者また教師として、わたしたちの贖いあがなに関する神の隠された熟慮と御意志とを、余すところなくわたしたちに啓示し、

わたしたちの唯一の大祭司として、御自分の体による唯一の犠牲によってわたしたちを贖いおんちち みまえ、御父の御前でわたしたちのために絶えず執り成し、

わたしたちの永遠の王として、御自分の言葉と霊とによってわたしたちを治め、獲得なさった贖いのもとに わたしたちを守り保ってくださいるのです。

〈今週の聖書日課〉

日曜日 イザヤ52:7

月曜日 ゼカリヤ9:9

火曜日 マタイ21:1~5

水曜日 詩編2編

木曜日 イザヤ9:5~6

金曜日 フィリピ2:6~11

土曜日 マタイ2:1~2

テキスト エゼキエル書34章1～16節

古代近東諸国では、「羊飼い＝牧者」のイメージは、王または神々の表象として用いられた。おそらく牧畜生活を背景にしていると思われるこの表象は、イスラエルにおいても同様に見られ、「牧者なる神（創世48:15）」や「主は羊飼い（詩編23:1）」という言葉によって、主なる神の慈しみ深い統治を表している。それは羊飼いという職業に不可欠な、羊に対するまめまめしい配慮や忍耐力、あるいは危険と隣り合わせの寝ずの番といったイメージが、怒ることおそく、まどろむことなくイスラエルを導く主なる神と重ねられた結果であろう。そしてイスラエルにおいては、そのような神の統治を委ねられた者としての王にもまた、「牧者」の働きが要求される。王は神から委ねられた民を、羊を養うように献身的に愛し、守るべきである。しかし歴史において、王たちはその牧者たる務めを放棄した。神はそれを糾弾される。この預言の背後にあるのは、そうしたユダ王国の滅亡の歴史に見る、王たちの、またそれに集約される権力体制の愚かな姿である。

「自分自身を養うイスラエルの牧者」（2節）。これはユダ王国末期の王たちの愚行を指している。例えばヨヤキムは自らの王位を保つため、厳しい課税を施してファラオに貢物をしようとした（列王下23:35）。また彼は民衆の窮乏を顧みずに、壮麗な王宮建築を行い、エレミヤの糾弾を受けている（エレ22:13～15）。

「彼らは飼う者がいないので散らされ……」（5節）。ユダ王国の滅亡と捕囚の事実、そしてイスラエルの離散の状況を指す。そして「わたしの群れ」がそのような惨めにされているのに、「だれひとり、探す者もなく、尋ね求める者もない」と言われるほどに、エルサレムの指導者たちは無責任で無自覚であり、王には滅亡の反省は見られ

ない。そのことにもはや神は我慢できない。そこにはあのイエスの憐れみが響く（マタイ9:36）。

「それゆえ牧者たちよ。主の言葉を聞け」（7節、9節）と主は言葉を発せられる。「わたしは生きている」（8節）。これは神ご自身の誓いの言葉であって、断固とした神の決意がここにみなぎる。そして主なる神はこう言われる。「見よ、わたしは牧者たちに立ち向かう」（10節）。まことの牧者ご自身が、偽りの牧者の前に敢然と立ち上がり、民を搾取から救い出す。ファリサイ派を前にしたイエスの力強さを思わせる（マタイ12:9-14など）。そして神は、ちりぢりになった群れを諸国から集めて導き出すと言われる（11-13節）。これは捕囚からの解放と、離散の民のエルサレムへの帰還の約束だろう。そのようにして、「探す」「救い出す」「連れ出す」「導く」「養う」「憩わせる」といった一連の動詞によって、民の救済が約束される。

そしてこの良き牧者なる神は「失われたものを尋ね求め……弱ったものを強くする」（16節）。それはまさにイエスが教えた「迷い出た1匹の羊を捜す羊飼い」（マタイ18:10～14）の姿である。そして我々は「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」（マルコ2:17）と言って、我々を尋ねてくださった主イエスの内にこそ、その神の約束の成就を見ることができる。まことの羊飼いは、すべての者に仕える者として（マルコ10:45）世に来られ、命をかけて羊を守り、死の淵から救い出す。彼は命を与えるために、命を捨てる（ヨハネ10:11）。この羊飼いが共にいてくださるから、我々には恐れは無いのだ。たとえ、死の陰の谷を行くときも……（詩編23:4）。（坂井孝宏）

テキスト エゼキエル書34章1～16節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問24

〔単元のねらい〕

旧約以来、神は群れを養う羊飼いとしてご自身を現してこられたことを明らかにしながら、クリスマスに到来された御子こそ、私たちの良い羊飼いであられることを学びたい。エゼキエルが語った墮落した牧者と、あるべき牧者の姿を対照的に描きながら、神ご自身が牧者となられること、ついには独り子を良い羊飼いとして送ってくださったことを示したい。キリストが良い羊飼いであられることはその全生涯において明らかにされているが、特にクリスマスとの関連で、そもそも御子がこの世に到来されたということ自体が、失われた羊を探し出すという羊飼いとしての姿を現していることを教えたい。

「失われた羊を探し求めて」

イエスさまがベツレヘムでお生まれになったとき、その知らせはまず誰に伝えられたか知っていますか。野宿をしていた羊飼いたちです。日本ではあまり馴染みがないかもしれませんが、羊飼いの姿はイスラエルではよく知られたものでした。そして、たくさんの羊を引き連れて行くその羊飼いの姿は、聖書の中でもとても大切な意味を持っています。それは、群れを率いる指導者を意味するのです。スポーツチームで言えば監督、オーケストラで言えば指揮者、そして国で言えば大統領や総理大臣のようなものではないでしょうか。聖書でも、あのイスラエルの指導者だったダビデ王は、羊飼い、牧者と呼ばれています。そして、それは、ただ国の政治の指導者ということではなく、信仰的な指導者ということです。その意味で言うと、教会の牧師は羊飼いです。牧師は、教会に集う一人一人を導き、養う大切な役目を持っているのです。

今日みんなで読んだエゼキエル書にも、「牧者」という言葉が出てきます。これは羊飼いのことであり、やはり信仰の指導者のことです。ところが、ここに出てくる指導者は、とてもよくない指導者だったようです。何がよくなかったのでしょうか。いくつか挙げてみましょう。まず、3節には「群れを養おうとはしない」とあり、4節には「苛酷に群れを支配した」とあります。さらに5節以下には、羊はちりちりになってしまいますが、羊飼

いは探し出そうともしないとあります。このような羊飼いを、私たちはどう思うでしょうか。

エゼキエルが活躍した時代のことを少しお話したいと思います。このころ、イスラエルの国は滅ぼされ、バビロンという場所にみんな連れて行かれてしまいました。それは、まさに羊がちりちりになってしまったような時代です。しかし、イスラエルの指導者であるべき牧者たちは、その羊たちを探し出して救おうとしないのです。羊飼いたちの問題は、8節にあるとおり、「牧者は群れを養わず、自分自身を養っている」ということでした。羊よりも自分が大事という、自分勝手な姿です。イスラエルの民の悲惨は、国が滅びたという以上に、牧者であるべき本当の指導者を失ったということでした。私たちは、もし自分が羊だったら、このような羊飼いはいやだなあと思うでしょう。

しかし、考えてみると、もし自分が羊ではなくて羊飼いの立場になるとしたら、どうでしょうか。私たちもとても困ってしまったときは、他の人のことではなく、自分のことばかりを考えてしまうのではないのでしょうか。私たちの中にも、自分勝手な自分というものがあることでしょう。

それでは一体誰が本当の羊飼いになれるのでしょうか。エゼキエルは、11節から新しい言葉を語り出します。「まことに、主なる神はこう言

われる。見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする」。神さまご自身が、イスラエルの民の羊飼いになられるというのです。そして、ちりちりになった羊を探し出し、彼らを導き、養うというのです。そして、このことは、やがて本当に実現します。バビロンに連れて行かれていた人たちが、イスラエルに帰って来ることのできる日が来たのです。神さまは、本当に羊飼いとして、迷える羊を導いてくださったのです。

そして、このことは、やがてもっと大きな仕方で実現します。みんなは、「わたしは良い羊飼いである」(ヨハネ10:11)という言葉聞いたことがあるでしょうか。誰の言葉か分かりますか。イエスキリストの言葉です。イエスキリストこそ、良い羊飼いとして私たちのもて来てくださった神さまご自身です。そして、エゼキエルが語ったような羊飼いとしての姿を示してくださいました。良い羊飼いは、自分自身を養うのではなく、群れを養う

ものです。イエスキリストも言われました。「良い羊飼いは羊のために命を捨てる」(ヨハネ10:11)。イエスキリストは、ご自分のためではなく、迷える羊のために生涯をささげてくださいました。迷える羊とは、私たち罪人のことです。自分勝手な私たちのことです。イエスキリストは、私たちのために、十字架にかかり、命を捨ててくださいました。そのようにして、命がけで羊の命を守ってくださいました。私たちは、十字架のおかげで、神さまのもとに立ち帰ることができるのです。

もうすぐクリスマスです。クリスマスするとき、天使に出会った羊飼いたちが、イエスキリストを探してベツレヘムの飼い葉桶に向かいます。しかし、本当は、イエスキリストの方が彼らを探して地上まで来てくださったのです。失われ、ちりちりになった羊を探すために、天から地上に降ってこられたイエスキリストこそ、私たちの羊飼いなのです。

(石原知弘)

[今週の暗唱聖句] エゼキエル書34章11節

まことに、主なる神はこう言われる。

見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする。



〈ねらい〉

神さまが罪人のわたしたちを助けるために、良い羊飼いであるイエスさまをこの世界に送ってくださったことを知る。

〈展開例〉

聖書の中で一番よく出てくる動物はなんですか？ そう、鳴き方は「メエメエ」、白い毛をまとった羊です。

羊は、ライオンや熊のように鋭い牙もありませんし、馬や鹿のように速い足も持っていません。草の陰にいるうさぎにも怯えるほど臆病で弱い動物です。また草を食べることに夢中になるといつの間にか迷子になり、迷子になると仲間の群れに帰ることが出来ない愚かな動物です。だれかにお世話してもらわないと死んでしまいます。

このような羊をお世話してくれる人が羊飼いです。羊飼いは群れの一匹一匹の羊を見守り面倒をみます。おいしい草のある野原に連れて行き、水を飲ませ、狼や熊などに襲われないように羊を守ります。もし襲われたら、長い杖や石投げて追い払ってくれます。夕方になると羊の名前を一匹一匹よんで数えて、迷子になっていないかを確認して、囲いの中に連れて帰ってくれます。(生徒の名前に〇〇ひつじ、と呼びかけ全員呼んであげてください。)

さあ、これは良い羊飼いのことを言いました。悪い羊飼いは、羊のことをきちんと世話をしないので、羊はおいしい草を食べられず、水も飲めなくて、弱り果ててしまいます。狼がやってきて、羊たちはちりじりになってどこかに逃げていかなければなりません。もしかすると、食べられて死んでしまうかもしれません。

みんながもし羊だったら、良い羊飼い悪い羊飼いでどっちにお世話してもらいたいですか？ それは決まってるよね。神さまは、良い羊飼いであるイエスさまを私たちのところに送って下さいました。わたしたちが、いつも元気でそして死なないように。

聖書の中で、イエスさまは言われました。

「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。わたしは、良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。」イエスさまは、罪人の私たちのために十字架にかかって死んで下さいました。みなさんはイエスさまが神さまであることをしていますよね。良い羊飼いのイエスさまに従ってついていきましょう。

〈おいのり〉

天のお父さま、良い羊飼いのようなイエス様をこの世界に送ってくださってありがとうございます。イエス様の言われることを良く聞くことができるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

羊と狼と羊飼いのお面をつくって、おにごっこをアレンジして遊びましょう。鬼はもちろん狼です。羊を助けるときには、ヨハネ10:11のみことばを言きましょう。

〈聖書箇所〉

わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。(ヨハネ10:11)

〈ねらい〉

わたしたち罪人は、羊飼いがいなければ道に迷って野の獣に食べられてしまう弱い羊であること、しかし主イエス・キリストは真の羊飼いとして、どんな時も、羊であるわたしたちを守り、導いてくださるお方だということを子供たちと共に覚えましょう。

〈展開例〉

1. 羊はどんな動物だと思いますか。

→子供たちにとって羊は可愛い動物にしか見えませんが、本当はすぐに道に迷ってしまったら、獣に食べられてしまったり、転んでも自分で立ち上がることもできないような弱い動物であることを教えてください。

2. 良い羊飼いとはどんな羊飼いですか。

→羊のことを心から大切に思い、羊に必要な食べ物を与え、自分の命を犠牲にしても羊守ってくれる羊飼い。いつも寝ないで、夜でも羊のことを守ってくれる羊飼い。

3. 羊飼いがいないと羊はどうなりますか。

→道に迷ってちりちりになってしまう。道に迷って崖から落ちて死んでしまう。野の獣に襲われて食べられてしまう。

4. イエス様はわたしたちのことを飼い主のいない羊のようだとおっしゃいましたが(マタイ9:36)、それなら、わたしたちを守り、導いてくださる良い羊飼いとは誰ですか。

→イエス・キリストこそ、わたしたち罪人の真の良い羊飼いです。そのことをヨハネ福音書10章7～11節の箇所を読んで子供たちと考えましょう。

〈おいのり〉

愛する天の神様。わたしたち罪人は自分勝手に道を突き進み、道に迷い、滅びに向かって歩んでいた羊です。しかし、神様はそんなわたしたちを滅びから助けるために、良い羊飼いであるイエス・キリストを、わたしたちの所に遣わしてくださいました。どうか、どんな時もわたしたちがイエス様の声をしっかりと聞き分けて生きることができるよう導いてください。



見よ
わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする

〈ねらい〉

真の羊飼いであるイエス様と私たちの関係を学ぶ。

〈展開例〉**1. もし羊飼いがいなかったら羊はどうなる？**

もし羊飼いがいなかったら、羊はどうなってしまうのかを考えてみましょう。

①羊は同じところの草ばかり食べてしまう

羊はくせの強い動物で、同じ場所の草ばかりを食べるので、牧場は荒れてしまいます。草を十分に食べられない羊は痩せて弱ってしまいます。

②羊はどこにきれいな水があるのかわからない

きれいな水のある場所を知っている羊飼いが連れて行ってくれなければ、羊は汚れた水を飲んで、病気になるてしまいます。

③羊は転んでひっくり返ると起き上がれない

誰かが起こしてあげなければ羊は自分では起き上がれないので、そのまま死んでしまいます。

④羊はとても弱い動物

羊には敵と戦う武器もなく足も遅いので、オオカミなどに襲われても、ただパニックになって逃げるしかできません。泥棒が来て羊が盗まれることもあります。

⑤羊はとても臆病な動物

お腹がすいていたり、仲間と争っていたり、ハエや寄生虫などに悩まされていると、羊は眠ることもできません。

羊ほど細やかに手をかけて世話をしやらない動物はいません。羊飼いがいつも注意深く羊を見守り、世話をし、新しい草の生えているところ、きれいな水のあるところに導いてやらなければ生きていけないのです。

2. 良い羊飼いとは

良い羊飼いはいつも羊のことを気にかけています。病気をしていないだろうか。お腹をすかしていないだろうか。のどは渇いていないだろうか。迷子になっていないだろうか。羊をねらう敵はいないだろうか。安心して眠ることができているだろうか。24時間、羊を注意深く見守ります。そ

して手のかかる世話を怠りません。羊には一匹一匹に名前がつけられています。良い羊飼いは自分の羊のことを誰よりもよく知っています。

もし羊がオオカミなどに襲われたら、羊飼いは羊を守るために戦います。羊が一番安心するのは羊飼いがそばにいてくれるときです。

3. 真の羊飼いイエス様

私たちも、誰かに導かれなければ生きていけない羊のようなものです。くせの強い、自分勝手な道を進んで行ってしまうおろかなものです。危険なところや囲いを抜け出して道を迷い出してしまうとき、イエス様はすぐにやってきて、私たちを羊飼いの杖で引き戻してくださいます。いつも私たちを注意深く見守り、必要なものを満たし、敵から守ってくださいます。

イエス様は言われました。「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」

私たちのことをいつも心にかけてくださるのは、私たちがイエス様の羊だからです。クリスマスは、羊飼いのいなかった世界に、真の羊飼いであるイエス様が来てくださったうれしい日です。

4. ワークシート

空白にあてはまるものを入れましょう。

「見よ、わたしは自ら自分の群れを（ ）、彼らの（ ）。牧者が、自分の羊がちりちりになっているときに、その群れを（ ）ように、わたしは自分の羊を（ ）。わたしは雲と密雲の日に散らされた群れを、すべての場所から（ ）。わたしは彼らを諸国の民の中から（ ）、諸国から集めて彼らの土地に（ ）。わたしはイスラエルの山々、谷間、また居住地で彼らを（ ）。」

「わたしは失われたものを（ ）、追われたものを（ ）、傷ついたものを（ ）、弱ったものを（ ）。」

(ア)包み (イ)救い出す (ウ)世話をする (エ)探し出し (オ)探す (カ)養う (キ)導く (ク)尋ね求め (ケ)連れ出し (コ)連れ戻し (ク)強くする

(答え) エ、ウ、オ、オ、イ、ケ、キ、カ、ク、コ、ア、サ (エゼキエル書34章11～14、16節)

〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に……

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズム問24が挙げられています。

問24 主イエス・キリストは、私たちの救いのために、どのようなお働きをしてくださったのですか。

答 主イエス・キリストは、私たち罪人の身代わりとして十字架に死に、三日目に永遠の命によみがえられました。ですから、私たちは、罪赦されて 神と共に永遠に生きる祝福に生かされています。

☆今日の聖書箇所エゼキエル書34章ではまことの牧者像が描かれているわけですが、牧者として群れを養い、憩わせ、探し、集め、導かれる姿は、キリストが預言者・祭司・王として職務を果たされる姿とだぶってきます。それを次の問答で確認しましょう。

ウェストミンスター小教理問答

問24 キリストは、どのようにして預言者職を果たされますか。

答 キリストが預言者職を果たされるのは、御自身の御言葉と御霊によって、私たちの救

いのために神の御意志を私たちに啓示してくださることにおいてです。

問25 キリストは、どのようにして祭司職を果たされますか。

答 キリストが祭司職を果たされるのは、神の正義を満足させて私たちを神に和解させるために、御自身をいけにえとしてただ一度ささげられたこと、また私たちのためにとりなし続けてくださることにおいてです。

問26 キリストは、どのようにして王職を果たされますか。

答 キリストが王職を果たされるのは、私たちが御自身に従わせ、治め、守ってくださること、また御自身と私たちとのあらゆる敵を抑えて征服してくださることにおいてです。

〈今週の聖書日課〉

日曜日 エゼキエル34:11～16

月曜日 ヨハネ10:11～16

火曜日 詩編23編

水曜日 詩編95:6～7

木曜日 ヘブライ7:25～27

金曜日 ヘブライ9:14

土曜日 マタイ18:10～14

テキスト イザヤ書9章1～6節

今日の主題は「大いなる光」である。このテキストにおいて、その光は闇に輝く光である。光を待つ闇の現実が語られねば、光の輝きは半減する。歴史的状況を示しているのは、8:23bである。それはアッシリアのティグラトピレセル3世によって「ゼブルン・ナフタリ」が辱めを受け、「海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人の地ガリラヤ」という諸州が奪われたBC732年を示すと言われる（シリア・エフライム戦争）。そして9章の預言がなされたのは、その時からBC721年のサマリア陥落による北イスラエル王国の滅亡までの間であるだろう。預言者イザヤはそのようなアッシリアの侵食による隣国の断末魔を聞きながら、自国の未来を憂い、戦争に疲れ切った人々を思い、そこに「闇」を正確に読み取っていた。そんな「闇の中を歩む民」が「大いなる光」を見る。闇の支配する時代に、それを凌駕する光の希望を人々に与えるのがこの預言の主旨である。

戦争は終わり、刈り入れを祝うような大きな喜びが与えられる（2節）。なぜなら（原典では3,4,5節が「なぜなら」を意味する「キー」で始まる）、ギデオンがミディアン人の大侵入を打ち破った日の様に（士師7章）虐げる者の鞭が折られ（3節）、軍備はすべて排除された神の平和の勝利が訪れる（4節）からである。イザヤはそのような光による転換を、力強く預言する。そして預言は、一人の王子の誕生の告知によって最高潮を迎える。光は、このメシア王の即位を根拠に輝き出る。その王は、「万軍の主の熱意によって」立てられる、神の統治を回復するまことの統治者である（6節）。そのようにして現実の王アハズを否定しつつ、天からの王の即位を預言して、神が約束されたダビデ王家の永遠の繁栄の希望をつなぎ、終末的展望をひらいたのがイザヤである。神ご自身の介入によって、ダビデ契約は保証される。

その来るべきメシア王の性格を示す4つの名前がある。「驚くべき指導者」とは英語でワンダフルカウンセラー、つまり判断力に富んで偉大な知恵を持った王。「力ある神」とは「神のように力をもった英雄」ともいえるが、敗北することのありえない主なる神の力強さを持った王。「永遠の父」とは父親のようにその民をいつまでも育み配慮する王の思慮深さを表す。そして「平和の君」。この王のもとでは、国の内外において争いや抑圧の恐れがなくなって、繁栄と幸福な生活がもたらされることが約束されている（12月3日の聖書研究を参照）。

このような新しい王を与えるというかたちでの神の歴史への介入が、一人のみどりごの誕生に始まると語られるのは、それが人間の舞台に神が介入することに注意を喚起する特別な方法であるからだろう。モーセの場合にしても、サムエルの場合にしても、聖書における子どもの誕生は、その時々々の危機的状況に対する神の劇的介入をあらわしており、それは苦しむ民を救うための神の劇的な恵みの御業として起こるのである。そして新約記者は、聖書におけるもう一つの誕生物語にこの神の劇的介入を見させようとした。それは再び歴史の表舞台へと引き戻されたダビデの末裔の、ユダヤ人の王としての誕生であり（マタイ1,2章）、わたしたちの間に肉となって宿られた、神なる言の誕生であった（ヨハネ1章）。そして夜に生まれたその王の上には、一つの星が輝いた（マタイ2:9）。その言が与える命は、人間を照らす光であり、その光は闇に輝くのであった（ヨハネ1:5）。世の暗闇が光を受け入れずとも、それに呑み込まれることなく、光は確かに輝き続け、やがて暗闇を圧倒する。この大いなる光として来られたメシア王が、我らを支配する。そのような王を持つ民は、いかに幸いなことか!!（坂井孝宏）

テキスト イザヤ書9章1～6節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問21

〔単元のねらい〕

旧約以来、神は闇を照らす光としてご自身を現してこられたことを明らかにしながら、クリスマスに到来された御子こそ、世の光であられることを学びたい。戦争の絶えないイザヤの時代にあって新しい王として期待される男の子の誕生が喜びであったのに対して、イエスさまの誕生は罪の支配に勝利されるまことの王の到来であったことを示したい。そして、光と闇のコントラストを印象的に示しながら、光のもとに子供たちが進み出、また光の子となって力強く歩めるように励ましたい。

「闇を照らす光、イエスさま」

子供が生まれるのはうれしいものです。ここで預言者イザヤも、子供が生まれる喜びを語っています。しかし、ここでの喜び方は、なんだかみんなの弟や妹が生まれたときのような喜び方とは違うようです。闇に光が射すとか、平和は絶えることがないとか、一人の子供が生まれたという喜びにしては、とてもおおげさに聞こえます。これほどまで喜ばれる子供とは一体どういう人のことなのでしょう。

ここに書かれている言葉がどういうときのものであったかを少しお話しておきましょう。イザヤが語っているお話の舞台は、北イスラエルという王国です。この北イスラエルは、イザヤの時代には、アッシリアという大国の攻撃を受けて、滅亡してしまいました。1節の「闇の中」とか「死の陰の地」という言い方は、そのことを指しています。しかしイザヤは、一人の男の子が生まれることで、その北イスラエルに再び光が輝き、人々は喜び楽しむようになるというのです。

このように、国と国が争っている中で、これほどまで誕生が喜ばれる子供とは、王さまのことです。当時の王さまは男の人でしたから、ここで特に男の子の誕生が喜ばれています。人々は、強く立派な王さまを求めています。実は北イスラエルが滅んだのも、悪い王さまが続いたためでした。そして、もう一つのイスラエルの国である南ユダにも、しばらく立派な王さまが出ていません

でした。人々は、あのダビデ王のような、強くて、立派な、そして信仰深い王さまを求めていたのです。そして、闇のようになってしまった自分たちの国に、そしてこの生活に、光をもたらしてくれるような王さまを求めています。

そして、この人々の期待は、南ユダに実際に登場したヒゼキヤという王さまへと向けられることで、現実のものとなっていきました。ヒゼキヤ王のもとで南ユダは、アッシリアの攻撃から奇跡的に守られるという経験をしたります。それは、アッシリアが強かった暗い時代における、神さまからの確かな光でした。

しかし、この男の子の誕生の喜びは、地上の王さまへの期待だけで終わるものではありませんでした。この言葉は、クリスマスの奇跡を預言する言葉でもあったのです。3節に、「虐げる者の鞭を、あなたはミディアンの日のように折ってください」とあります。ミディアンの日とは、かつてギデオンというイスラエルの勇者が、選ばれた300人と共に、宿敵ミディアン人を打ち破ったという出来事のことです。まだイスラエルが王国となる前の話であり、士師記7章に出てくる話ですが、実はその出来事が起こった場所が、後の北イスラエルに当たるところだったのです。

そして、そのミディアンの日、士師ギデオンが勝利を治めたとき、イスラエルの人々は、ギデオンにこう頼みました。「我々を救ってくれたのは

あなたですから、あなたはもとより、御子息、そのまた御子息が、我々を治めてください」。しかし、ギデオンは彼らにこう答えたのでした。「わたしはあなたたちを治めない。息子もあなたたちを治めない。主があなたたちを治められる」。人間の王さまではなく、神さまご自身が本当の王さまとして治めてくださることこそ、一番いいことなのです。そして、イザヤが預言した男の子の誕生も、ヒゼキヤ王のことでなく、神さまご自身である王、つまり、神の御子イエスさまの誕生を予告していたのです。

人間の王さまならば、いつかは力を失い、また必ず死ぬときがきます。ちょうど、蛍光灯の光が、最初はどんなに明るく輝いていても、いつかは消えてしまうようなものです。しかし、神の御子が王さまとして来てくださった以上、その光は消えることはありません。永遠に輝き続けます。そして、その光は、私たちの闇のような心も明るくしてくださるのです。

神戸ではクリスマスが近づくと、神戸ルミナリエという光の祭典が行われます。町の一本の通りがきれいにライトアップされるのです。何年か前に、知らないでたまたま通りかかったことがありましたが、そのとき実は一緒にいた人と少しけん

かをしていました。お互いに言葉を交わすこともないまま車の中に乗っていました。先には、長く暗い帰り道が待っていますが、何だか心まで暗くなってしまうようでした。しかし、渋滞した道を右に曲ったそのときでした。ルミナリエの、まっすぐに果てしなく伸びる光の道が現れたのです。その日は実は、本番前の試験点灯の日で、車に乗ったまま光の中を悠々と進んで行くことができました。感動的でした。そして、普段は見ることのできないきれいな光の中で、車の中の私たちの心も明るくなり、もうすぐクリスマスだねと、イエスさまの話をしながら帰ることができたのです。

光には不思議な力があります。私たちの小さな心、意地を張った思いなど、どこかに消し去ってしまうような力があります。イエスさまは、どんなに明るい地上の光よりも輝かしい光として、世に來られました。私たちはけんかをすることもあります。泣いたり、怒ったりすることもあります。そのようにして暗い心で過ごすときもあります。しかし、光はすべてを喜びに変えてくれます。クリスマスには町中が光にあふれますが、私たちは何よりもイエスさまの光に照らされて歩むことができるのです。

(石原知弘)

[今週の暗唱聖句] イザヤ書9章1節

闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。



〈ねらい〉

イエス様こそ本当の光であり、イエス様の誕生は罪に勝利される真の王の到来であることを示したい。また、子どもたちが光の子となって光の道をまっすぐ進めるように励ましたい。

〈展開例：最初の部分のみ書きます〉

今日のお話は、イザヤさんが子どもの生まれる喜びを語っています。みなさんのまわりにも赤ちゃんがいますか。赤ちゃんが生まれるというのは、ほんとうにうれしいものですね。でも、今日生まれるとっているのは、どうやらふつうの赤ちゃんではないのです。

昔、戦争のために国が減んで、その国の人々は

とても悲しんでいました。みなさんもけんかしたり、泣いたりして悲しくなることはありませんか。

しかし、一人の男の子が生まれることで、暗くなってしまったひとびとの心に光を照らしてくれるというのです。そんなすごい男の子とは誰なのでしょうか。……

そう、みんながよく知っているイエス様なのです。……

〈おいのり〉

私たちの光として、イエス様を送ってくださってありがとうございます。私たちもイエス様にならって、光の子として歩めるように助けてください。

〈やってみよう〉**スライム作り****準備するもの**

色水（絵の具を溶かしたものでよい）、洗濯糊、ホウ砂水（薬局で販売しているものを水で溶かしておく）、紙コップ、割り箸などかき混ぜるもの

手順

- ①色水・ホウ砂水はあらかじめペットボトルなどに作っておく。
- ②色水・洗濯糊・ホウ砂水の分量はすべて1:1:1である。
それが量れる別の入れ物を用意しておく。
- ③分量を量った色水と洗濯糊を自分の紙コップに入れて、割り箸でよく混ぜる。
- ④③に同じ量のホウ砂水を混ぜて、よくかき混ぜる。
- ⑤完成。手の上などにのせたりして楽しく遊びましょう。

注意

できたスライムは口の中に入れないように。
水道にも流さないようにしましょう。

〈ねらい〉

神様は暗闇を照らす世の光として、救い主である男の子の誕生をイスラエルに約束なさって来られました。そして、その約束通り、神様は救い主イエス・キリストをこの世に送って下さいました。子供たちを取り巻く環境がますます暗闇のような今の時代ですが、だからこそ、世の光であるイエス様を信じて、イエス様に従って歩むことの大切さを、もう一度子供たちと共に覚えましょう。

〈展開例〉

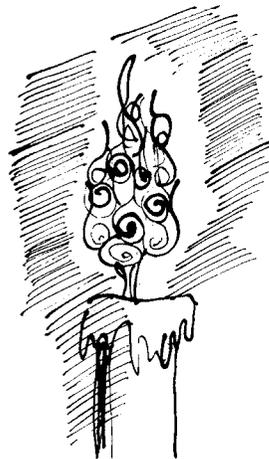
- 闇の中を歩む民は何を見ますか。
→ (1節)
- 彼等が見る「光」とは何のことでしょう。
→ (4節、5節、6節参照) イスラエルの民を救い、正義を実現し、完全な平和をもたらす王として男の子の誕生。
- その約束の男の子はどんな名前と呼ばれますか。その名前を四つ書いてください。
→ (5節)
- イザヤ書で神様が約束してくださった男の子は、誰のことですか。

→ルカ福音書1章79節、2章11節を子供たちと一緒に読んで、この預言はまさに神の御子イエス・キリストの誕生を予告したものであることを確認してください。

- 世の光であるイエス様を信じているみんなは光の子供です。光の子供としてどんなふう生きていきたいと思いますか。
→世の光として、暗闇の中にある者たちに希望の光を与え、愛と正義と平和の御国を実現して下さるイエス様です。クリスチャンはそのイエス様に結ばれて生きる者です。クリスチャンとしての大切な使命を、子供たちなりに理解できるように共に話し合ってみましょう。

〈おいのり〉

愛する天の神様。わたしたちはイエス様を知る前は暗闇の中を歩いていました。しかし、神様はわたしたちに真の世の光であるイエス様を与えてくださり、イエス様を信じて光の中を歩くことができるようになりました。どうかこれからも光の子供としてイエス様に従って歩くことができますように導いてください。



闇の中を歩む民は、大いなる光を見
死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた

〈ねらい〉

この世の闇を照らすためにイエス様がお生まれになったことを感謝する。

〈展開例〉**1. 闇の中を歩む民とは？**

イザヤが預言した頃、イスラエルは北と南の二つの国に分裂していました。北イスラエルには悪い王様が続き、本当の神様を捨てて偶像を拝んだり自分の子どもを偶像に焼いてささげたり、悪いことばかりしていました。まさに闇の中を歩んでいたのです。

神様は何度も預言者を送って「悪いことをやめなさい。わたしの戒めを守りなさい」といわれましたが、人々はこのことを聞きませんでした。

その結果、アッシリアという国が攻めてきて町は壊され、家は焼かれました。人々は敵の国に連れて行かれ、また神様を信じない多くの外国の人たちが来て、町は占領されてしまいました。

もう神様はイスラエルのことを忘れてしまったかのような、希望のない暗い時代でした。

2. 大いなる光の約束

そんな暗い時代の中で「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた」という約束の言葉が与えられました。

この約束はいつ実現したのでしょうか。光としてこの世界に来てくださったイエス様がお生まれになったときです。

「異邦人のガリラヤは栄光を受ける」（イザヤ書8章23節）と書いてあります。この御言葉のとおり、イエス様はガリラヤの町ナザレでお育ちになりました。

このすばらしい約束は、イエス様がお生まれになる700年も前にすでに与えられていたのです。

3. 闇から何を想像しますか？

少しの明るさもない、本当に真っ暗な闇を経験したことがありますか。自分がどこに立っているのか、どちらを向いているのかさえわかりません。だんだん不安になってきます。恐くなってきます。ここでいう闇とは、私たちの中にもある闇のこと

です。憎しみ、悲しみ、怒り、争い、孤独、絶望、飢え、暴力、無関心などです。これらを生み出す最大の闇が罪です。

4. 闇に打ち勝つ光

闇と光はどちらが勝つと思いますか。どんなに小さな光でも、闇に打ち消されてしまうことはありません。闇は光に勝つことができないからです。

罪という暗闇の中に住む私たちの世界に、真の光としてイエス様は来てくださいました。闇を打ち滅ぼすためです。

5. あなたの心の闇を照らしてくれるイエス様

あなたはこの世界を見るとき、どんな闇を感じますか。あなたの心の闇を照らすためにイエス様はこの世に来てくださいました。

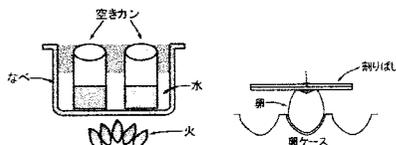
「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」（ヨハネ8章12節）

6. クリスマスエッグキャンドルを作るう**準備するもの**

ローソク、クレヨン（口紅）、卵、卵のケース、空き缶、（缶詰など）、割り箸

作り方

- ①卵の先端に穴をあけて中身を取り出し、内側を洗って半日ほど乾かしておく。
- ②空き缶に短く折ったローソクを入れ、湯せんにかけて溶かす。（一つの缶に1色）
- ③ロウが溶けたらローソクの芯を取り出し、まっすぐに伸ばしておく。
- ④溶けたロウにクレヨン（口紅）を削って入れ、色をつける。（少しでよい）
- ⑤卵のケースに卵の殻をのせ、中に溶けたロウを流し込む。
- ⑥③のロウの芯を割り箸にはさみ、（割り箸は割らずに使う）真中に芯が立つようにする。
- ⑦1時間ぐらい固まるまでそのままにしておく。（殻をむいて、できあがり）



〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に……

★参照カテキズムとして、子どもカテキズム問
21が挙げられています。

問21 神さまは、あなたもほかの人も、罪人を滅
びるままにお見捨てになりましたか。

答 いいえ、ちがいます。

神さまは、神の民となるように 最初から
私たちを選んでくださいました。罪から救
い出してくださいるあがない主を与えてくだ
さったのです。

★同じ内容をウェストミンスター小教理問答では
次のように告白しています。

ウェストミンスター小教理問答

問20 神は全人類を、罪と悲惨の状態のうちに滅
びるままにされましたか。

答 神は、全くの御好意によって、永遠の昔か
ら、ある人々を永遠の命に選んでおられた
ので、彼らと恵みの契約を結ばれました。
それは、ひとりのあがない主によって、彼
らを罪と悲惨の状態から救助して、救いの
状態に入れるためです。

〈今週の聖書日課〉

イエスさまが光であられることを記している聖
書箇所を集めてみました。

日曜日	イザヤ9:1
月曜日	マタイ4:12～17
火曜日	ヨハネ1:4～9
水曜日	ヨハネ8:12
木曜日	マタイ5:16
金曜日	エフェソ5:8～14
土曜日	ルカ2:25～32

テキスト ルカによる福音書2章1～7節

〈時満ちて〉

神様の御子イエス様は、ローマの初代皇帝アウグストゥス（オクタヴィアヌス）の時代に、旧約の預言通りに、ユダヤのベツレヘムというダビデの町で、ダビデの子孫の一人ヨセフのいいなづけマリアからお生まれになりました。イエス様がお生まれになった時代は、「ローマの平和」（パックス・ロマーナ）の時代と呼ばれています。神様は、全世界の諸民族を罪と滅びから救うため、摂理の御業によって、時代状況を全世界の救い主を遣わすのにふさわしい状況へと整えられたのです。『キリスト教史』のウォーカーは、この当時の一般的な状況を次のように述べています。—全てがただ一人の皇帝への忠誠と皇帝に従属する統一された軍隊組織によって結合していた。その軍事力による平和の下、商業が栄え、交通は優れた陸路や海路によって容易となり、少なくとも大都市の教養ある人々の間では、共通の言語であるギリシア語が思想の交流を助長した。さらにローマは、皇帝と軍隊による統一を保ちながらも、地方の諸制度を押しつづすことはしなかった。属州の住民は、ある程度自治を認められたし、宗教上の慣行も尊重された（ウォーカー著『キリスト教史・1・古代教会』、PP.18－19）。

〈ローマの皇帝による支配の下へ〉

神様は、摂理の御業によって、時代状況を全世界の救い主を遣わすのにふさわしい状況へと整えられたのですが、ローマ皇帝による支配に対抗するような形で、イエス様による御支配を始められたわけではありません。神様は、御子をローマ皇帝による支配の下へと送られたのです。その証拠に、イエス様の御誕生は、徴兵徴税のための住民登録の勅令に巻き込まれる中で起こりました。著者のルカは、歴史家にふさわしく、皇帝アウグストゥスの時代をさらに限定して、キリニウスがシリア州の総督であった時と述べています。ある資料に

よると、厳密にはキリニウスはその頃は総督でなく、軍事指導官だったとのことですが、大事なことは、皇帝や総督といったこの世の支配者の中で、神様の御子の御降誕が起こったということです。主メシアの御降誕は、『ミカ書』により、ベツレヘムと予告されていましたが（5:1）、この預言は、ヨセフと身重のマリアが勅令に従って、ヨセフの先祖ダビデの町ベツレヘムへと行くことで、成就したのです。このような御降誕を巡る状況に、神様の御子のへりくだりをまず見ることが出来ます。

〈飼い葉桶の中へ〉

聖書研究の際に必携の『ウェストミンスター小教理問答』は、問27で、神様の御子のへりくだりの状態に関して次のようにまとめています。

「問27 キリストの低い状態とは、どの点にあったか。答 キリストの低い状態とは、彼が生まれられたこと、しかも、貧しいさまに生まれられたこと、律法の下におかれ、この世の悲惨と神の怒りと十字架ののろいと死とを忍ばれたこと、葬られてしばらくの間、死の力の下にとどまられたことにあった」（信仰規準翻訳委員会訳、波線は筆者）。

神様の御子イエス様は、住民登録で町の宿屋が混雑する中、宿屋以外の場所でお生まれになり、布にくるんで飼い葉桶に寝かせられたのです。この飼い葉桶から、イエス様がお生まれになったのは、馬小屋と言われますが、場所はとにかく、イエス様が最初に寝かせられたのが、馬や羊の飼料用の桶だったことを心に留めるべきです。しかし、神様の御子が取えてこのような貧しさ、惨めさを引き受けて下さって、へりくだられたことで、栄光の神様が、罪に汚れた私たち人間と共にいて下さる、インマヌエルの道が始まったのです。

（長谷川 潤）

テキスト ルカによる福音書2章1～7節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問22

〔単元のねらい〕

クリスマスの喜びを、深く子どもたちに伝えたい。毎年のように訪れるクリスマス。しかし、それぞれのクリスマスは、独自の恵みと喜びを伝える。つまり教会暦は、くり返されることによって古びるのではなく、くり返されるごとに更新される。このテキストはまず、主イエスの誕生に備えるために、主の両親ヨセフとマリアが、どれほどの苦難を引き受けたかを伝える。私たちにとても、クリスマスに備える心は、高らかな喜びとそれを支える深い祈りが求められる。子どもたちにも、クリスマスの恵みと喜びを黙想する機会をもってほしい。このテキストの痛切な響きは、飼い葉桶に寝かされる幼児の姿で頂点に達する。神が、これほどの深さに身を沈めて、私たちを招いておられるのである。

「神さまのおくりもの」

(1)今日はクリスマス礼拝です。みなさんは、これまで何度、クリスマスをお過ごしでしょうか。わたしは〇〇回のクリスマスをお過ごししてきましたが、どのクリスマスもけっして同じではなかったと思います。クリスマスに感じる喜び、クリスマスのときにどんな恵みを神さまから学べるか、そしてクリスマスにもらった贈り物によっても、毎年、少しずつ違うクリスマスを、私たちはお祝いしているのですね。

それでは、世界ではじめてのクリスマスは、どんなクリスマスだったのでしょうか。まだだれ一人「クリスマス」のことを知らなかったのです。そのときまで、世界には「クリスマス」というものがなかった！クリスマスのない1年、クリスマスのない世界。そんなことを想像できるでしょうか。

イエスさまのお父さんお母さんになるヨセフとマリアは、自分たちが住んでいるナザレから、何日も旅をして、ベツレヘムまでやってきました。広いローマの世界のすみずみまで、人口の調査をせよ、という命令が出たのです。ユダヤの人びとも、この命令には逆らえません。マリアは、神さまの霊によって子どもを身ごもっています。もうすぐ赤ちゃんが生まれるのです。赤ちゃんが生まれたら、その子を「イエス」と名付けることも、神さまから教えられていました。ナザレからベツ

レヘムへの旅は、どんなに大変だったことでしょうか。マリアは、自分で歩くことはできず、ロバのような小さな動物の背で、ゆられながら、心細くつらい旅をしなければなりません。ヨセフもマリアも、まだとても若い二人でしたから、その心細い気持ちは、きっと私たちの想像以上だったことでしょうね。

(2)ようやくベツレヘムに着きました。でもベツレヘムには、大勢のユダヤの人びとが集まっています。二人を泊めてくれる宿屋は、どこにもありません。「どうかお願いします、小さな部屋でけっこうですから、泊めてください。もうじき赤ちゃんが産まれるんです」。必死の叫びにも、耳を貸してくれる人がいません。とうとうマリアは、赤ちゃんを産みました。赤ちゃんを寝かせる場所がありません。「布にくるんで飼い葉桶に寝かせた」。イエスさまは、いったいどこで生まれたのでしょうか。この「飼い葉桶」は、マリアを乗せたロバのような動物のために、ナザレから運んできた桶なのでしょう。どこかに、風や人目を避けるために粗末なテントをはったか、どこかに窪みを見つけて、小さな飼い葉桶に赤ちゃんのイエス様を寝かせたのでしょうか。

ベツレヘムに、ヨセフとマリアを泊めてあげる宿屋が、ひとつもなかった。そのことは、私たち

の心を暗くします。はじめてのクリスマスは、とても淋しいクリスマスでした。イエス様の誕生を祝う人は、まだどこにもいなかったのです。神の子イエスさまの誕生を、心から感謝してお迎えする準備をしている人は、ベツレヘムの村にいなかったのです。では、私たちはどうでしょうか。クリスマスを迎える準備はできているでしょうか。

(3)クリスマスを迎える準備。それは、私たちの心にイエス様をお迎えする準備のことです。イエス様は、天の父である神さまの独り子ですから、美しい宮殿の飾り立てたベッドで生まれても、すこしも不思議ではありません。でもイエス様は、金や銀や宝石の飾りのついた、豪華な寝室に生まれようとはなさいません。そうではなく、イエス様が願うのは、私たち一人一人の心に誕生することです。イエス様は、私たちの心に生まれ、私たちと一緒にいることを、何よりも願っておられます。

ベツレヘムの宿屋が、どこもイエス様とその家族を、喜んでお迎えできなかったこと。それは、じつは私たち人間の罪の心を、あらわしています。イエス様などいらない、神さまの愛などいらない……。そういう冷たい心が、罪の心です。「イエス様、どうか私の心の中に来てください。そして私の心に生まれてください。いつでも、どんなときでも、私から離れずに、私の救い主になってください」。そのようにお願いするとき、私たちの心が、イエス様誕生の「宿屋」になります。そのように祈るとき、私たちも、イエス様と同じように、神さまの子どもにさせていただけるのです。

(4)小さな飼い葉桶に生まれてくださったイエス様。貧しい姿の、小さな赤ん坊です。救い主は、こんなに小さな、こんなに貧しい姿で、私たちのところに来てくださったのです。赤ちゃんは、自分ではまだ何も言えません。だれが近づいてきて

も、追い出すことも拒むこともできません。つまりイエス様は、だれでも安心して近づくことのできる救い主です。だれでも、なにも心配せず、用心しないで、イエス様に近づくことができます。心配しないで、安心して、このイエス様のところに来なさい！それが、クリスマスのときに、神さまが私たちを呼んでくださる声です。私たちも、小さい子どもです。神さまは、小さく弱い私たちを救うために、イエス様を、小さく貧しい救い主として、私たちに与えてくださいました。

まどみちを というクリスチャンの詩人がおられました。「ぞうさん」などの歌で有名です。「ぞうさん ぞうさん おはながながいのね ぞうよかあさんも ながいのよ」。

まどさんの、「ぼくがここに」という詩を紹介します。

ぼくがここにるとき／ほかのどんなものも
／ぼくにかさなって／ここにすることはできない
／もしゾウがここに居るならば／そのゾウだけ
／マメが居るならば／その一粒のマメだけしか
／ここにすることはできない／ああ このちきゅうでは
／こんなにだいに／まもられているのだ
／どんなものが どんどころに／いるときも
／その「いること」こそが／なににもまして
／すばらしいこととして。

ちょっと難しい？ 大きなゾウも小さなマメも、そこにいてだけで大切にまもられる。それは、神さまの大きな愛です。神さまは、小さな私たち、弱い私たち、さびしい私たち、ひとりぼっちの私たちを、愛してくださいます。私たちのために、大切な独り子イエスさまを、飼い葉桶の赤ちゃんとして与えてくださるほどに、私たちを愛してくださいました。小さく弱い私たちが、安心してイエス様を信じることができる。それがクリスマスです。(小野静雄)

[今週の暗唱聖句] ルカによる福音書2章6～7節

マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。

〈分級では〉

待ちに待ったクリスマスです。本当に喜ばしい救い主を讃える時期ですが、子供たちは教会のクリスマスよりもこの世の形作られたクリスマスの方に興味をひかれがちです。毎年の事ながら、やはり教会でお祝いする意味、そして本当の喜びを子供たちに伝え、一緒に感動できるように祈り求めましょう。きらびやかな飾りよりも、当時の貧しい様子を少しでも再現すると、子供たちの興味をひき、スムーズにお話へ導くことが出来るかもしれません。

〈分級のねらい〉

この世の価値基準からしたら何の喜ばしい出来事もなく、むしろみすばらしく貧しい状況です。私たちの罪に沈んだ心を映し出しているかのような状況です。そこにイエス様は誕生したのです。

そして私たちのその状況を一変し、救いの喜びと感謝で満たしてくれたお方です。

この本当の喜びを子供たちに伝えるには、まず私たちの心をイエス様誕生の舞台の「宿屋」にする必要があります。イエス様が誕生できるように、この心を貧しいものにし、喜びで満たされるように願い求めましょう。そして子供たちの心を次々と「宿屋」に変えていただくように主に祈りましょう。

〈おいのり〉

イエス様、私たちの心の中で誕生してくださって感謝いたします。この喜びをまだ本当のクリスマスを知らないお友達に伝えることが出来ますように、これからもあなたと共に成長していくことが出来ますようにお導きください。

〈やってみよう〉**イエス様がみんなの心の「宿屋」に誕生！****目的**

その当時の過去のこととして、ベツレヘムでお生まれになった遠い存在のイエス様ではなく、私たち一人一人の心の中で、救いを与えるためにお生まれになったものとして、身近なイエス様を表現する。

準備するもの

クレヨン、色鉛筆など（絵が描ける物）、紙、ゴミ袋、テープ、はさみ

手順

- ①教師が紙に赤ちゃんイエス様を描いて用意しておく。
- ②紙に飼い葉桶を描く（その飼い葉桶の中に、今までつらいことや意地悪したことを書ければ、その言葉を書く）。
- ③ゴミ袋にはさみで三箇所穴を開け、子どもたちがそれを着られるようにする。
- ④飼い葉桶を描いた紙をそのゴミ袋にテープで貼り、そのゴミ袋を着る。
- ⑤教師たちは、その子どもたちの描いた飼い葉桶の中央に赤ちゃんイエス様を貼り付ける（言葉が書いてあれば、それが隠れるように貼る）。

〈ねらい〉

世界で最初のクリスマスであるイエス様のお誕生は、決して、豪華できらびやかな場所で行われたものではありません。イエス様は薄暗い、汚い家畜小屋の飼葉桶の中でお生まれになりました。しかし、なぜ、神の子であるお方がそのような場所でお生まれにならなければならなかったのでしょうか。子供たちと一緒に考えましょう。

〈展開例〉

1. イエス様がお生まれになった時のローマ皇帝の名前は何か。

→ (1節)

2. マリアとヨセフが住民登録をするため、どこに向かって旅立ちましたか。

→ (4節)

3. マリアはイエス様をどこで産みましたか。

→ (7節)

4. どうしてイエス様はそんな所で生まれなければならなかったのですか。

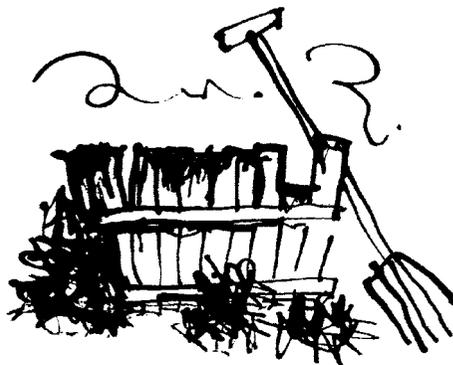
→直接的な原因は宿屋に泊まる場所がなかった

ことです。しかし、神の子であるイエス様がそのような場所でお生まれになったのは、わたしたち人間のすべての苦難や貧しさをお引き受けになるためでした。子供たちと共に、ただ賑やかで、楽しいだけのクリスマスではなく、クリスマスとはイエス様がわたしたちのために貧しさの極みにまで降ってくださった出来事でもあるということ覚えましょう。
→また、戦争や迫害といった苦難の中でもこのクリスマスを通して世界の子供たちのためにも、イエス様の平和が与えられるよう共に祈りましょう。

〈おいのり〉

愛する天の神様。イエス様のお誕生を心からお祝いします。イエス様はわたしたちの罪や、苦しさ、貧しさをすべて引き受けるために飼葉桶の中でお生まれになりました。どうかこのクリスマスの時、このようなイエス様の苦難を覚えさせてください。

また、今も世界のいろいろな場所で戦争や暴力、迫害によって苦しんでいる子供たち、悲しんでいる子供たちの上にも、イエス様の平和が与えられますように願い、祈ります。



宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである

〈ねらい〉

救い主を心にお迎えする。

〈展開例〉**1. 導入**

お家に特別なお客様がいらっしゃる時、どんな準備をしますか。きれいにお掃除をしたり、お花を飾ったり、お料理やお菓子を用意したりして迎える準備をしますね。そしてお客様が来られるのを今か今かと待ちます。

毎年私たちはクリスマスを迎えます。どのような備えをもってイエス様をお迎えしたらよいでしょうか。

2. イエス様がお生まれになった場所

イエス様がお生まれになったのは家畜小屋でした。ふかふかのベッドもありませんでした。救い主が初めて寝かされたのは、動物のえさを入れる飼い葉桶でした。

王様の子供が生まれるときには、立派な部屋やきれいなベッドが用意されます。でも神様の御子であるイエス様がお生まれになったのは、赤ちゃんが生まれるにはふさわしくない、臭くて不潔な家畜小屋でした。

3. 救い主のしるし

しかし、この「飼い葉桶の中に寝ている赤ちゃん」こそ、救い主のしるしでした。(ルカ2章12節) 家畜小屋は神の御子、救い主がお生まれになるにはあまりにも粗末な場所です。しかし、飼い葉桶に眠るイエス様の姿は、その方がどのような救い主なのかを私たちに教えてくれます。

弱い立場にある人、みんなから嫌われている人、ばかにされている人、貧しい人、無視されている人、そういう人々の心の傷みを知る友となるために、イエス様は生まれてくださいました。

飼い葉桶に眠るイエス様は、まさにそのような貧しい者の友となってくださる救い主のしるしでした。

それはまた、罪の世界に神の御子をおおくりくださった、神様の愛のしるしでもあります。

「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで永遠の命を得るためである。」(ヨハネ福音書3章16節)

4. イエス様を心からお迎えする

外から帰ってきたときに、鍵がかかっていて入れなかった経験はありませんか。自分の家なのに入れないのは悲しいものです。

「言葉は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。」(ヨハネ福音書1章11節)

私たちの心の中にイエス様をお迎えする部屋は用意されていますか。「どうぞ私のところにお泊まりください。私の救い主となってください」とイエス様を受け入れる準備はできていますか。

イエス様があなたの心の中で生まれてくださり、あなたの心に住んでくださるとき、神様はあなたを神の子としてくださいます。

「しかし、言葉は、自分を受け入れた人々には神の子となる資格を与えた。」

(ヨハネ福音書1章12節)

「イエス様、私はあなたを必要としています。あなたが、私の罪を背負って十字架で死んでくださったことを感謝します。今、あなたを私の救い主としてお迎えします」と祈りましょう。

神様は独り子イエス様を、なくてはならないおくりものとして私たちに与えてくださいました。だからクリスマスはうれしいのです。

5. 紙皿でステンドグラス風の飾りを作る

120ページを参照してください。

〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に

★参照カテキズムとして、子どもカテキズム問22が挙げられていますが、12/3にも出てきますので、そちらを参照してください。

★聖書研究のページにウェストミンスター小教理問答の問27が挙げられていますので、今日はこれに取り組みたいと思います。

ウェストミンスター小教理問答

問27 キリストのへり下りは、どの点にありましたか。

答 キリストのへり下りは、次の点にありました。キリストが生まれられたこと、それも低い状態であられたこと、律法のもとに置かれたこと、この世の悲惨と神の怒りと十字架のろいの死とを忍ばれたこと、葬られたこと、しばらく死の力のもとに留められたことです。

★この問答の榊原訳は、「へりくだり」を「へり下り」と記しています。本来の漢字は「謙り」「遜り」（「謙遜」は「謙」も「遜」も「へりくだり」と読むのですね）のようですが、それを「へり

下り」と記しているのは間違いではないかと、榊原先生の漢字の知識を疑う方が少なくないようです。しかし、イエスさまの「へりくだり」は単なる「謙遜」ではなく、やはり「天から地に降ってこられた」という、上から下へという方向性があるわけですから（エフェソ4:9参照）。それを、ごちゃごちゃと訳すのではなく、「へりくだり」という言葉の中に「謙遜」の意味と「下る」という意味を盛り込んだためにそういう表記になったと考えるべきではないでしょうか。第21号のコラムで記したように、カテキズムが聖書を凝縮した詩だ、ということを出すならば、榊原先生のなさったことは、三十一文字に意味を込めて短歌をつくるような、そういう「詩人の工夫」だったのではないのでしょうか。

〈今週の聖書日課〉

日曜日	ルカ2:1～7
月曜日	ガラテヤ4:4～5
火曜日	ヘブライ12:1～3
水曜日	イザヤ53:1～3
木曜日	フィリピ2:6～8
金曜日	ローマ8:38～39
土曜日	ヨハネ3:16

〈エルサレム神殿での神の子・少年イエス〉

神様の御子イエス様が12歳の時の記事です。ユダヤでは、男子13歳となると成人となりますが、神様の律法で求められている義務を忠実に果たすことが必要となります。両親は、イエス様に成人となる準備教育を施すために、過越祭を祝いに、イエス様を伴ってエルサレムの神殿に参りました。過越祭は除酵祭と併せて1週間続きます。その期間が終わって、両親は他の巡礼者と一緒になザレに戻ろうとしました。来年には成人を迎えるイエス様のことで、両親は、イエス様がそばにいても、ナザレに戻る一団の中に当然いるものと思って、エルサレムを出発したのですが、一日分の道のりを行った時に、息子がいないことに気づいたのです。両親は、あちこち捜したのですが見つからないので、エルサレムへと引き返しました。そして、三日間も捜し回ったのですが、両親からすれば、まさかと思うところにイエス様はおられたのです。イエス様は、神殿の境内で、律法学者たちと対話をしていました。47節に人々がイエス様の受け答えを聞いて、驚いている様子が記されていますが、ここは、正気を失うほどに驚いた様子が記されています(岩波訳)。まだ成人していない、12歳の少年が、神様の律法に関して抜群の知恵を持っていたからです。やっとのことでイエス様を見つけた両親は、イエス様が身分をわきまえずに律法学者と対話をしているので叱りました。そんな両親に対してイエス様がおっしゃるのが49節です。

「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」。

この御言葉の意味を両親が理解できないの当然でしょう。しかし、この御言葉には、イエス様がどのような御方なのかがはっきりと示されています。エルサレム神殿がイエス様の御父の家とおっしゃいますから、イエス様御自身は、神様の御子

でいらっしゃるということになります。

〈へりくだりの神の子〉

ところが、神様の御子は、人間と同じように、成人して律法の義務に忠実に応えるための準備にあずかって、両親と共にエルサレム神殿に参って、過越祭をお祝いされたのです。そして、ナザレに戻られてからも、いつものように両親に仕えて生活なさいました。両親に仕える生活は、生活の規準としての十戒の第五の律法、「あなたの父母を敬え」(出エジプト20:12)に従う生活と言えるでしょう。そうしますと、イエス様は、神様の御子でいらっやって、本来は、父なる神様と同じように律法を超えてそれを付与する立場にありながらも、敢えて律法の下に歩まれたということになります。聖書研究の際に必携の『ウェストミンスター小教理問答』問27で確認しましょう。

「問27 キリストの低い状態とは、どの点にあったか。答 キリストの低い状態とは、彼が生まれたこと、しかも、貧しいさまに生れたこと、律法の下におかれ、……」(波線は筆者)。

イエス様は、律法の下で、律法に忠実に歩まれることで、知恵がさらに増して、神様と人々に愛されて成長なされたのです。神様と人々に愛されたのは、何よりも、イエス様が律法に忠実に歩まれたからです。この神様の御子イエス様のへりくだりによって、私たちが律法の呪いから解放されることが起こったのです。つまり、私たちは、神様に義とされるために律法に忠実に歩もうとすればするほど、かえって罪を重ねてしまい、神様からの呪いを受けるしかありません。ところが、イエス様が私たちのために律法に忠実に歩んで下さったことにより、つまり、思いと言葉と行いにおいて律法に完璧に服従して下さったことにより、イエス様の義が私たちのものと見なされ、私たちが神様と共に歩むことのできる道が与えられたのです。(長谷川 潤)

テキスト ルカによる福音書2章41～52節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問31、35

〔単元のねらい〕

神の子として誕生された主イエスが、少年時代をどのように過ごされたか。正典のなかで、イエスの成長の様を伝えるほとんど唯一の資料。ここに描かれたイエス像は、一人の人間として普通の成長を遂げつつある少年である。両親に心配をかけている少年イエス。しかし、そのような少年を、自由に伸び伸びと育て、ヨセフとマリアの家庭教育のありさま。主イエスは、明らかに、人間としての通常の成長過程を踏んで、「神と人に愛される」人として健やかに成長しておられる。しかも、主イエスは、神の言葉に対する理解と確信を深め、自分のまことの父が誰であるかを確信するまでに、霊的に成長を遂げている。まことの人、まことの神。12歳のイエスの成長の断面を切り取って、「まことの神、まことの人」としての救い主の実像を見事に描く。子どもたちにとっても、神と人に愛される主イエスへの、親愛と敬愛の情を学ぶためにかけがえのない単元である。

「迷子になった子ども」

(1)迷子になった子ども。それがイエス様のことです。イエス様が迷子になった。そんなこと、ちょっと信じられないですね。でもほんとうのことです。皆さんは、迷子になったことがあるでしょうか。迷子になると、とても心細いでしょうね。迷子の子どももつらい。でも迷子の子ども、お父さんやお母さんも、とても心配でつらいことでしょう。

イエス様が12歳のときのことが、聖書に書かれています。12歳は、いまなら小学校6年生です。むかしのユダヤでは、12歳は、子どもから大人になる境目の年齢です。いまならば、15歳から18歳ぐらいの年齢でしょうか。中学から高校ぐらいのときです。そういう年齢のときには、お父さん、お母さんも、子どもをどうして育てるかとても悩むことが多いのです。そして子どもの方でも、自分のことをどうしたらよいか、分からないことが多いのです。どんな勉強をするか。友達とどんなに付き合うか。これからどんな自分になればいいか。あれもしたい、これもしたい、でもまだ自分にはなにもできない……。だから悩みます。そして親とぶつかります。

(2)イエス様の両親は、毎年、過ぎ越しの祭には

エルサレムに旅をしました。ナザレからエルサレムまでは、三日ぐらいの旅路です。エルサレムに神殿があり、そこで神さまを礼拝するのが、この旅のいちばん大切な目当てです。大勢の人びとと一緒に旅をしました。

神殿で礼拝し、家に帰ります。ところがイエス様は、エルサレムに残っていました。両親は、イエス様がみんなと一緒にいるものと思っています。マリアは、「イエスはもう大人の仲間入りをしてよい歳だから、お父さんと一緒にいるだろう」。ヨセフはヨセフで「息子はまだ子ども。マリアと一緒に歩いているだろう」。それぞれ思っていました。ところが、一日歩いて、夜、テントを張る時間になって、イエスがいないことが分かったのです。あわてて捜しながら、どうとうエルサレムまで戻ってきました。

エルサレムは、過ぎ越しの祭の最中です。ふだんの10倍もの人が集まります(60万人とも言われる)。人、人、人の波。万国博覧会や、ディズニールランドに行った人なら分かるでしょう? 迷子になったら大変です。ようやく三日目に、イエスを見つけました。神殿の中で、学者たちに囲まれていました。先生たちの言葉を聞き、質問していま

〈ねらい〉

イエス様の少年時代に出会うことは、子どもたちにとって、とてもうれしいことです。幼稚科の子どもたちにとっては、お兄さんのようなイエス様。イエス様へのあこがれの気持ちを持って、わくわくどきどきしながら語りましょう。「お父さん（父）」という言葉有神様とヨセフとに使うと、幼児は混乱するかもしれません。語る前に、よく準備して、「父の家」という言葉をわかりやすく伝えるよう、こころがけましょう。

〈展開例〉

このあいだは、クリスマスでしたね。クリスマスは誰の誕生日だっけ？ そう、イエス様のお誕生日でした。みんなでお祝いできて、よかったね。クリスマスに、イエス様は赤ちゃんとしてお生まれになりましたね。赤ちゃんは、大きくなると、そのうち、はいはいして、歩けるようになって、みんなのように、いっぱい遊んで、それから学校に行ってお勉強もするようになりますね。

12歳の時、イエス様は、お父さん、お母さんと一緒に、過ぎ越しの祭りにエルサレムまで行きました。お祭りにはたくさんの方が来ていて、帰るときに、お父さんとお母さんは、イエス様と離れてしまいました。みんなは、まいごになったことがあるかな。まいごになると、とっても悲しい気持ちになるよね。子どもが迷子になると、お父さん、お母さんもとっても心配します。イエス様のお父さん、お母さんもすごく心配して、朝も夜

もずっと探しました。そして、イエス様が、やっと見つかりました。

イエス様は、神殿で、イエス様は先生たちに神様の話を聞いたり、質問したりして、お勉強してたんだった。そのあと、一緒にお家に帰って、お父さん、お母さんに仕えて暮らしました。

イエス様も、みんなのように、神様を礼拝したり、神様のことをいっぱいお勉強したんだね。神殿のことをイエス様は、天のお父様、神様のお家だとおっしゃいました。みんなも、一年間よくがんばって神様のお家、教会にきましたね。神様、イエス様が喜んでくださってますよ。来年も、続けて教会に来ましようね。

〈おいのり〉

かみさま、お兄さんのイエス様のよう、神様を礼拝し、神様のことをいっぱいお勉強して、イエス様のようになれるよう、助けてください。一年間、守ってくださいありがとうございます。新しい年も、続けて教会に来られるように、守ってください。イエス様のお名前によっておいのりします。アーメン。

〈やってみよう〉

この一年の恵みを、わかちあいましょう。うれしかったこと、たのしかったことは何かな？ 思い出せるよう、一年間のCS行事の写真などを用意できるといいですね。



〈ねらい〉

イエス様は神の子ですが、真の人間として、わたしたちと同じように母親の胎から生まれ、少年時代を過し、そして成人なされたお方です。イエス様にも子供たちと同じような少年時代があったのだということを、子供たちに伝えることによって、イエス様への親しみを深めさせたい。

〈展開例〉

1. イエス様が過越祭を祝うために、両親とエルサレムに行かれたのは、何歳の時ですか。
→毎年行われていた過越祭の意味と、その習慣についても簡単に説明すると良い。
2. 家に帰る途中、イエス様の両親はイエス様がいなことに気づき、ビックして探しました。この時、イエス様はどこで何をしておられましたか。
→ (46節、47節参照)
3. 神殿で発見されたイエス様に母マリアは何と言いましたか。また、それに対してイエス様は何とお答えになりましたか。
→ (48節、49節参照)
4. イエス様は両親にどうしてそんな答えをな

されたのでしょうか。

→この言葉には、イエス様が真の神の御子であるという告白があります。イエス様は既にこの頃から自分が天の神の子であるとの自覚を持っておられました。もちろん、両親はこの時、イエス様のおっしゃった言葉の意味が分かりませんでした (50節)。しかし、母マリアはこの出来事やイエス様の言葉を拒否するのではなく、心に納めていました。

5. イエス様は小さい時どんな子供だったのでしょうか。
→ (51節、52節参照) 子供たちに自由に語らせてください。

〈おいのり〉

愛する天の神様。この一年も神様がいつも一緒にいて守ってくださいましたことを感謝します。イエス様が神様と人に愛されて成長なされたように、わたしたちも神様の子供としてイエス様のようにな成長できますように導いてください。イエス様が小さい時から聖書の御言葉を学ばれたように、わたしたちも日曜学校の礼拝で聖書の御言葉を聞き、学ぶことができますように導いてください。



どうしてわたしを捜したのですか
わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということ
を、知らなかったのですか

〈ねらい〉

イエス様は子供たちと共に歩んでくださる。
(少年の頃のイエス様の生き方から学ぶ)

〈展開例〉**1. 人として成長されたイエス様**

イエス様は神の御子であったにもかかわらず、私たちと同じ人間の姿をとってお生まれになりました。それも歩くことも話すこともできない、弱く小さな赤ちゃんの姿で。

イエス様にも、おむつをしていたときや、ハイハイをしていたとき、歩き始めたときがありました。私たちが大きくなるのと同じように、少しずつ成長していかれました。ごはんを食べて、たくさん遊んで、お母さんにいろいろなことを教えてもらって大きくなっていきました。

「幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた」と書いてあります。(2章40節)

2. 神の子であることを知っておられたイエス様

今日のお話はイエス様が12歳のときのことで、皆さんと同じような年齢です。

でもここには、私たちとは全く違う、少年イエスにしか語れない言葉が書いてあります。それは、ご自分が神の子であることをはっきりと知っておられたということです。

マリアが神殿でイエスを見つけて「なぜこんなことをしてくれたのですか」と叱ったとき、少年イエスはこう答えられました。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」

イエスは親に反抗してこういったのではありません。イエス様にとって、神殿というご自分の父

の家にいることは、一番自然なことだったからです。

3. 両親に仕えられたイエス様

イエス様は神様の御子としてこの世に来られました。しかし、30歳になって神様の働きを始めるまでは、ヨセフとマリアの子供としてお過ごしになりました。イエス様は両親に心から従い、仕えられたのです。

お父さんやお母さんのお手伝いをしたり、弟や妹の面倒もみたことでしょう。

人として、子どもとして、少年イエスは両親を敬う大切さをご自分の生き方とおして私たちに教えてくださいました。

4. 少年イエスと私たち

救い主イエス様は、成長した大人の男の人としてこの世に来られたわけではありません。私たちと同じ赤ちゃんの姿で生まれ、だんだん大きくなって大人になってくださいました。

イエス様は少年の気持ちをよくご存じです。イエス様にも少年のときがあったからです。イエス様には罪がありませんでしたが、この世界のさまざまな苦しみ、悩みを人間の目とおして、少年の目をもって見てこられました。

イエス様は幼い子供たちや少年、少女たちの友として、いつもそばにいてくださいます。

イエス様は、私たちが神様と人に愛されるような子供として成長できるように、いつも助けてくださっているのです。

5. ディスカッションをしよう

① イエス様は本当に迷子になってしまったのでしょうか。

(迷子は自分の居場所がわからなくなった子供)

② イエス様にとって神殿とはどういう場所だったのでしょ。

〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に……

☆参照カテキズムとして、子どもカテキズム問31（子とされること、義認）、51（第五戒）が挙げられています。

☆第五戒についてのカテキズムを以下に記します。

ウェストミンスター小教理問答

問63 第五戒は、どれですか。

答 第五戒はこれです。「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである。」

問64 第五戒では、何が求められていますか。

答 第五戒が求めている事は、あらゆる人が目上、目下、対等といういろいろの地位と関係において持つ名誉を守り、義務を果たすことです。

問65 第五戒では、何が禁じられていますか。

答 第五戒が禁じている事は、あらゆる人がそのいろいろの地位と関係において持つ名誉と義務を、無視したり、それに反する何かを行なうことです。

ハイデルベルク信仰問答

問104 第五戒で、神は何を望んでおられますか。

答 わたしがわたしの父や母、またすべてわたしの上に立てられた人々に、あらゆる敬意と愛と誠実とを示し、すべてのよい教えや懲らしめには ふさわしい従順をもって服従し、彼らの欠けをさえ忍耐すべきである、ということです。

なぜなら、神は彼らの手を通して、わたしたちを治めようとなさるからです。

☆イエスさまは、12歳の時にすでに自分のいるべき場所についてはっきりとした認識がありましたが、それを理解できなかった両親と共に、エルサレムから「下って（ルカ2:51）」、ナザレに帰り、両親に仕えてしばらくの時を過ごされました。第五戒を守っておられたわけです。ハイデルベルク信仰問答の答の文言を、イエスさまを思いながら読むと、しみてきますね。

〈今週の聖書日課〉

日曜日	出エジプト 20:12
月曜日	エフェソ 6:1~13
火曜日	コロサイ 3:20
水曜日	箴言 23:22
木曜日	ペトロ 2:17
金曜日	ローマ 12:9~10
土曜日	ローマ 13:8

小学科上級展開例資料(1)

◇10月15日分

クイズ「わたしは誰でしょう」の問題文

(コピーして切り取り使用してもよい)

ペトロ

- ・わたしの昔の名前はシモンです。
(マタイ4章18節)
- ・わたしの兄弟の名前はアンデレです。
(マタイ4章18節)
- ・わたしの新しい名前はイエス様がつけてくださったもので、岩という意味です。
(マタイ16章18節)
- ・わたしはイエス様を知らないといって、3度も裏切ってしまいました。
(マタイ26章69～75節)

アンデレ

- ・わたしの兄弟の名前はペテロです。
(マタイ10章2節)
- ・5000人のパンの奇跡のとき、少年がパンと魚を持っていることをイエス様に話したのはわたしです。
(ヨハネ福音書6章8節)
- ・ペテロにイエス様を紹介したのはわたしです。
(ヨハネ福音書1章40～41節)

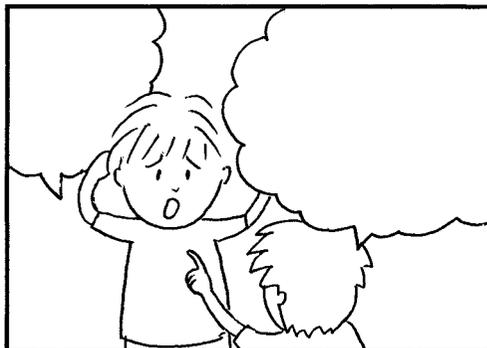
ヤコブ

- ・わたしの兄弟はヨハネです。(マルコ3章17節)
- ・イエス様はわたしたち兄弟に「雷の子」という名前をつけられました。(同上)
- ・ヘロデ王によって剣で殺されました。
(使徒12章1～2節)

ヨハネ

- ・わたしの兄弟はヤコブです。(マルコ3章17節)
- ・イエス様に洗礼を受けた人と名前が同じです。
(マルコ1章9節)
- ・わたしは福音書の一つを書きました。
- ・十字架の上でイエス様はわたしに「これからは母マリアの息子になるように」とおっしゃいました。
(ヨハネ福音書19章26～27節)

◇11月5日分



小学科上級展開例資料(2)

◇11月12日分

ペーパークラフトで家を作ろう

“Dragon’s Lair”というホームページのペーパークラフトを紹介します。

<http://ww2.enjoy.ne.jp/~tteraoka/pc/pc01.htm>を開いて、「ペーパークラフトを表示する」のところから印刷してください。

1. 切り取ってのりしろを折る。
2. 屋根の部分を半分に分けて、のりしろにのりをつけて貼る。
3. 煙突の部分は四等分に折って、三角にへこんでいる部分を屋根の先端に合わせて貼る。
4. 家の底の部分に別の厚紙を切って貼る。(家の床と同じ大きさにする)

さらに時間があったら……

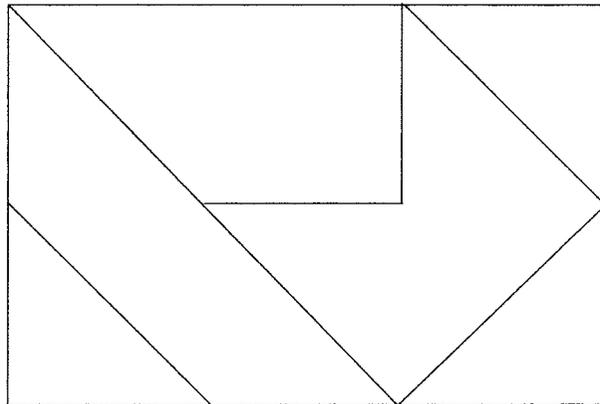
【砂崩しゲーム】

大きな菓子箱などに砂を山にして置く。そのてっぺんに作った家をのせて、少しずつ手やスプーンで砂をすくっていく。順番にやって家がひっくり返ったら負け。

◇11月26日分

タングラム

下の図を厚紙にコピーして切り取ります。(必要に応じて拡大してください)



上の図を切り取ったものを組み合わせて下のシルエットをつくりましょう(裏返しで使ってもいいです)

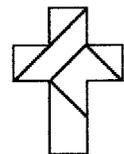


くびき



十字架

(答え)



小学科上級展開例資料(3)

◇12月24日分

紙皿でステンドグラス風の飾りを作ろう

“Kaboose”というホームページのクラフトを紹介いたします。

(準備するもの)

デザイン画をコピーしたもの

※デザイン画は下記のホームページからダウンロードしてください。

<http://www.kidsdomain.com/craft/sglass.html>を開いて、“Step 1 Print Patterns”の青い文字のところから、好きなデザインを選び、印刷してください。

そのデザイン画を直径13cmになるように拡大コピーして用います。

72dpi の場合は137%程度

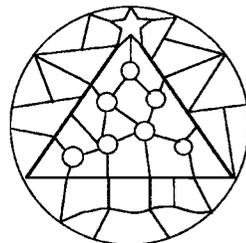
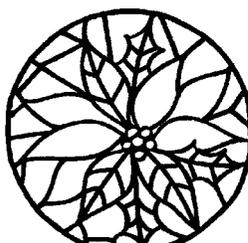
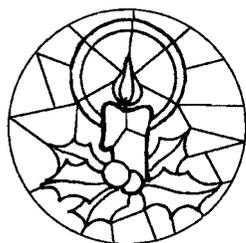
90dpi の場合は108%程度

パソコンとプリンタの設定によって多少異なる場合があります。

油性マジック（カラーと黒）、浅い紙皿（中、直径18cm）、アルミホイル、ラップ、セロテープ、つり下げの場合はリボンとパンチ

(作りかた)

1. デザイン画を一つ選んで拡大コピーし、それをテーブルにセロテープで四隅をとめる。
2. ラップを紙皿より一回り大きく切る。それを1のデザイン画の上ののせてテープでハカ所をとめる。そのときラップがしわにならないようにのぼしながら、デザイン画が中心にくるようにとめる。
3. ラップの上からデザインをなぞりながら、カラーのマジックで色を塗る。次に黒のマジックで線を描く。（ラップがやぶけないようにやさしく塗る）
4. アルミホイルを少し、くちやくちやにしてからのぼす。紙皿にアルミホイルをかぶせて、はみでたところは裏側に折り曲げておく。
5. ラップをとめているセロテープを破れないように気をつけてはがし、ラップについているテープは無理にはがさず、飛び出た部分を切る。
6. ラップを裏返しにしてテーブルに置き、その上に3の紙皿を裏返しにしてのせる。皿からはみ出たラップを折り曲げて紙皿の裏側にセロテープでとめる。
7. つり下げて飾る場合は上の方にパンチなどで穴をあけ、リボンを結ぶ。



第7課 祈る熱情

1. 理性と感情をもって祈る

神を知るとは、耳の中に神の言葉を納め、心の奥底にまでこれを沈め、膝をかがめ、目を輝かせ、口を開いて、神を拝し、たたえることにほかなりません。祈りにおいて、このすべてがあらわとなります。以下、『ジュネーヴ教会信仰問答』をたどりながら、祈りに求められる正しい感情の局面を見ることとします。

240から247にかけての問答では、祈る方法が詳しく展開されています。続く248～252の問答では、祈りが聞かれることの保証である、イエス・キリストの仲保の業の確かさが描き出され、次の253～294の問答では、「主の祈り」がていねいに解説されています。本問答の第三部「祈りについて」に、全部で63の問答が置かれているのは、著しいことです。

240の答では、理性と感情とが祈りに必要であることが明らかにされています。

241の答では、霊である神が常に心をお求めになることが指摘され、「感情なしに祈る人々を、神はすべて呪われるのであります」とまで言われています。

243は、「祈りには、どのような感情があるべきでしょうか」と問い、答では、次の二点に注目させます。

- ①自分の悲惨と貧しさを意識すること。
- ②神の前に恵みをえようとする熱烈な願いをもつこと。この願いが、われわれの心を燃やし、祈る熱情をわれわれの中に生み出す。

244の答では、神のみ霊が、神のお求めになる感情と熱意を形造ってくださることが明らかにされています。なお、祈りを導く聖霊については、第10課で取り上げることとします。

246の答では、祈りにおける舌の効用が述べられ、「心が熱してその熱意と激しさによって、思わず舌を動かして語らせることがしばしばあります」とまで言われています。

以上の個所に散りばめられているキーワードに

もう一度目を留めましょう——「感情」「熱烈な願い」「祈る熱情」「熱意」「激しさ」。

2. 祈る熱情

まず、243の問答を見ることとします。問「祈りにはどのような感情があるべきでしょうか」。答「第一に、われわれの悲惨と貧しさを意識することであって、この意識はわれわれの中に残念な思いと苦悶をひき起こします。次に神のみ前に恵みをえようとする熱烈な願いをもつことで、この願いがわれわれの心を燃やし、祈る熱情をわれわれの中に生み出すのであります」。

第一の悲惨と貧しさの意識は、第1課で学んだ窮乏意識と窮乏感覚です。この意識がひき起こす「残念な思い」（外山八郎訳）は、1937年の丸茂照義訳では、「悲哀」と表現されています。「悲哀」と「苦悶」をつなぐことによって、窮乏意識の度合いが明白にされています。窮乏感覚が研ぎ澄まされる度合いに比例して、神のみ前に恵みをえよう（丸茂訳では「獲よう」）とする願いは、「熱烈」の度合いを増します。この「強烈な願望」（丸茂訳）は、すぐさま、わたしたちの心を燃やし、祈る熱情を生み出すこととなります。

窮乏の意識が熱烈な願望へと結ばれていくことは、カルヴァンが、『綱要』3:20:6～7ですでに述べていたことでした。祈りの第二の法則を説明して言います——「それは、祈願にさいして、自分自身の窮乏を真に意識し、また求めるすべてのものにどんなに乏しいかを真剣に考え、それを得ようとの真剣な、いや燃えあがるような感情を、祈りそのものに結び合わすということである」。『綱要』初版（1536年）→『信仰の手引き』（1537年）→『ジュネーヴ教会信仰問答』（1542年）の関係を映し出す個所の一つと言えます。なお、『信仰の手引き』は、「第一のカテキズム」と呼ばれています。同書の23「祈祷について考慮されねばならぬことは何か」では、祈りが心の純粹な感情にはかならないことが明らかにされたうえで、自己の悲惨についての認識が、拍車のように、わたしたちをさらなる祈りへと励まし、刺激する、と

言われています。

祈る熱情の源泉について教えるのが、次の244の問答です。祈る熱情は、人に生来備わったものではありませんから、「神がそこに働いてくださることが必要であります。なぜならば、われわれはあまりにも愚かでありますから」。外山訳で、「愚か」とあるところを、1989年の渡辺信夫訳は「無感動」としています。愚かさの内実を言い当てたものと思います。自分の窮乏と悲惨について無感動であり、神の恵みについて無感動であるがゆえに、神の霊が働いてくださらないならば、祈りへと体の向きを定めることはできません。

神のお求めになる感情と熱意とを形造ってくださるのは、聖霊ご自身です。したがって、このような感情と熱意が感じられないときには、これを与えてくださることを主に求め、正しく祈ることが可能になり、ふさわしくなるようにしてくださることを主に嘆願するように、と続く245の問答は勧めています。1542年の本問答は、フランス語で出版され、1545年には、カルヴァンによるラテン語訳が、フランス文に添えて出版されました。このラテン語版を底本とする渡辺訳では、こう言われています——「……祈ろうとする心が備えられていないのを感じる時、信仰者は直ちに神に逃れて、祈るに相応しくする御霊の激しい火を我がうちに燃え上がらせて下さるように請い求めるのであります」。

3. 主に叫ぶ

『ジュネーヴ教会信仰問答』第二部「律法」から、第三部「祈り」へ移行するにあたって、連結器の役割を果たすのが、233の問答です。ここでは、律法によって、自分の貧しさと欠けとを認識する者は、あらゆる窮乏の中から、神に祈り求めるべきことが明らかにされています。この筋道は、本問答の構成を提示する問7で、既に明示されていました。

都に上る道で、神の民は歌って言いました——「深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます」（詩編130:1）。主を呼ぶその声は、まぎれもなく「嘆

き祈るわたしの声」でありました（2節）。嘆願は、「叫び」でありました（詩編88:2、14）。旧約の民の祈りの様式で特筆すべきものは、神に向かって叫ぶという激しさです。詩編107編には、「苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと／主は彼らを苦しみから救ってくださった」との表現が繰り返し現れます（6、13、19、28節）。これに並行するように繰り返されるのが、救いへの感謝の言葉です——「主に感謝せよ。主は慈しみ深く／人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる」（8、15、21、31節）。詩編を読むにあたって、「呼ぶ」、「呼び求める」、「叫ぶ」、「呼び求める」の語に目を留めるならば、神の民の気迫を感じ取ることができます。切迫感が祈りに活力を与えます。

詩編142編ダビデの詩から、切迫感に満ちたダビデの叫びを聞きましょう——「声をあげ、主に向かって叫び／声をあげ、主に向かって憐れみを求めよう」（2節）、「主よ、あなたに向かつて叫び、申します／『あなたはわたしの避けどころ／命あるものの地で／わたしの分となってくくださる方』」（6節）、「わたしの叫びに耳を傾けてください。／わたしは甚だしく卑しめられています」（7節）。カルヴァンは、詩編こそ祈りと賛美の手本であると言って、教会で詩編を歌うことを勧めました。詩編に並ぶ重要な模範が、主イエスの教えられた祈りの型、すなわち「主の祈り」です。

涙のパンを食べ、三倍の涙を飲むときにも、信仰者は万軍の神の力に依り頼み、勇気と希望とをもって救いを祈り求めます（詩編80編）。わたしたちの祈りは確かなかなえられると信じて、「国と力と栄えとは、限りなく、なんじのものなればなり」と告白するのに続けて、「アーメン」と唱えます。激しい熱意を込めて。

【宿題】 詩編31編を読み、ダビデが窮乏感覚を吐露している語句に注目しなさい。特に、10節の「嘆き」と「呻き」および23節の「叫び」と「嘆き祈るわたしの声」に留意しなさい。32編も読み「嘆きの叫び」（31:23）と「喜びの声」（32:11）を対比しなさい。（石丸 新）

第8課 祈る忍耐

1. 祈りをやめないダビデ

信仰者にとって、どれだけ真剣に願い求めても神からの答えが与えられないことは、何にも代えがたい苦しみです。そこから発せられるのが「いつまで、主よ」との呻きです。詩編13編で、ダビデが「いつまで」と四回も重ねているのは、特別のことと言わねばなりません（2～3節）。

神の時を待つのを耐えかねるように、ダビデは「速やかに」救い出し、助けてください、と祈り求めました（詩編70:2）。「すぐに」助けてくださいとも願いました（同38:23）。「急いで」助けてくださいとも言いました（同40:14）。

神を信じる者にとって、苦難を受ける理由を見いだせないことも、耐え難いことです。そこから、「主よ、なぜ」との問いがほとぼしり出ます（同10:1、22:2、42:10、44:24～25、74:1ほか）。地上を旅する信者は、「いつまで、主よ」と「主よ、なぜ」の二つの問いを交互に発しつつ、なお神を見つめ、神が備えておられる最終の助けと救いを期して待ちます。契約の神に、「契約を顧みてください」と、ひたすら祈り求めます（同74:20）。静かに待つことに、信仰者の内なる信頼が表されます。待つ時間は、無限に長く感じられることでしょう。はやる心を抑えることができないかのように、ダビデは両手を広げ、渴いた魂を神に向けて嘆願しました——「主よ、早く答えてください／わたしの魂は絶え入りそうです。／わたしの霊は絶え入りそうです。／御顔をわたしに隠さないでください。／わたしはさながら墓穴（はかあな）に下る者です」（同143:7）。

「いつまで、主よ」と問う口から、「主よ、早く」の願いが突いて出ています。詩編からダビデに学ぶのは、この切迫感であり、主の真実への揺るぎない信頼であります。詩編には、祈りをやめることのないダビデの模範が満ちています。忍耐強く祈り、疲れることなく求める信仰者のあり方を、ダビデは身にまっています。自分たちの先祖が神に依り頼み、助けを求めて神に叫び、救い出さ

れた恵みの事実を基盤として、ダビデは言いました——「あなたに依り頼んで、裏切られたことはない」（詩編22:6）。第4課、第5課で引用したとおり、神ご自身が、「ダビデを裏切るとは決してない」と断言されました（詩編89:36）。神は今も、ご自分の民の忍耐を裏切ることはありません。

2. 祈りの堅忍

祈りにおけるダビデの忍耐は、恵みを獲得しようとする熱意に固く結ばれていました。熱意と忍耐の結合されたさまを、カルヴァンは「堅忍」と呼んで言いました——「われわれは、整った心の沈着さをもって、希望を先にのぼして、聖書のうちにあのように強くわれわれに勧告されている堅忍に固く立ち続ける」（『綱要』3:20:51）。祈りに伴うのは、「祈りに耐え忍ぶ首尾一貫性」であるとも明言しています（同3:20:52）。

熱烈な願いに心燃やされて、たゆみなく祈ることを、主イエスは「やもめと裁判官」のたとえで教えられました（ルカ18:1～8）。これを語り出された目的が、「気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために」と記されています（1節）。裁判官のもとに足しげくやって来ては、自分を守ってくれるようにと願い求めるやもめのことを、ただ「うるさくてかなわない」という理由で、裁判をしてやろうと決心した、という話です。「ひっきりなしにやって来て」（5節）との句は、このやもめのしつこいばかりの熱心を描き出しています。

主イエスの結語は次のとおりです——「まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでも放っておかれることがあろうか。言うておくが、神は速やかに裁いてくださる」（7～8節）。ここで「昼も夜も」とあるのは、なじみのある旧約の言葉の反映です——「主よ、わたしを救ってくださる神よ／昼は、助けを求めて叫び／夜も、御前におります。／わたしの祈りが御もとに届きますように。／わたしの声に耳を傾けてください」（詩編88:2

～3)。

『ウェストミンスター大教理問答』185は、どのようにして祈るべきかを問うています。答に挙げられているものの一つが、「忍耐」です。証契聖句のエフェソ6:18には、「……絶えず目を覚まして根気よく祈り続けなさい」とあります。「根気よく」は、口語訳で「うむことなく」とあるとおり、祈りにおける堅忍を意味していますので、本問の翻訳にあたり、「忍耐」に代えて「堅忍」の訳を採用する訳本があります（松谷好明訳）。同じ原語が『ウェストミンスター信仰告白』第17章に用いられる場合には、一様に、「聖徒の堅忍」と訳されてきました。

『大教理問答』185の答では、堅忍と神への待望と神のみ心への謙虚な服従が密接な関係にあります。神が祈りに応えてくださる時と方法は、わたしたちの知恵と期待をはるかに超えるものがありますから、ただ、神の時と神の方途とを待ち望まなければなりません。待望の証契聖句ミカ7:7「わが救いの神を待つ」は、もろもろの取り計らいにかかわる神の主権の告白にほかなりません。服従の証契聖句マタイ26:39は、「わたしの願いどおりではなく、御心のままに」との主イエスご自身の祈りであり、まことに及び難い、しかし、信仰をもって目指すべき服従の水準を示すものとなっていて、心の引き締まるのを覚えます。

3. 集中と持続

「堅忍持久」「堅忍不拔」の熟語からも分かる通り、堅忍は、じっと耐え抜くというよりは、ある目的を指して自分の志を通すという、積極的なあり方を言い表しています。祈りにおける堅忍は、祈る気力あつてのことです。祈る気力は、神の言葉の真実を疑わず、神の約束が果たされることを確信するところに生まれます。

民の罪の実状を聞いたネヘミヤは、座り込んで泣き、嘆き、食を断って、天の神に祈り、「耳を傾け、目を開き、あなたの僕の祈りをお聞きください」と嘆願しました（ネヘミヤ記1:4～6）。すさまじいばかりの真剣さが、ここには漂っていま

す。ダビデも、同じ真剣さをもって神を呼んで、「わたしの涙に沈黙していませんでください」と懇願しました（詩編39:13）。真剣と集中と持続が、堅忍の底に流れています。

祈りの型として「主の祈り」を教えられた主イエスが、それに直ぐ続けて語り出されたのが、真夜中に助けを求められた人のたとえでした（ルカ11:2～4→5～13）。祈りは答えられるとの確信をもって祈れとの勧めが、たとえの眼目となってはいますが、祈るにあたって、たゆむことなく祈れとの訴えがなされていることを見落としてはなりません。8節の「しつように頼めば」が、その強調点を浮き彫りにしています。新改訳「あくまで頼み続けるなら」には、「あつかましきのゆえに」との脚注が施されています。これほどまでに「しつように頼む」ことの展開として、9節以下の「求めなさい、探しなさい、門をたたきなさい」の勧めが続きます。あきらめることのない祈りの持続が、ここでは意味されています。

先に見たたとえに登場するやもめの「ひっきりなしにやって来て」（ルカ18:5）に対応するのが、このたとえでの「しつように頼めば」（11:8）です。両者は、ルカ福音書の中で見事に響き合っています。ルカの編集の巧みさを反映する個所の一つと言えます。

堅忍と待望は、ちょうど双子の関係にあります。頑固なまでに祈りに固執するところに、希望に彩られた晴れやかな心が生まれます。祈りにおいて神に近づく者に対し、神の助けの手は常に差し伸べられているのです。

【宿題】 詩編88編を読み、極度の苦悩の中からの叫びと、神の助けを呼び求める声を聞き取りなさい。祈りの持続について、2節の「昼」と「夜」、14節の「朝ごとに」に注目しなさい。10節の「来る日も来る日も」にも留意しなさい。ローマ8:26を併せて読み、聖霊の執り成しの力と確かさに思いを沈めなさい。

（石丸 新）

第9課 神に近くあること

1. 神に近くあること

詩編73編アサフの詩は、神のみもとにとどまることの幸いを、複雑と見える現実のただ中から歌い上げています。神に逆らう者が栄え、富を蓄えていく現実の中にあつて、詩人は一筋の信仰を貫こうとします。信仰が根底から問われる経験に直面し、神の正義を疑い、心が騒ぎ、はらわたの裂ける思いにとらわれ、まるで神を知らない獣のようにふるまうことさえある、とアサフは自分のありのままの姿をさらけ出します（21～22節）。

しかし、神が自分の手をしっかりとつかまえてくださるので、わたしは常に神と共にあることができる、とアサフは神による安泰を明らかに言い表しています（23節）。23節の頭に置かれている「しかし」が、新共同訳で訳出されていないのは、惜しいことです。アサフをとらえて離さなかったのは、神の力強い手でした。その確信から、「あなたは御計らいに従ってわたしを導き」との告白がなされています（24節）。その神の手によって「後には栄光のうちにわたしを取られるであろう」と、アサフは自分の全生涯を神に委ね切りました（24節）。地にあつても、天にあつても、神だけが望みです（25節）。

老いは現実であり、衰えは直ぐそこに迫っていますが、神はとこしえにわたしの心の岩であります（26節）。神の言葉と神の手の業が明らかに示すとおり、神を遠ざかる者は滅び、神のもとから迷い去る者は絶たれます（27節）。「しかし、わたしは、神に近くあることを幸いとし／主なる神に避けどころを置く」と、アサフは澄み切った信仰のすべてを言い表しました（28節）。ここでも、「しかし」と言われているところを読み取ることが必要です。

神は、契約の神としてアブラハムを召し、エジプトの苦しみのもとから選びの民を救い出し、荒れ野の旅の間、昼は雲の柱、夜は火の柱において親しく臨在されました。時至つて、独り子の神を天から遣わされることにおいて、「神は我々と共

におられる」との預言は成就しました。永遠の距離を超えて神が近付き、神が臨在してくださることが、福音の事実として明らかにされたからこそ、このわたしが神に近くあることができ、真の安らぎを得ることが許されます。

礼拝で神の現臨在を実感する者は、祈りで、神に近くあることを繰り返し体験します。「祈りの実行と体験」とカルヴァンが語るところを、わたしたちは信仰生活の旅路で、少しずつ、しかし、確かに納得できるようにされています（『綱要』3:20:3）。詩編73編の25～28節が、『ウェストミンスター小教理問答』問1の答にある「永遠に神を喜ぶ」の証拠聖句であることを忘れないようにしましょう。

神に近づこうとする、心の純粋な感情が、すなわち、祈りであります。仲保者キリストのみ名によって祈るときに、わたしたちはためらうことなく神に近づき、神を呼び求めるのです。信じる者にとっては、この祈りのほかに、神に近づく道はありません（『ジュネーヴ教会信仰問答』250、『信仰の手引き』23を参照）。

2. 神は近くにいます

「神はいます」（詩編58:12）との信仰を明言したダビデは、主なる神が「主を呼ぶ人すべてに近くいまし／まことをもって呼ぶ人すべてに近くいまし」（詩編145:18）と、主の近さを告白するダビデでありました。神前感覚とともに、「近接感覚」とも言うべきものが、ダビデには植え込まれていました。主の近さを、ダビデは苦難の中で、ひととき強く体験しました。信仰者の避けどころである神は、「苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる」神であります（詩編46:2）。「いつ呼び求めても、近くにおられる我々の神、主」であります（申命記4:7）。

どのような時にも、神の言葉に真剣に聴き、従おうとする者一人ひとりに、また、そのように努める教会全体に神は近くおられます。神を信じるとは、神の近さを信じることにほかなりません。ダビデは、自分の経験から歌って言いました――

「主は打ち砕かれた心に近くいまし／悔いる心を救ってくださる」(詩編34:19)。神の言葉をひたすら待ち望み、神の仰せに心を砕く者に、主は近くいてくださいます(詩編119:147~151)。

近くいます神は、祈りという道をもって、わたしたちを神に近付かせてくださいます。窮乏を意識させることによって、わたしたちを祈りへと駆り立ててくださるのです。祈りの堅忍について学んだとおり、わたしたちには、休みはありません。あらゆる場面で祈るべきことをヤコブは勧めて言いました——「あなたがたの中で苦しんでいる人は、祈りなさい。喜んでいる人は、賛美の歌をうたいなさい」(ヤコブ5:13)。「主にいやしていただくために、罪を告白し合い、互いのために祈りなさい」とも勧めています(同5:16)。

神が近くにいますことを信じながらも、なお、「呼び求めるわたしに近づき／恐れるなどと言ってください」と願い求めるのが、信仰者の祈りです(哀歌3:57)。信仰とは、そういうものであり、祈りとは、また、そういうものであります。

3. こそって神に近付こう

詩編に収められている詩は、信仰者個人の歌であると同時に、信仰共同体の歌であります。先に見た145:18で、「主を呼ぶ人すべてに近くいまし／まことをもって呼ぶ人すべてに近くいまし」とダビデが歌うときに、「すべて」が繰り返されていることに注目しましょう。ここには、祈りに応えてくださる神の恵みの不動の原理と力とが、例外なく働くことが証言されています。こう告白することによって、ダビデは、自分に連なる者を、すべて、主を呼ぶことへと招き入れています。

ダビデは、「どのようなときも、わたしは主をたたえ／わたしの口は絶えることなく賛美を歌う／わたしの魂は主を賛美する」と、自分自身のあり方を明らかにしたうえで、礼拝への招きを厳かに告げて言いました——「わたしと共に主をたたえよ。ひとつになって御名をあがめよう」(詩編34:2~3→4)。「ひとつになって」は、礼拝共同体の一体性を描き出しています。ダビデは、自分

と共にいる人たちを「主の聖なる人々よ」と呼び(10節)、愛を込めて、「子らよ、わたしに聞き従え。／主を畏れることを教えよう」と言って(12節)、信仰共同体の形成に向けて励ましました。

個人の敬虔は、公同の礼拝へと結集されます。「聖なる公同の教会、[すなわち] 聖徒の交わり」にあっては、個人の場面では体験することのできない、大きな喜びと励ましがあります。群れの喜びは、互いに響き合い、群れの励ましは、互いを建て上げます。群れの力は、キリストにおける神の救いのみ業をことごとく語り伝えるために、聖霊によって用いられます。「神に近くあることを幸いとし」と言ったダビデが、「わたしは御業をことごとく語り伝えよう」と、その使命を明らかにしたとおりです(詩編73:28)。

イエス・キリストは、ご自分の肉を裂き、血を流すことによって、罪の贖いの業を成し遂げ、わたしたちのために、新しい生きた道を開いてくださいました。このキリストが、偉大な祭司として神の家、すなわち教会を支配しておられます。ですから、「心は清められて、良心のとがめはなくなり、体は清い水で洗われています。信頼しきって、真心から神に近づこうではありませんか」とヘブライ人への手紙の著者は勧めています(ヘブライ10:22)。共に神に近づくことの恵みを、教会は主の日の礼拝において覚え、公同の祈りの中でそれを実感します。信仰の仲間の祈る声を聞いて「主に近くある民」(詩編145:14)の幸いをかみしめます。

【宿題】「神との近さ」を共通項とするダビデの65:5と、アサフの73:28を重ねて読み合わせなさい。65:5については、神を主語とし、神の主権の働きを表現する新改訳を参考にしなさい——「幸いなことよ。／あなたが選び、近寄せられた人、／あなたの大庭に住むその人は」。

イザヤ58:2「神に近くあることを望むように」を参照しなさい。直訳は、「神の近さを熱望するように」。(石丸 新)

いのちのぱん

いのち ぱん
「わたしが命のパンである。」(ヨハネによる福音書第6章35節)

にちようがっこうのおともだちへ げんき
日曜学校の友達へ お元気ですか？

きみ
君のためにつくったこの聖書日課、「いのちのぱん」です。

「いのぱん」を、まいにち、使っていますか？

きみ せいしょ いま
君の聖書は、今、どこにあるの？ エッ、日曜学校のかぱんのなかに入れっぱなし…？

きみ かみ しん
君は、神さまを信じているでしょう？ イエスさまのことが大好きでしょう？ すばらしいね！

イエスさまを愛することは、毎日、神さまのみことばを聞くこととひとつのことなのです。

かぱんのなかに入っている聖書を、といだして、食卓(テーブル)の上でよんでごらん。

じぶんの机がある友達へ、机の上ひろげてごらん。

かみ
神さまは、きみのために、きょうも、話してくれます。

でも、毎日、ひらけなときもあるよね。

「いのぱん」は、そんな君の友達です。

ぜんこく
全国にいる、おおぜいの友達も、まいにち、いっしょのところを読んでるよ。

とう かあ
お父さんやお母さんといっしょに、そしてひとりでも…。 「いのぱん」を友達にしてね！

イエスさまの祝福が愛するあなたの上にとたかにありますように！



いのちのばん

<p>10月2日（月） 詩編1編1～2節</p> <p>主の教えを愛し、昼も夜も口ずさむ</p> <p>幸いな人とは、お金持ちや頭の良い人のことではありません。思い通りに何でもできる人でもありません。神さまの教えを愛し、心に蓄え、いつも口ずさんで、それに従って生きる人です。そのような人は、神さまに愛され、祝福していただけるからです。</p>	<p>10月5日（木） 詩編4編4節</p> <p>呼び求める声を聞いてくださる</p> <p>神さまを心から信じて生きる人を、神さまはちゃんと見分けてくださり、苦しみや悩みの中で呼び求める祈りに、耳を傾けてくださいます。心にある悩みや苦しみ、悲しみや恐れを、みんな神さまに訴え、委ねていきましょう。</p> 
<p>10月3日（火） 詩編1編3節</p> <p>流れのほとりに植えられた木</p> <p>水の乏しい砂漠や荒れ野では、木は枯れてしまいます。しかしこの木は、わざわざ水路の近くに植えられました。水が枯れることもないので、豊かに実を結ぶことができます。そのようにわたしたちも、神さまの教えの中で渴いた心がうるおされるのです。</p>	<p>10月6日（金） 詩編5編13節</p> <p>盾となってお守りくださいます</p> <p>神さまは、ご自分に従う人を祝福してくださるだけではなくて、その人が守られるように、ご自分がその人の盾となってくださいます。今日も、神さまはあなたの盾となられます。</p> 
<p>10月4日（水） 詩編3編6～7節</p> <p>主が支えていてくださいます</p> <p>神さまに信頼する人は、たとえ敵に周りを取り囲まれた危険の中でも、心安らかに眠ることができます。危険の中でも、ちゃんと神さまが守ってくださっているからです。</p> 	<p>10月7日（土） 詩編6編10節</p> <p>主はわたしの嘆きを聞き、わたしの祈りを受け入れてくださる</p> <p>神さまは、あなたの悲しみや悩みを聞いてくださり、それに答えてくださいます。すぐに答えがないとあきらめないで、祈り続けてください。あなたの祈りは、神さまにちゃんと覚えられているのですから。</p>

いのちのばん

<p>10月9日（月）^{し へん へん せつ} 詩編8編4～5節</p> <p>あなたの指の業を、仰ぎます</p> <p>よぞら^{よぞら}に輝^{かがや}く星^{ほし}を見ると、自分^{じぶん}がどんなに小さいかを思います。けれどもそれらはみな、神^{かみ}さまが造^{つく}られたもの、そしてわたしたちもそうです。そして神^{かみ}さまは、小^{ちい}さなわたしたちを愛^{あい}し、守^{まも}り、祝^{しゆくふく}福^{ふく}してくださるのです。</p> 	<p>10月12日（木）^{し へん へん せつ} 詩編13編6節</p> <p>主はわたしに報いてくださった</p> <p>思い煩^{わづら}いと嘆^{なげ}きで心^{こころ}を一杯^{いっぱい}にしていた人が、「この悩^{なや}みはいつまで続^{つづ}くのですか」と祈^{いの}りました。それに神^{かみ}さまは答^{こた}えて、思^{おも}い煩^{わづら}いに平^{へい}安^{あん}を、嘆^{なげ}きに喜^{よろこ}びを与^{あた}えてくださいました。そのように神^{かみ}さまは、信^{しん}じる者^{もの}に、ふさわしい報^{むく}い^あを与^{あた}えてくださるのです。</p>
<p>10月10日（火）^{し へん へん せつ} 詩編9編10節</p> <p>苦難の時の砦の塔となって</p> <p>砦^{とりで}には塔^{とう}が立^たっていて、そこ^{そこ}から敵^{てき}が攻^せめてこないか見張^{みは}ります。そのように神^{かみ}さまは、わたしたちを塔^{とう}のよう^{よう}に見張^{みは}り、いざというときは砦^{とりで}とな^なって守^{まも}ってくださるのです。</p> 	<p>10月13日（金）^{し へん へん せつ} 詩編14編6節</p> <p>主は避けどころとなっしてくださる</p> <p>たとえ神^{かみ}などい^いないと思^{かんが}える悪^{わる}い人^{ひと}たちが、正^{ただ}しい人^{ひと}をわな^{わな}にかけようとしても、そこ^{そこ}で神^{かみ}さまは、その人^{ひと}の逃^{のが}れ場^ば、避^{ひなん}難^{じよ}所^{じよ}とな^なってくださいます。そこ^{そこ}に逃^{にげ}げ込^こめば安^{あん}心^{しん}です。</p> 
<p>10月11日（水）^{し へん へん せつ} 詩編10編14節</p> <p>御手に労苦と悩みをゆだねる人を</p> <p>だれも助^{たす}けてもらえないひとりぼっちの無^{むり}力^{りよく}な人^{ひと}は、神^{かみ}さまに頼^{たよ}るしかありません。そこ^{そこ}で、神^{かみ}さま助^{たす}けてくださいと求^{もと}め、悩^{なや}みを神^{かみ}さまにまかせ^かせる人^{ひと}を、悩^{なや}み苦^{くる}しむその中^{なか}で守^{まも}り、支^さえてくださるのです。</p> 	<p>10月14日（土）^{し へん へん せつ} 詩編16編8節</p> <p>わたしは主に相對しています</p> <p>相對^{そうたい}するとは、向^むかい合^あって、たがいに見^みつめあうこと^{こと}です。そのようにいつも神^{かみ}さまを見^みているなら、「わたしは揺^ゆらぐこと^{こと}がありません。」</p> 

いのちのばん

10月16日（月） 詩編17編8節
瞳のようにわたしを守り
 目の瞳はとてもデリケートで、すぐに傷つきます。神さまは、わたしたちが傷つかないように、細心の注意を払って、守ってください。そのため、翼の陰に隠してくださるのです。



10月19日（木） 詩編20編9節
我らは力に満ちて立ち上がる
 戦車や軍馬を頼りにする人は、戦いに負け、倒れていきます。人間により頼む人は、いずれ滅びます。しかし、神さまにより頼む人は、力に満たされて、たとえ倒れても、また立ち上がる事ができるのです。



10月17日（火） 詩編18編47節
主は命の神
 たくさんの敵に囲まれながら、何度もその危険から守られた人が賛美しました。主は命の神と。命の神とは、命を支え、守る神であると共に、命を造り出す、命の源でもあるということです。わたしたちの命の源、元気の源は、神さまなのです。

10月20日（金） 詩編22編11節
母の胎にあるときから、あなたは神
 神さまは、あなたが生まれる前からあなたを知り、あなたを造り、あなたを守ってこられた方でした。その神さまが、これからもあなたと共にいて、あなたを見守ってくださいます。



10月18日（水） 詩編19編8節
主の律法は完全に魂を生き返らせ
 命の神は、わたしたちの魂を生き返らせる言葉をくださいました。この命の言葉に触れるたびに、わたしたちの心は生き返ります。命の言葉とは主イエスのことであり、主について記された聖書です。今日も命の言葉によって、力を与えられましょう。

10月21日（土） 詩編23編1節
主は羊飼い、何も欠けることがない
 羊飼いは、どこに青々とした草が生え、どこに豊かな水辺があるかを知り、そこに羊たちを連れて行くことができます。主イエスがわたしたちの羊飼いとして、いつもわたしたちを養い、守り、導いてくださるのです。



いのちのばん

<p>10月23日（月） 詩編25編5節</p> <p>あなたのまことにわたしを導き</p> <p>「あなたはわたしを救ってくださいる神」。そのような神さまに、いつも望みをおいていくことができるよう、神さまがいつもわたしたちを導き、教えてくださいることを祈りましょう。</p> 	<p>10月26日（木） 詩編30編12節</p> <p>わたしの嘆きを踊りに変え</p> <p>わたしたちは、いつもうれしいこと、楽しいことばかりとは限りません。しかし神さまは、わたしたちの悲しみを喜びに変え、恐れを希望に変えてくださいる神さまなのです。</p> 
<p>10月24日（火） 詩編27編1節</p> <p>主はわたしの光、わたしの救い</p> <p>神さまはわたしたちの心に光を照らして明るくし、進むべき道に光を照らして導き、隠れた罪に光を照らして、罪を悔い改めさせてくださいる方です。神さまの光で照らされて生きていけるように、光を求めていきましょう。</p> 	<p>10月27日（金） 詩編31編6節</p> <p>御手にわたしの霊をゆだねます</p> <p>主イエスが十字架で祈られた祈りは、わたしたちの祈りでもあります。寝ている間、自分を守れない無防備なわたしたちですから、その間も神さまが共にいて守ってくださいるように、自分を神さまに委ねていきましょう。</p> 
<p>10月25日（水） 詩編28編7節</p> <p>主の助けを得て、喜び踊ります</p> <p>困難に直面した人が、神さまに助けを求めました。すると神さまはその人を助け、盾となってお守ってくださいました。神さまこそ、わたしたちの力と喜びの源です。</p> 	<p>10月28日（土） 詩編32編7節</p> <p>救いの喜びで囲んでくださる</p> <p>神さまはわたしたちを、色々な困難から守ってくださいるだけではなく、そこで救いの喜びをもくださいます。助かって良かったというだけではなく、喜びで満たしてくださいるのです。</p> 

いのちのばん

10月30日（月） 詩編33編5節
地は主の慈しみに満ちている
 神さまが造られた世界には、神さまの愛と恵みと慈しみの言葉が満ち溢れています。なぜなら、この世界は、御言葉によって造られたからです。だから鳥のさえずりや美しい花を見る中で、今日も神さまに愛されていることを知ることができるのです。

11月2日（木） 詩編37編23～24節
主がその手をとらえてくださる
 わたしたちは元気に歩いていても、途中で倒れたり、つまずいたりすることがあります。でも心配しなくて大丈夫です。神さまがわたしたちの手を取って、倒れないようにつかんでくださっているからです。



10月31日（火） 詩編37編7～8節
主の使いはその周りに陣を敷き
 神さまは、わたしたちに御使いを送り、周りを取り囲ませて、わたしたちを守ってくださいます。今もあなたの周りには御使いがいます。



11月3日（金） 詩編40編4節
口に新しい歌を授けてくださった
 神さまは、わたしたちにいつも新しい喜びを与えて、新しく神さまを賛美させていただきます。そうしてわたしたちを新しくしてくださるのです。



11月1日（水） 詩編36編10節
命の泉はあなたにあり
 わたしたちの命を生き返らせ、生き生きとした喜びで満ちたらせてくださるのは神さまです。神さまと共にあるなら、まるで泉から尽きることなく水が湧き出て来るように、あなたの命が湧き出て来るのです。

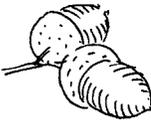


11月4日（土） 詩編42編9節
夜、主の歌がわたしと共にある
 苦しみの中で眠れない夜にも、神さまはわたしたちに希望と喜びを送って、苦しみの中でなお神さまを賛美する歌を与えてくださいます。神さまこそ、あなたの命なのです。



いのちのばん

11月6日（月） 詩編45編7節
あなたの王座は世々限りなく
 この世を本当に支配しているのは、
 神さまです。神さまこそが、この世の
 王の王です。そしてこの神さまの支配
 は永遠に変わることがありません。わ
 たしたちは今日も、こ
 の神さまの支配の中で、
 守られているのです。



11月9日（木） 詩編49編10節
人は永遠に生きようか
 わたしたちはいつまでも生きてい
 るわけではありません。いつかは死を
 迎えます。けれども永遠の神さまと共
 に生きる人は、永遠に神さまと共に生
 きることができます。命
 の神さまにしっかりとつ
 ながっていきましょう。



11月7日（火） 詩編46編11節
力を捨てよ、知れ、わたしは神
 わたしたちが自分により頼むので
 はなくて、本当に神さまにより頼んで
 いくとき、神さまの大きさと力強さを
 知って、心を強くされていきます。わ
 たしたちも自分の力を捨
 てて、心から神さまによ
 り頼んでいきましょう。



11月10日（金） 詩編50編15節
苦難の日、わたしはお前を救おう
 苦しみに悩まされるとき、「わたし
 を呼べ」と神さまは言われます。わた
 しを呼ぶなら、救うからと。苦しみの
 中で呼ぶわたしたちの声を、きちんと
 聞き取ってくださるのが、あなたの神
 さまなのです。



11月8日（水） 詩編48編15節
死を越えて、導いて行かれる
 この世のものとは、死と共に別れを
 告げなければなりません。死の先まで
 わたしたちを守ってくれるものは、こ
 の世にはありません。ただ、神さまだ
 けが、死を越えて、わ
 たしたちを導き、共に、
 共に歩まれるのです。



11月11日（土） 詩編51編12節
わたしの内に清い心を創造し
 大きな罪を犯したダビデは、罪に汚
 れた自分の心が洗い清められて、新し
 い心とされるように祈りました。神さ
 まがわたしたちの
 心をも清め、新し
 くしてくださるよ
 う祈りましょう。



いのちのばん

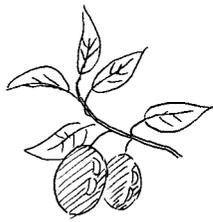
11月13日（月） 詩編53編6節
主はわたしの魂を支えてくださる
 わたしたちはいつも元気（げんき）でいるわけではなくて、がっかりしたり、心がくじけてしまうこともあります。そんなときにも、神（かみ）さまはあなたの心（こころ）をしっかりと支え（ささ）、強く（つよ）して、元（げん）気（き）に立ち上（た）げられるようにしてくださるのです。



11月16日（木） 詩編57編2節
あなたの翼の陰を避けどころとし
 問題（もんだい）の嵐（あらし）が通（とお）り過（す）ぎようとすると、安全（あんぜん）な避難（ひなん）所（じよ）があれば安心（あんしん）です。神（かみ）さまは大きな翼（つばさ）をひろげて、わたしたちを覆（おお）い包（つつ）み、守（まも）ってくださいます。



11月14日（火） 詩編55編23節
あなたの重荷を主にゆだねよ
 わたしたちは疲（つか）れたとき、だれかに背（せ）負（お）ってもらいたくなります。神（かみ）さまは、そんなわたしたちを今（いま）も背（せ）負（お）ってくださいます。だから「あなたの重（おも）い荷（に）を主（しゆ）にゆだねよ」。



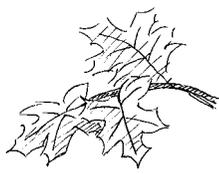
11月17日（金） 詩編62編3節
神こそ、わたしの岩、わたしの救い、わたしは決して動揺しない
 しっかりした土（ど）台（だい）の上（うへ）に建（た）てるなら、家（いえ）はしっかりと立（た）っていられます。わたしたちも、岩（いわ）なる神（かみ）さまを土（ど）台（だい）としていくとき、決（けつ）して揺（ゆ）らいだりすることがありません。神（かみ）さまを、自（じ）分（ぶん）の土（ど）台（だい）としていきましょう。

11月15日（水） 詩編56編9節
革袋にわたしの涙を蓄えて
 神（かみ）さまの手許（てもと）には大きな革（かわ）袋（ぶくろ）があり、わたしたちが流（なが）す涙（なみだ）が一滴（いっ）一滴（いっ）集（あ）つめられています。そのようにわたしたちの悲（かな）しみを、神（かみ）さまはちやんと覺（おぼ）え、それ（こた）へ答（こた）えてくださるのです。



11月18日（土） 詩編68編20節
日々、わたしたちを担う神
 毎日（まいにち）、わたしたちは神（かみ）さまに背（せ）負（お）われて、生（い）きています。疲（つか）れたとき、つまずき倒（たお）れそうなき、弱（よわ）ったとき、どんなときにも神（かみ）さまはわたしたちを背（せ）負（お）ってくださっているのです。今日（きょう）も神（かみ）さまに背（せ）負（お）われて、生（い）きていきましょう。

いのちのばん

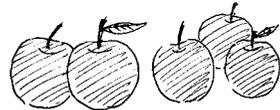
<p>11月20日（月） イザヤ7章4節 落ち着いて、静かにしていなさい 敵が攻めてきたことで、あわてている王に、神さまは「落ち着いて、静かにしていなさい」と言われました。信じているなら、神さまが助け、守ってくださいからです。わたしたちも、あわてふためいたりせずに、神さまを信頼していきましょう。</p>	<p>11月23日（木） イザヤ30章15節 静かにしているならば救われる 周りを敵に囲まれて、危険が迫っているときに、神さまはイスラエルのひとびとに約束されました。「立ち帰って、静かにしているならば救われる」と。安らかに神さまを信頼するところに、力がみなぎってくるのです。</p> 
<p>11月21日（火） イザヤ9章1節 闇の中を歩む民は、光を見た 光は周りが暗ければ暗いほど、明るく輝きます。わたしたちの心が暗くても、明るい希望の光を神さまはともしてくださいます。そして暗闇の中でこそ、光は鮮やかに輝くのです。</p> 	<p>11月24日（金） イザヤ30章18節 主は恵みを与えようとして待ち 神さまはわたしたちに恵みを与えようと、待ち構えておられるとイザヤは語りました。わたしたちの神さまは、ご自分の憐れみを与えようとしてやまない、恵みの神さまなのです。</p> 
<p>11月22日（水） イザヤ12章2節 見よ、わたしを救われる神 まことの神さまは、わたしたちのただ中にいてくださいます（6節）。だからわたしたちは恐れません。神さまがわたしたちの救いとなってくださるからです。共にいてくださる神さまに、いよいよ信頼していきましょう。</p> 	<p>11月25日（土） イザヤ30章19節 主はあなたの呼ぶ声に答えて 恵みを与えようとされる神さまは、わたしたちの叫ぶ声を聞き、呼ぶ声に答えてくださる方でもあります。わたしたちが叫ぶとき、神さまはそれとちゃんと聞いていてくださるのです。</p> 

いのちのばん

11月27日(月) イザヤ35章6節
荒れ野に水が湧きいで
 荒れ野や砂漠から水が湧き出ることはありません。しかし神さまは、その荒れた地に水を与えて、そこを潤してください。そのように荒れて、
 渴いたわたしたちの心にも、命の水を湧き出させてくださるのです。



11月30日(木) イザヤ40章12節
主は羊飼いと群れを養い
 神さまは羊飼いとなって、イスラエルを集め、養ってくださいます。傷ついた羊は抱いて、傷をいやし、憐れんでくださる、
 憐れみの神なのでした。



11月28日(火) イザヤ37章20節
あなただけが主であることを
 アッシリアに攻められたとき、ヒゼキヤは神さまを信頼して、敵を恐れませんでした。イスラエルの神さまだけがまことの神で、
 他は偶像にすぎないことを知っていたからでした。



12月1日(金) イザヤ40章31節
主に望みをおく人は新たな力を得
 若い人も、力に満ちた人も、つかれて倒れることがあります。しかし神さまを信頼し、望みをおく人は、いつも神さまから新しい力をいただくので、
 繰り返し立ち上がり、元気に走りぬいていくことができるのです。



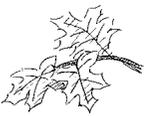
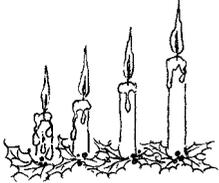
11月29日(水) イザヤ40章1節
慰めよ、わたしの民を慰めよ
 イスラエルとユダは、神さまに逆らって滅びてしまいました。しかし神さまはイスラエルの人々を捨てることなく、
 罪の裁きを終えた彼らに慰めを与えてくださいます。わたしたちの神さまは、
 慰めの神さまなのです。



12月2日(土) イザヤ41章10節
救いの右の手であなたを支える
 「わたしはあなたと共にいる」と約束してくださる神さまは、ただ一緒にいるだけではなくて、あなたを助けるために共にいてくださいます。
 そして倒れそうになるときは、右の手で支えてくださるのです。



いのちのばん

<p>12月4日（月） イザヤ^{しやう せつ}41章13節 あなたの^{みぎ て かた と}右の手を固く取って あなた^{とも}と共にいる^{かみ}神さまは、^{みぎ て}右の手 であな^{ささ}たを支える^{たお}だけではなくて、倒 れそう^{みぎ て}なときには、あなたの^{みぎ て}右の手を 取^とって、立^たち上^あがらせて^{かた}くださる^{かた}方 でもあります。だから、わ た^{なに おそ}したちは何も恐^{おそ}れるこ とがありません。</p> 	<p>12月7日（木） イザヤ^{しやう せつ}43章4節 わたしはあなたを^{あい}愛している 神^{かみ}さまの^め目には、あなた^{たい}はとて 切^{せつ}でかけがえ^{ひと}のない^{ひと}人です。そのあな たを^{かみ}神さまは、^{あい}愛^いしていると^い言^いわれ ます。^{あい}愛^いしてくだ さる^{かみ}神^{かみ}さまを、あ なた^{あい かせ}の愛^{あい}し返^{かせ}して い^いってください。</p> 
<p>12月5日（火） イザヤ^{しやう せつ}43章1節 わたしはあなた^なの名^よを呼ぶ 名^なを呼^よぶとは、あな^したをよく知^しって いる^{かな}ということ^{かな}です。あなた^{かな}の悲^{かな}し み、^{なや}悩^{なや}み、^{くる}苦^{くる}しみ を^しすべ^して知^しって^しく だ^{うえ}さり、その上^{うえ}で あな^{たす}たを助^{たす}けて^{たす}く だ^ささる^さのです。</p> 	<p>12月8日（金） イザヤ^{しやう せつ}43章19節 見よ、新^{あたら}しい^{おこな}ことをわたしは行^{おこな}う 神^{かみ}さまは^{いま}今^{あたら}までにな^{あたら}か^{あたら}った、新^{あたら}しい こと^{せんげん}を行^{せんげん}うと宣^{せんげん}言^{せんげん}され^{せんげん}まし^{せんげん}た。それ は、^{つみぶか}罪^{つみ}深^{つみ}いわ^{つみ}た^{つみ}し^{つみ}た^{つみ}ち^{つみ}の^{つみ}罪^{つみ}が^{つみ}取^{つみ}り^{つみ}除^{つみ}か れ、^{ゆる}赦^{ゆる}され、^{きよ}清^{きよ}く^{きよ}され^{きよ}る^{きよ}とい^{きよ}う^{きよ}こと^{きよ}で す。わた^{うち}した^{あたら}ち^{あたら}の^{あたら}内^{あたら}に、新^{あたら} しい^{そうぞう}創^{はし}造^{はし}を^{はし}始^{はし}めて^{はし}て^{はし}く^{はし}だ^{はし}さ^{はし}る とい^いう^いこと^いな^いのです。</p> 
<p>12月6日（水） イザヤ^{しやう せつ}43章2節 大^{たい}河^がを^{とお}通^{とお}つても、^お押^おし^お流^{なが}され^{なが}ない 激^{はげ}しい^{なが}流^{なが}れに^{あしもと}足^{あしもと}元^{あしもと}をと^{あしもと}ら^{あしもと}れて、あ^あや う^あく^あ流^あされ^あて^あし^あま^あい^あそ^あう^あにな^ある^あとき にも、あ^{なが}なた^{なが}が^{なが}流^{なが}され^{なが}ない^{なが}よ^{なが}う^{なが}に^{なが}守^{まも} て^{まも}く^{まも}だ^{まも}さ^{まも}る^{まも}。そ^{まも}の^{まも}よ^{まも}う^{まも}に^{まも}神^{かみ}さま^{かみ}は^{かみ}あ^{かみ} なた^{とも}と^{とも}共^{とも}に^{とも}い^{とも}て く^{とも}だ^{とも}さ^{とも}る^{とも}の^{とも}で す。</p> 	<p>12月9日（土） イザヤ^{しやう せつ}46章4節 白^{しら}髪^がにな^せる^おまで、^い背^せ負^おって^い行^いこう わ^うた^うし^うた^うち^うは^う生^うま^うれ^うた^う時^うか^うら^うず^う と^{かみ}神^{かみ}さま^{かみ}に^せ背^せ負^おわ^せれ^おて^おき^おまし^おた。そ^お て^おこ^おれ^おか^おら^おも^おず^おつ^おと、^おそ^おう^おし^おて^おく^おだ^おさ^お る^おと、^{やくそく}約^{やくそく}束^{やくそく}され^{やくそく}まし^{やくそく}た。そ^{かみ} う^{かみ}や^{かみ}つ^{かみ}て^{かみ}神^{かみ}さ^{かみ}ま^{かみ}は、「わ^いた^いし^いが^い担^いい、^せ背^せ負^おい、^{すく}救^{すく} い^いだ^いす」と^いい^いつ^いて^いく^いだ さ^いる^いの^いです。</p> 

いのちのばん

<p>12月11日（月） イザヤ49章15節 女が乳飲み子を忘れるであろうか お母さんが自分の産んだ子を忘れることは決してありません。憐れみをかけないこともありません。神さまは、ご自分が生んだわたしたちを忘れることはない約束されるのです。</p> 	<p>12月14日（木） イザヤ55章6節 尋ね求めよ、見いだしうるときに 神さまは、一生懸命に尋ね求めるなら、見いだすことができ、呼び求めるなら、出会うことができると約束されました。わたしたちも熱心に、神さまを求めていきましよう。</p> 
<p>12月12日（火） イザヤ53章6節 わたしたちの罪をすべて、主は彼に負わせられた わたしたちの罪のすべては、主イエスが背負い、十字架にかかってくださいました。その犠牲によってわたしたちは罪赦され、救われました。罪のすべてを背負ってくださった主イエスに、感謝をささげていきましょう。</p>	<p>12月15日（金） イザヤ57章15節 へりくだる霊の人に命を得させ 高く、聖なる所におられる神さまは、低いところにいるわたしたちを見捨てることなく、心からへりくだる人に命を与えてくださる方です。高ぶる人ではなく、心打ち砕かれている人と共にいてくださるのです。</p> 
<p>12月13日（水） イザヤ55章2節 わたしに聞き従えば、良いものを食べることができる 朽ちる食べ物（地上のもの）ばかりに心とらえられているわたしたちに、朽ちない食べ物を求めるように言われます。神さまの言葉で心を一杯にするなら、心は満たされて、恵みの豊かさを楽しむことができるのです。</p>	<p>12月16日（土） イザヤ63章9節 彼らの苦難をご自分の苦難とし 神さまは、わたしたちの苦しみを、まるで自分の苦しみであるかのように、共に苦しみ、共に悲しんで、一緒に背負ってくださる方です。そしてそのために、御使いを送って、わたしたちを守り、励ましてくださるのです。</p> 

いのちのばん

<p>12月18日（月） マタイ1章1節 アブラハムの子、ダビデの子</p> <p>クリスマスにお生まれになる主イエスは、アブラハム・ダビデの子孫だと言われます。それは、神さまがアブラハム・ダビデと結んだ契約に基づく救いをもたらすということでした。わたしたちの救いは、神さまの契約に基づく、確かな救いなのです。</p>	<p>12月21日（木） ルカ1章28節 主があなたと共におられる</p> <p>御使いはマリアに「おめでとう、恵まれた方」と言いました。マリアが「恵まれた方」なのは、「主があなたと共におられる」からでした。わたしたちとも主イエスが共にいてくださいます。わたしたちも「恵まれた方」なのです。</p> 
<p>12月19日（火） マタイ1章21節 この子は自分の民を罪から救う</p> <p>イエスとは「主は救い」という意味で、わたしたちの救い主としてお生まれくださったことを表しました。それは罪からの救いで、すでにそこにやがて後の十字架の陰が差し込んでいます。主イエスは、死ぬために生まれた方なのでした。</p>	<p>12月22日（金） ルカ1章45節 主がおっしゃったことは実現すると信じた方は、なんと幸いです</p> <p>エリサベトもマリアを、「あなたは女の中で祝福された方です」と祝福しました。エリサベトがそう言ったのは、マリアが心底から神さまにより頼み、信頼したからでした。わたしたちも、そのように信じていきましょう。</p>
<p>12月20日（水） マタイ1章23節 神は我々と共におられる</p> <p>「神は我々と共におられる」という約束を実現するために、主イエスはお生まれくださいました。それは、神ご自身が人間となることで、共にいることを実現されたことによります。クリスマス以来、主イエスはずっと神であり、人でもあるのです。</p>	<p>12月23日（土） ルカ1章78節 あけぼのの光が我らを訪れ</p> <p>暗闇に閉ざされ、うなだれて生きる人々の許に、光が昇ります。光が照らして、明るく輝かせます。そのように主イエスの誕生は、わたしたちの心に希望の光がともされていて、主イエスに栄光あれ。</p> 

いのちのばん

<p>12月25日（月） ルカ2章7節</p> <p>宿屋には泊まる場所がなかった</p> <p>わたしたちのために主イエスはお生まれくださったのに、主は誕生の最初から、拒絶されました。わたしたちは、この方を心に迎え入れ、わたしたちの心にお生まれくださるよう祈りましょう。</p> 	<p>12月28日（木） ルカ2章34節</p> <p>倒したり立ち上がらせたりする</p> <p>主イエスを前にしたとき、人々は二つに分けられます。この方を信じるか、信じないか。この方によって救われるか、救われないかで、中間はありません。あなたはどちらでしょうか。</p> 
<p>12月26日（火） ルカ2章11節</p> <p>あなたがたのために救い主が</p> <p>主イエス誕生の知らせは、野宿していた羊飼いに伝えられました。人々から嫌われ、のけ者にされていた羊飼いです。「あなたがたのために」とは、このように嫌われ者、のけ者とされた人たちのための救い主という意味なのでした。</p>	<p>12月29日（金） ルカ2章35節</p> <p>心にある思いがあらわにされる</p> <p>主イエスを前にしたとき、わたしたちの心の奥に隠している思いがあらわにされ、罪が明らかにされていきます。自分の罪を隠すのではなく、罪を認めて、主イエスの十字架の救いを信じていきましょう。</p> 
<p>12月27日（水） マタイ2章11節</p> <p>彼らはひれ伏して幼子を拝み</p> <p>占星術の学者たちの礼拝は、彼らを代表とした世界中の人々による礼拝を意味しました。その中にわたしたちも加えられています。わたしたちも宝物をこの方に献げていきましょう。</p> 	<p>12月30日（土） ルカ2章49節</p> <p>自分の父の家にいるのは当たり前</p> <p>神殿が自分の父の家であるとは、主イエスがご自分を神の御子であり、わたしたちを救うという大切な使命があることを自覚されていたということです。やがて18年後、ここに戻れるときには、大きな戦いが待っているのです。</p>

2007年1～3月カリキュラム（第24号）

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句	対 応 表
	単 元 の 目 標			
1月7日 新年	種まきのたとえ	マタイ13:1-9, 18-23	マタイ13:8	
	新年100倍の実を实らせる神の御言葉の力を信じよう			
1月14日	5000人の給食	ヨハネ6:1-15	ローマ6:13	(59)
	神は命を与えるご自身の御業に幼子をお用いくださる。喜んで応答しよう			
1月21日	嵐を鎮める主	マタイ14:22-33	コリント二4:18	47
	主イエスが共にいてくださるから、恐れることなく歩み続けよう			
1月28日	ペトロの信仰告白	マタイ16:13-20	マタイ16:16	
	信仰の言葉を与え、教会を建て上げるキリストの恵みの力に生きよう			
2月4日	山上の変貌	マタイ17:1-13	マタイ17:5	57
	栄光を顕された主イエスが十字架への道を歩まれる。主イエスを仰ごう			
2月11日 (信仰の自由)	善いサマリア人	ルカ10:25-37	ヨハネ3:16	54
	善いサマリア人となってくださった主イエスにならおう			
2月18日	マルタとマリア	ルカ10:38-42	ルカ12:31	50
	もっとも大切なただ一つのことである御言葉を聴くことに生きよう			
2月25日 レント	見失った羊のたとえ	ルカ15:1-7	イザヤ43:4	52
	神の喜びに招くために罪人を見つけ出す主イエス。その喜びにあずかる			
3月4日 レント	放蕩息子のたとえ	ルカ15:11-32	ルカ15:24	53
	放蕩息子を神の子として受け入れてくださる神の愛を知ろう			
3月11日 レント	ザアカイの救い	ルカ19:1-10	ルカ19:10	46
	主イエスに出会い、喜びと悔い改めに生きよう			
3月18日 レント	幼子の祝福	マタイ19:13-15	マタイ19:14	
	子どもを招き祝福される主イエスのもとに行こう			
3月25日 レント	金持ちの青年	マタイ19:16-30	マタイ22:39	58
	ただ神の恵みの御業として神の国に入れられることをたたえよう			

※「対応表」欄は、『神の救いの歴史』（日本基督改革派教会教育委員会発行、1999年）の該当する単元を示しています。

2006年度 年間カリキュラム

(2006年4月～2007年3月)

二年サイクルの聖書物語（救済史）と教会暦の併用カリキュラム

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所
2006年 21号	4月2日	進級式・レント	十字架のキリスト	マルコ15:21-32
	4月9日	受難週	葬られるキリスト	マルコ15:42-47
	4月16日	復活祭	キリストの復活	マルコ16:1-8
	4月23日		天地の創造	創世記1:1-31
	4月30日		人間の創造	創世記2:4-25
	5月7日		人間の墮落と救いの約束	創世記3:1-15
	5月14日	母の日	ノアの箱舟	創世記6:1-22
	5月21日		バベルの塔	創世記11:1-9
	5月28日		アブラハムの召命	創世記12:1-9
	6月4日	聖霊降臨祭	教会の誕生	使徒言行録2:1-13
	6月11日	花の日	アブラハムへの約束	創世記15:1-21
	6月18日	父の日	イサクの誕生と奉獻	創世記21:1-8, 22:1-19
	6月25日		ヤコブとエサウ	創世記27:18-29
22号	7月2日		ヨセフの苦難	創世記39:1-23
	7月9日		ヨセフの勝利	創世記50:15-21
	7月16日		モーセの誕生	出エジプト1:22-2:10
	7月23日		モーセの召命	出エジプト3:1-14
	7月30日		主の過ぎ越し	出エジプト12:1-32
	8月6日		葦の海を渡る	出エジプト14:1-31
	8月13日	(平和)	平和を創り出す	エフェソ2:14-22
	8月20日		天からの食べ物	出エジプト16:1-36
	8月27日		十戒を与えられる	出エジプト19:20-20:17
	9月3日		金の子牛	出エジプト32:1-14
	9月10日		幕屋づくりと礼拝	出エジプト40:17-38
	9月17日	(18敬老の日)	カナン偵察	民数記14:1-10
	9月24日		モーセの死	申命記34:1-12

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所
2006年 23号	10月1日		洗礼を受ける主イエス	マタイ3:13-17
	10月8日		荒れ野での誘惑	マタイ4:1-11
	10月15日		弟子の召命	マタイ4:18-22
	10月22日		幸いの説教	マタイ5:1-12
	10月29日	宗教改革記念日	思いわずらいからの解放	マタイ6:25-34
	11月5日		人をさばくな	マタイ7:1-6
	11月12日		岩の上に家を建てる	マタイ7:24-29
	11月19日		一羽の雀でさえ	マタイ10:26-31
	11月26日		重荷を負う者への招き	マタイ11:25-30
	12月3日	アドベント	待降節・平和の主	イザヤ52:7-10
	12月10日	アドベント	待降節・真の羊飼い	エゼキエル34:1-16
	12月17日	アドベント	待降節・大いなる光	イザヤ9:1-6
	12月24日	クリスマス	降誕祭・御子の降誕	ルカ2:1-7
	12月31日	年末	少年イエス	ルカ2:41-52
2007年 24号	1月7日	新年	種まきのたとえ	マタイ13:1-9, 18-23
	1月14日		5000人の給食	ヨハネ6:1-15
	1月21日		嵐を鎮める主	マタイ14:22-33
	1月28日		ベト口の信仰告白	マタイ16:13-20
	2月4日		山上の変貌	マタイ17:1-13
	2月11日	(信教の自由)	善いサマリア人	ルカ10:25-37
	2月18日		マルタとマリア	ルカ10:38-42
	2月25日	レント	見失った羊のたとえ	ルカ15:1-7
	3月4日	レント	放蕩息子のたとえ	ルカ15:11-32
	3月11日	レント	ザアカイの救い	ルカ19:1-10
	3月18日	レント	幼子の祝福	マタイ19:13-15
	3月25日	レント	金持ちの青年	マタイ19:16-30

〈執筆者よりひとこと〉

- はじめてのことで、不慣れなところが多々ありましたが、小さな私たちでも働きに加えられたこと、感謝しております(坂戸教会教会学校教師会)。
- 教会教育がますます重要になってきている昨今、その大切な一翼を担う、この教案誌がこれからも豊かに用いられますようお祈りしています(新座志木教会教会学校)。
- 教会での楽しい思い出の中で子どもたちの信仰は育っていきます。子どもたちの成長を祈りつつ(漆崎春美)。
- 今年もクリスマスが近づいてきています。今まで学んできたカテキズムの言葉が、生徒たちの心の中で自分たちの言葉になって、生徒たちに信仰告白への思いが与えられるようにと祈り願っています(赤石めぐみ)。
- 11月の日曜学校教師研修会に、昨年にもまして多くの方々が集われるよう、心から願っております(木下裕也)。
- 編集作業を通して、主の恵みにあずかることができることを感謝しています。子どもたちの信仰の成長を楽しみに、これからも励んで参りましょう(望月信)。

〈前号(第22号)の訂正〉

- 中学科展開例に誤りがありました。お詫びして、次の通り訂正いたします。

47ページ左19行目

「いま在すもの」→「^{いま}在すもの」

54ページ左33行目

「わざわざ禍い」→「^{わざわざ}禍い」

54ページ右6行目

「まも護って」→「^{まも}護って」

61ページ右5行目

「つまず躓く」→「^{つまず}躓く」

61ページ右7行目

「むさぼ貪り」→「^{むさぼ}貪り」

〈あとがき〉

- 「いのちのパン」をお用いください。ある教会の実践例をご紹介します。いのちのパンを画用紙にコピーして、一日ごとに切り取ります。切り取ると、一枚の大きさがMDの大きさとほぼ同じになります。一週分(あるいは一月分)を重ねてMDケースに入れて、子どもに渡します。そして、日めくりのようにして、一日一枚ずつ用います。いかがでしょうか。ぜひ参考にしてください。
- 中部中会では、11月23日(木・休)に「教会学校教師研修会」を行います。15ページの案内をご覧ください。昨年度に続いて、「日曜学校教師会の形成」を主題として学びの時を持つ予定です。ぜひ多くの日曜学校教師のご出席をお願いいたします。
- 今号にも、教師の声を掲載することができました。皆様の声、教会での実践例などをお寄せいただけると、たいへん嬉しいです。
- 契約の子どもたち、地域の子どもたちを主に導く光栄なる奉仕に続けて励んで参りましょう。秋の伝道、そして、クリスマスの営みに主の祝福が豊かでありますように。

〈購読の申し込み〉

『教会学校教案誌』をぜひご購読ください。別冊『子どもカテキズム』(300円)、バックナンバーもあります(品切れの号もあり)。第2～16号は一部500円で販売しています。副読本のご注文もお待ちしています。

名古屋岩の上伝道所 相馬伸郎まで

〒458-0021 名古屋市緑区滝の水2-2012

Tel/Fax. 052-895-6701

☆ 執 筆 者 一 覧 ☆

まえがき	石原知弘 (北神戸キリスト伝道所宣教教師)
中山仰 (東広島伝道所宣教教師)	小野静雄 (多治見教会牧師)
巻頭説教	分級展開例
相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)	幼稚科
教会学校・日曜学校訪問	坂戸教会教会学校教師会
辻幸宏 (中部中会青年育成委員会)	小学科下級
教師会の学びのために	新座志木教会教会学校教師会
辻幸宏 (大垣伝道所協力牧師)	小学科上級
教師の声	漆崎春美 (金沢伝道所教会学校教師)
玄元清子 (神港教会聖書学校教師)	中学科
聖書研究	赤石めぐみ (西神伝道所日曜学校教師)
吉岡契典 (仙台カナン教会牧師)	成人科
弓矢健児 (新座志木教会牧師)	石丸新 (東関東中会引退教師)
岩崎謙 (神港教会牧師)	いのちのパン (子ども聖書日課)
安田恵嗣 (勝田台教会牧師)	三川栄二 (稲毛海岸教会牧師)
坂井孝宏 (熊本伝道所宣教教師)	吉田櫻子 (稲毛海岸教会)
長谷川潤 (四日市教会牧師)	表紙イラスト
説教展開例	坂野知子 (松戸小金原教会日曜学校教師)
望月信 (高蔵寺教会牧師)	本文イラスト
木下裕也 (名古屋教会牧師)	新海敬造 (名古屋岩の上伝道所)
辻幸宏 (大垣伝道所協力牧師)	吉田櫻子 (稲毛海岸教会)
相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)	

☆ 編 集 部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上伝道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
望月 信	高蔵寺教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』
2006年10・11・12月号 (季刊)
第23号
2006年8月27日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 教育委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上伝道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ 〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田3-1-12 第三記念橋ビル3F
頒価	900円 (本体価格)
